

510  
122



始





21966



# 實際的心理學

東洋大學教授 高島平三郎著

東京 廣文堂書店發行

天正  
14. 4. 20  
丙午



## 自序

凡そ學術の進歩には二つの方面がある。一は縦の方面で他は横の方面である。如何なる學術でも其進歩は是等二方面への進展に待たぬものはない。専門學者が自己の専攻してゐる學術の蘊奥を究めやうとするのは即ち縦の方面への進展であつて其學術の深さを増す所以である。併し學術は學其物の爲めに深さを増すのみでは其價值が甚だ少い。それが人生の實際に應用せられ人類の福祉を増進するに至つて始めて價值がある。それには横の方面へ進展して廣さを増さねばならぬ。それが唯縦の方面へのみ進展するときは愈々専門的となつて其門戸を狭うし又横の方面へのみ擴大するときは益々通俗的となつて其價值を減殺する。洵に是等兩方面への進展が能く



調和して始めて其價値を増大するのである。されば深さと廣さは其學術の進歩及び人生への應用上より觀て兩翼双輪の關係ありといふべきである。之に依つて吾人は通俗化の價値及び職分を知ることが出来る。本書の位置並に使命も亦之を以て推すことが出来やうと信ずる。

纏つて歐洲大戰後の改造世界を觀るに思想生活と實生活とは益々緊密なる關係を有するに至つた。即ち精神科學の應用は擴大せられ我が心理學は教育は勿論或は軍事に或は政治に或は生産工業に或は醫治に今や漸く其範圍を擴げつゝある。この機に臨んで本書の公表を企てたのは蓋し徒爾にあらずと信ずる。

余は少壯より心理學に多大の興味を有し又余が畢生の事業として此の學の横の方面に出来る限りの力を盡したつもりで

ある。併し從來の著書は多く教育に應用すべき心理學であつて廣く日常百般の生活に應用すべく心理書を著したことは無いのである。斯る舉は余自身の經驗に於て少いばかりでなく一般社會少くとも現代の我國には此種の著書に乏しく殆ど全く無いと謂うてもよい。これ余が今日の我國に多くの心理學書の公にせられて居るに拘らず更に本書を公刊せしめるに至つた所以である。されば本書は凡例にも記した如く教育家・宗敎家・實業家・醫家・官公吏・學生・主婦・看護婦等社會各種の方面の人の生活に應用されるやう通俗平易を旨として述べたのである。故に苟も常識を具へ普通の讀書の出来る人ならば何人にでも解らぬことは無いと信ずる。

余は我が國民の一人でも多くが此書に依つて心理學を實生活に應用し改造世界の一員として時勢に適應せんことを切望



して已まぬ。特に近時精神工學として能率増進の爲に心理學を商工業に應用する人々は是等の實驗的應用心理學と共に本書の如き經驗的實際心理學の書をも併せ讀まれんことを勸告する。これ學術の横の方面の進展に努力しつゝある著者としての余の希望である。

大正十四年二月紀元節

著者識

凡例

一 本書は題名の示すが如く日常百般の生活に應用し得るやうあらゆる方面に亘つて心理學を平易に説いたものであるが宗教・道德教育及び家庭との關係に就いては特に重きを置き就中各自の精神修養には最も注意を加へて置いた。故に一般家庭學校教師・宗教家及び心理學に基いて根本的に精神を修養しやうとする人々の讀物として薦めたいのみならず政治家・軍人・司法官・警察官・法律家・醫師・商賈・勞働者・取締人・看護婦等苟も人を取扱ふ職にある人々には是非一讀を煩したいと思ふ。これ從來人を取扱ふ者が人心の作用を知らずして危険不利なことをしたのを恐れるからである。

一 本書は講演の速記をもとにしたのであるから後に屢大斧鉞を加へ殆んど別著の如くになつたやうなものゝ講演時間の都合上から部分に依つて多少説明の疎密がある。此の事は豫め讀者の諒恕を乞うて置く。

一 本書の各題目の下に引用した例話は嚴密に其題目の範圍と一致してゐないで他の題目の例として採用してもよいやうなのがある。これは純科學的説



明を目的とせずして通俗平易の叙述を本旨としてゐる此書としては已むを得ぬ事である。読者はその積りにて斟酌あられんことを希望して置く。

實際的心理學

實際的心理學

目次

第一章 總論……………

第一節 緒言……………

第二節 心理學の必要……………

    (甲) 基礎學としての心理學……………

        (一) 政治學・社會學・史學・經濟學及び法學と心理學……………

        (二) 宗教學と心理學……………

        (三) 精神科學研究の基礎としての心理學……………

    (乙) 應用學としての心理學……………

        (一) 家庭に於ける雇人の使用と心理學……………

        (二) 家庭に於ける和合と心理學……………



(三) 法律家と心理學……………二  
 (四) 醫家と心理學……………三  
 (五) 宗教家と心理學……………四  
 (六) 商人と心理學……………五  
 (七) 客商賣と心理學……………六  
 (八) 教育家と心理學……………七

第三節 心理學を學ぶ注意……………八

第二章 意識……………一〇

第一節 意識の意義……………一〇

(一) 意識とは何か……………一〇  
 (二) 心と意識との別……………一三  
 (三) 意識の明暗……………一四

第二節 意識の統一性及び教育……………一六

(一) 意識の統一性……………一六

(二) 意識の統一と教育……………一七  
 (三) 半意識の教育……………一六  
 (四) お伽噺の力……………一〇  
 (五) 半意識の教育の効果……………一〇

第三章 注意……………一三

第一節 注意の意義及び種類……………一三

- (一) 注意とは何か……………一三  
 (二) 受動注意……………一三  
 (三) 發動注意……………一五  
 (四) 注意の極致と三昧……………一六

第二節 注意と精神の發達……………一六

- (一) 注意の發達……………一六  
 (二) 動中靜觀……………一六

第三節 注意と人生……………一六



(一) 興味と注意……………三九

(二) 注意の方面と人物……………四〇

(三) 恭敬と注意……………四一

**第四節 注意の異常……………四五**

(一) 強迫性……………四五

(二) 道德狂……………四六

(三) 散漫性……………四七

**第五節 注意を良好にする方法……………四七**

(一) 生理的方法……………四七

(二) 物理的方法……………四八

(三) 心理的方法……………五一

**第四章 感覺及び直観(知覺)……………五三**

**第一節 感覺の意義及び屬性……………五三**

(一) 感覺とは何か……………五三

(二) 感覺の質……………五四

(三) 感覺の度……………五四

(四) 感覺の廣さ……………五五

(五) 感覺の長さ……………五五

(六) 感覺の律動……………五六

(七) 感覺の對比……………五六

**第二節 一般感覺……………六〇**

(一) 一般感覺と特殊感覺……………六〇

(二) 筋 覺……………六〇

(三) 腱 覺……………六三

(四) 關節覺……………六四

(五) 權衡覺……………六四

(六) 其他の一般感覺……………六五

(七) 感覺の數……………六五

(八) 一般感覺と氣分との關係……………六五



(九) 氣分と氣質…………… 六六

(十) 厭世觀と樂天觀…………… 六七

**第三節 味覺…………… 六八**

(一) 舌と味覺…………… 六八

(二) 味覺の種類…………… 六九

(三) 味覺と婦人の心得…………… 六九

(四) 味覺と料理…………… 七〇

**第四節 味覺と人生…………… 七三**

(一) 食味と平和…………… 七三

(二) 味覺を以て生活する人…………… 七三

**第五節 嗅覺…………… 七四**

(一) 嗅覺の特性…………… 七四

(二) 嗅覺と本能…………… 七五

**第六節 嗅覺と人生…………… 七六**

香臭と社交…………… 七六

**第七節 皮膚覺…………… 七六**

(一) 皮膚覺とは何か…………… 七六

(二) 皮膚覺の練習…………… 七九

**第八節 聽覺…………… 八〇**

(一) 音の起因及び聽覺の範圍…………… 八〇

(二) 樂音と噪音…………… 八一

**第九節 聽覺と人生…………… 八一**

(一) 音と人…………… 八一

(二) 耳聞の學…………… 八三

**第十節 視覺…………… 八四**

(一) 眼の構造…………… 八四

(二) 光覺と色覺…………… 八四

(三) 色盲…………… 八五



(四) 餘像……………八五

第十一節 錯覺……………八六

(一) 錯覺とは何か……………八六

(二) 錯覺と日常生活……………八六

(三) 錯覺に類した心の働……………八六

第十二節 光色と感情……………九〇

光と色……………九〇

第十三節 視覚と人生……………九二

眼の力……………九二

第十四節 感覺教育……………九二

(一) 感覺の用……………九二

(二) 感覺の練習……………九三

(三) 天才の感覺……………九五

(四) 低格兒及び貧兒の感覺……………九六

(五) 犯罪者の感覺……………九六

(六) 感覺器官の異常と感情状態……………九六

(七) 感覺教育の必要……………九六

第十五節 直観(知覺)……………一〇〇

(一) 直観……………一〇〇

(二) 直観教授……………一〇一

第五章 聯合……………一〇一

第一節 意識流……………一〇一

第二節 聯合の意義及び種類……………一〇三

(一) 聯合の意義……………一〇三

(二) 類似法……………一〇三

(三) 接近法……………一〇六

第三節 聯合の應用……………一〇九



(一) 教育に於ける應用 ..... 一一〇

(二) 文學に於ける應用 ..... 一一二

(三) 科學に於ける應用 ..... 一一六

### 第六章 暗示

#### 第一節 暗示の意義

(一) 暗示とは何か ..... 一一九

(二) 催眠術に於ける暗示 ..... 一二九

(三) 自然界に於ける暗示 ..... 一三〇

#### 第二節 被暗示性と社會生活

(一) 兒童の被暗示性 ..... 一三三

(二) 男女と被暗示性 ..... 一三三

(三) 群衆の被暗示性 ..... 一三三

(四) 社會生活と暗示 ..... 一三四

### 第七章 記憶

#### 第一節 記憶の意義及び過程

(一) 記憶とは何か ..... 一三五

(二) 把住 ..... 一三五

(三) 復現 ..... 一三六

(四) 再認 ..... 一三六

#### 第二節 記憶と年齢及び稟質

(一) 記憶の發達 ..... 一三七

(二) 永續記憶と年齢 ..... 一二九

(三) 器械的記憶及び論理的記憶と年齢 ..... 一二九

(四) 記憶と稟質 ..... 一三〇

(五) 賢人と記憶 ..... 一三三

(六) 愚人と記憶 ..... 一三三

(七) 試験と記憶 ..... 一三三

#### 第三節 記憶と人生

一三三



(一) 記憶と生活 ..... 一三二

(二) 轉職の不利 ..... 一三三

(三) 記憶と探偵 ..... 一三三

(四) 記憶と幸福 ..... 一三四

(五) 良心の苛責 ..... 一三四

(六) 催眠術に於ける現象 ..... 一三六

(七) 前半生の行爲 ..... 一三六

**第四節 良好なる記憶** ..... 一三六

(一) 速に覚えて長く忘れぬこと ..... 一三七

(二) 速に憶出すこと ..... 一三七

(三) 多方面に涉つて覺えること ..... 一三七

**第五節 記憶の教育** ..... 一三六

(一) 良好なる記憶法 ..... 一三六

(二) 生理的要件 ..... 一三九

(三) 物理的要件 ..... 一四三

(四) 心理的要件 ..... 一四五

**第六節 助記法** ..... 一四六

(一) 助記法の心理 ..... 一四八

(二) 助記法の例 ..... 一四九

(三) 數の記憶術 ..... 一五〇

(四) 助記法の價值 ..... 一五一

**第七節 忘却** ..... 一五三

失念術 ..... 一五二

**第八章 想像** ..... 一五五

**第一節 想像の意義及び其特性** ..... 一五五

(一) 記憶と想像 ..... 一五五

(二) 想像の材料 ..... 一五七

(三) 想像の形式 ..... 一五六



(四)想像の作用に於ける分解と結合 ..... 一五九

**第二節 想像の種類** ..... 一六一

(一)受動想像 ..... 一六一

(二)幼児の想像 ..... 一六一

(三)洒落と地口 ..... 一六二

(四)發動想像 ..... 一六三

(五)科學的想像 ..... 一六四

(六)美術的想像 ..... 一六五

(七)實踐的想像 ..... 一六七

(八)宗教的想像 ..... 一七一

**第三節 想像と人生** ..... 一七二

(一)想像と現實超越 ..... 一七二

(二)子供の成長を樂む母 ..... 一七三

(三)結婚の標準 ..... 一七四

(四)國王と乞丐 ..... 一七四

(五)想像の樂と現實の樂 ..... 一七五

(六)想像の利 ..... 一七七

(七)想像の害 ..... 一七六

**第四節 想像の教育** ..... 一七九

(一)生理的要件 ..... 一七九

(二)物理的要件 ..... 一八三

(三)心理的要件 ..... 一八三

**第九章 概念** ..... 一八四

**第一節 概念の意義及び過程** ..... 一八四

(一)思考作用 ..... 一八四

(二)着物の整理と知識の整理 ..... 一八七

(三)男の智慧と女の智慧 ..... 一九二

(四)概念と觀念 ..... 一九五



(五) 概念の過程 ..... 一九七

(六) 概念の發達 ..... 一九八

(七) 概念と言語 ..... 二〇〇

(八) 言語の及ばざる心域 ..... 二〇四

**第二節 概念の種類** ..... 二〇四

(一) 文典上の分類 ..... 二〇五

(二) 心理上の分類 ..... 二〇五

**第三節 概念の必要** ..... 二〇六

(一) 心の敏活なる働と概念 ..... 二〇六

(二) 婦人の實驗談 ..... 二〇七

(三) 心力の經濟 ..... 二一〇

(四) 理會と概念 ..... 二一一

(五) 推理と概念 ..... 二一二

(六) 科學と概念 ..... 二一三

**第四節 明確なる概念** ..... 二一三

(一) 自ら實際に經驗すること ..... 二一三

(二) 廣く經驗を積むこと ..... 二一四

(三) 確實なる經驗を積むこと ..... 二一五

(四) 概念の不明なる原因としての直觀不明 ..... 二一六

(五) 過誤及び不十分の觀察 ..... 二一七

(六) 不完全なる抽象 ..... 二一七

(七) 言語の不適切 ..... 二一八

(八) 時間の經過 ..... 二一九

(九) 實物教授 ..... 二二〇

(十) 學問の目的 ..... 二二〇

**第十章 判斷** ..... 二二一

**第一節 判斷の意義及び種類** ..... 二二一

(一) 判斷の意義 ..... 二二一



(一) 判断と決断との別 ..... 二二三

(二) 肯定判断と否定判断 ..... 二二三

(三) 直覚判断と思慮判断 ..... 二二三

(四) 輕断の弊 ..... 二二三

(五) 過慮の弊 ..... 二三五

(六) 判断と賢愚 ..... 二二六

(七) 包含判断と表出判断 ..... 二二六

(八) 包含判断と表出判断 ..... 二二六

第二節 命題

(一) 表出判断と命題 ..... 二二九

(二) 表出判断と句讀 ..... 二二九

(三) 主辭と賓辭と連辭 ..... 二三〇

(四) 肯定命題と否定命題 ..... 二三一

第三節 判断を誤る原因

(一) 明確觀察の缺乏 ..... 二三一

(一) 菽麥を辨せざる者 ..... 二三四

(二) 思考時間の缺乏 ..... 二三六

(三) 禪と判断力 ..... 二三九

(四) 輕信 ..... 二四〇

(五) 偏見 ..... 二四三

(六) 結論 ..... 二四四

第四節 判断力の養成

(一) 判断力養成の必要 ..... 二四四

(二) 判断力の練習 ..... 二四五

(三) 陽明學の致良知 ..... 二四六

(四) 慾と判断 ..... 二四八

(五) 學校教育と判断 ..... 二四八

(六) 手を動かす學科と判断力 ..... 二四九

(七) 文法と判断力 ..... 二五〇

(八) 數學と判断力 ..... 二五〇



(九) 遊戯と判断力 ..... 二五〇

(十) 判断教育の必要 ..... 二五一

**第五節 判断と教授** ..... 二五一

(一) 判断と教授 ..... 二五一

(二) 自己活動と教育 ..... 二五三

**第十一章 推 理** ..... 二五五

**第一節 推理と臆見** ..... 二五五

(一) 推理とは何か ..... 二五五

(二) 経験と推理 ..... 二五五

(三) 二人のお客 ..... 二五七

(四) 推理と判断 ..... 二五七

(五) 臆見と輕信 ..... 二五八

(六) 上方修業 ..... 二六一

**第二節 歸納推理** ..... 二六一

(一) 歸納推理 ..... 二六一

(二) 判断と迷信 ..... 二六一

(三) 萬有統一律 ..... 二六三

(四) 歸納推理の基礎としての萬有統一律 ..... 二六四

(五) 歸納推理と因果律 ..... 二六六

**第三節 演繹推理** ..... 二六七

(一) 歸納法と演繹法 ..... 二六七

(二) 三段論法 ..... 二六八

(三) 子供の論理 ..... 二六九

(四) 子供の推理 ..... 二七一

(五) 守 株 ..... 二七二

(六) 子供の推理の例 ..... 二七三

**第四節 推理の妥當性** ..... 二七四

(一) 主要性と偶然性 ..... 二七四



第五節 比論

- (一) 比論とは何か……………二七四
- (二) 比論の用……………二七五

第六節 推理と人生

- (一) 推理と先見……………二七六
- (二) 日常生活と推理……………二七八
- (三) 推理と同情……………二八〇
- (四) 知識の擴張……………二八一

第七節 定義

- (一) 定義とは何か……………二八二
- (二) 定義の條件……………二八三

第十二章 統覺

第一節 統覺の意義

……………二八四

- (一) 統覺とは何か……………二八四
- (二) 俳諧師の家僕……………二八五

第二節 子供の統覺

大神と狼……………二八八

第三節 統覺と個性

五十錢の用法……………二八九

第四節 統覺と教授段階

五段教授……………二九〇

第十三章 感情

第一節 感情の意義及び性質

- (一) 緒言……………二九一
- (二) 感情とは何か……………二九一
- (三) 感情の區分……………二九三



(四) 智力と感情 ..... 二九三

(五) 分解と總合 ..... 二九四

(六) 智の人と情の人 ..... 二九四

(七) 相對と絶對 ..... 二九六

(八) 客觀と主觀 ..... 二九七

(九) 感情の特質 ..... 二九八

(十) 感情の方向 ..... 二九九

(十一) 快と不快 ..... 二九九

(十二) 興奮と沈靜 ..... 二九九

(十三) 緊張と弛緩 ..... 三〇一

**第二節 單情** ..... 三〇四

(一) 感情の發達 ..... 三〇四

(二) 單情と氣分 ..... 三〇四

(三) 單情と感覺 ..... 三〇五

**第三節 情緒**

(一) 情緒とは何か ..... 三〇六

(二) 情緒と單情 ..... 三〇六

**第四節 情操**

(一) 情操とは何か ..... 三〇九

(二) 科學的情操 ..... 三〇九

(三) 道德的情操 ..... 三一一

(四) 美的情操 ..... 三一一

(五) 宗教的情操 ..... 三二三

**第五節 表情**

(一) 表情とは何か ..... 三二三

(二) 單情の表出と呼吸 ..... 三二四

(三) 單情の表出と身體の容積 ..... 三二五

(四) 單情の表出と脈搏 ..... 三二六



(五) 單情の表出と體力……………三二七

(六) 情緒の表出と内臟機能……………三二八

(七) 情緒の表出と顔面……………三三〇

(八) 情緒の表出と四肢……………三三一

(九) 音聲その他に於ける情緒の表出……………三三一

(十) 表情と讀心……………三三三

(十一) 心と容貌との關係……………三三四

第六節 感情と人生觀……………三三四

    人生觀の種々……………三三四

第七節 我が國民の缺點……………三三七

(一) 國民性の缺點と感情……………三三七

(二) 一時的……………三三七

(三) 不經濟……………三三八

(四) 性急……………三三九

(五) 不秩序……………三三〇

(六) 早老……………三三一

第八節 感情教育……………三三一

(一) 感情教育の要旨……………三三一

(二) 感情教育の方法……………三三一

第十四章 意志……………三三四

第一節 意志の意義及び性質……………三三四

(一) 精神の三方面……………三三四

(二) 意志とは何か……………三三四

(三) 意志の性質……………三三五

(四) 意と智との關係……………三三六

(五) 意志と所爲……………三三七

第二節 意志の發達……………三三八

(一) 意志發達の三段階……………三三八



(一)衝動……………三三九

(二)子供と大人……………三三九

(三)慾望……………三四〇

(四)意志の本質……………三四一

(五)青年と老人……………三四一

(六)青年男女の墮落する徑路……………三四二

(七)女性墮落の實例……………三四三

**第三節 衝動及び本能**……………三四六

(一)自 動……………三四六

(二)反 射……………三四七

(三)本 能……………三四八

(四)本能の種類……………三四八

(五)自護本能……………三四九

(六)恐 怖……………三四九

(七)營養本能……………三四九

(八)生殖本能……………三五〇

(九)兒童の本能……………三五一

(十)感情的衝動……………三五二

(十一)衝動と道德上の責任……………三五三

**第四節 欲 望**……………三五四

(一)欲望の種類……………三五四

(二)體 欲……………三五五

(三)食 欲……………三五五

(四)性欲・休息欲及び勞働欲……………三五五

(五)睡 眠 欲……………三五七

(六)特殊の體欲……………三五八

(七)飲酒の害毒……………三五九

(八)喫煙の害毒……………三五九

(九)體欲の必要……………三六〇

(十)心 欲……………三六一



(十一) 生命欲 ..... 三六一

(十二) 知識欲 ..... 三六三

(十三) 財欲 ..... 三六三

(十四) 幸福欲 ..... 三六四

(十五) 社交欲 ..... 三六五

(十六) 名譽欲 ..... 三六六

(十七) 權勢欲 ..... 三六七

(十八) 優勝欲 ..... 三六八

(十九) 秩序欲 ..... 三六八

第五節 欲望の異常 ..... 三六九

    偏向及び性癖 ..... 三六九

第六節 欲望の客觀的發現 ..... 三七〇

    萬法唯心 ..... 三七〇

第七節 欲望と修養 ..... 三七〇

(一) 欲望と進歩 ..... 三七〇

(二) 欲望の卑まるゝ所以 ..... 三七一

(三) 欲望の調和的發展 ..... 三七一

第八節 意志作用 ..... 三七三

(一) 動機 ..... 三七三

(二) 思慮 ..... 三七三

(三) 選擇 ..... 三七四

(四) 決定 ..... 三七四

(五) 行爲の條件 ..... 三七五

第九節 意志と品性 ..... 三七五

(一) 人格と品性 ..... 三七五

(二) 徳とは何か ..... 三七六

(三) 品性とは何か ..... 三七七

(四) 意志の鍛錬 ..... 三七八



目次

次

(五)人物の標準……………三七九

目次(終)

# 實際的心理學

高島平三郎著



## 第一章 總論

### 第一節 緒言

心理學といふものは、世間の人か思ふ様に、六づかしくして普通の人には分らぬものではありませぬ。通俗的にお話しすれば、別に専門の學問をなさらぬ方がお聴きになつても面白味の有る學問で、又銘々の仕事の爲に有益なる學問であります。一體學生諸君が平生學問を勉強なさる上、又商業家が商賣をなさる上、政治家が政治をなさる上、宗教家が宗教の研究をなさる上、御婦人方が女中を御使ひなさる上に就いても、悉く此心理學に關係しない事は無いのでありますから、是からのお話も其邊を力めて容易く解剖いたしまして、御参考になる様に致したいと存じます。今日は第一回でございますので、たゞ心理學の入口の御話を致しますのでございますが、段々進んで行くに随ひまして、細かに日



常の事に當倣めて参りますから、どうか諸君が続いて御聴下さる事を希望いたします。

心理学といふと、前に申しました様に、大概の人は、大層六づかしい學問で所謂哲學者の學ぶものであるといふ風に思ひ做して、たゞ學問の名を聞いたのみで、そんな事は逆も我々に分るものではないと考へて居るのでありますが、それは今迄の學者の説明の仕方、書物の書方が悪かつたので、心理学はそんなに六づかしい分らぬ學問では無くて、實は我々御互の有つて居る心の中の事を述べた丈けのものであります。是から私が致します御話も、何か他の事を持つて來て變つた事でも御話するやうに御考になるかも知れませぬけれども、實は諸君の心中の事柄をお話する丈けの事でもあります。それ故私の御話いたしますことが、若し諸君御自身に向そんな經驗は無いと考へられましたならば、御遠慮なく私に御話下さい。私の言ふ事が諸君の經驗に合はないか、或は全く無いならば、それは、私が嘘を言ふ譯であります。併し私は、諸君の心に無いやうな話は、しろと言はれても出來ぬのであります。皆我々の精神作用を考察して特別に其事實を整頓し順序を立て、組織するのが心理学でありますから、私は此の學問が特別に六づかしいものでは無いといふ事を信じて居るのであります。

## 第二節 心理学の必要

全體何故心の學問が大事で有らうかと言ひますと、それは色々な方面から説明が出來ますが、茲に

二つの方面から説明して見やうと思ふのであります。第一は、

(甲)基礎學としての心理学 諸君が御承知の如く、何の學問を致しますにしても、其基礎となる學問を爲なければならぬ。一足飛に直ぐと其學問に掛れば早く出來さうなものであるけたごもさうで無い。矢張り物には次第順序がありまして、土臺から積み重ねて行かねばなりません。丁度御婦人が縫の稽古をなさる時に、一番初には唯縫方の稽古ばかりして、雑巾のやうな物をお刺しになり、それが眞直に縫へて而も縫方が揃つて來るといふ風になつて、初て簡単な單衣を御縫ひなさる様なもので、學問をするにも土臺になるものを先にして置かねばならぬのです。心理学は色々な學問の土臺となるのでございます。學問といふものは、數限りの無い程多く有る者で、今では大概學問の數も極まつて居りますが、今後どれ丈け殖えるか分らぬ。色々な必要に應じてごし／＼殖えて参ります。併しながら之を大きく別けて見ますと。物を取扱ふ所の物質の學問、それから心を取扱ふ所の精神の學問の二つになるのでございます。物質の學問と申しますと、物理学とか、化学とか、動物學とか、植物學とか、礦物學とか云ふやうに、我々の手に觸れ眼に觸れる事の出來る物に就いての學問であります。その方の學問の土臺となる者は、之を物理学と申して、丁度心理学に對した學問であります。

(一)政治學・社會學・史學・經濟學及び法學と心理学 そこで心に基く學問には、先づ我々を治めるための政治學といふのがあり、或は世の中の事を研究する社會學といふのがある。又世の中の變遷を



書いた史學があり、或は商工業上の原則を研究する經濟學、或は國家のお掟を研究する法學があります。是等は何れも皆人の心に關係したものであります。即ち我々の心から政治といふものも起れば法律も經濟も或は道徳上の事も出て居るのでございます。それですから唯今挙げましたやうな學問は、皆心理學が土臺になります。併しかく申すと諸君は、なにそれは手前味噌ではないか、我々は必ずしもさうは思はぬと言はれるかも知れませぬが、決してさうで無い。よく考へて御覽になると直ぐに分ります。經濟學といふものはどうして起りますか。全體經濟學では需要供給といふことを第一に言ひますが、需要といふのは人間があれが欲しい是が欲しいと言つて求める欲望です。人間の欲望が物の價値の一番土臺になつて居るのでございますから、人間の心の有様をよく知らなければ、本當の經濟學は分るものには無い、金に價値がある銀に價値があると申しますが、其の價値は何から出て來たのでせう。皆人の心から出て來たのであります。「猫に小判」といふ諺がありますが、猫には人のやうな心が無いから、黄金を前へ持つて行つても、瓦や石と變つた事は無いのです。若し人のやうな心が有るならば、猫の前に小判を出せば、急いで持つて行くかも知れませぬ。物の價値は總て我々の心から出て居るのでありますから、經濟學も心理學が基礎になつて居るのです。すべてかういふ學問を根本的に學ばうと思ふ者は、どうしても心理學の知識が無くてはなりません。

(一) 宗教學と心理學 又宗教學といふものは、宗教を以て人に信仰を教へるといふので無しに、宗教

を學問として研究するのですが、是亦心理學を措いて深く進むことは出來ぬ、例へば私其の信仰はどうして起つて來るか、佛といふやうな考はどう云ふ處から出て來るか、何故猿や蟹には宗教が無くて人に限つて有るかといふやうな事は、心理學に依つて始めて解るのであります。

(二) 精神科學研究の基礎としての心理學 諸君が是から學問をなさるに當つては、物質に關係した科學の方は暫く措きまして、精神に關係した科學を修めやうと思召すならば、其順序として一通り人間の心はどう云ふものである、其働はどう云ふものである、どう云ふ原則に依つて働いて居るものであるといふ事を御承知になる事が大事であります。併ながら又今までの學者は心理學を學ばぬでも歴史もよく出來、經濟も政治もなかなか出來た人があるではないかと仰しやるかも知れませぬが、それは昔は別に心理學といふ名は無かつた、けれども心の學問は皆學んで居つたのです。殊に佛敎には今日の心理學よりも精しい程な精神の説明がある。それは學説としては今日と違つた事があり、今日の學説から見れば間違と思はれるやうな點もありますけれども、何しろ非常に精しい精神上の説明をした敎があります。其他の學問にも皆不完全ながら精神の説明が其中に含まれて居るのです。それ故以上に挙げましたやうな學問を根本的に學ばうと思へば、先きに精神上の事を知つて置くのが最大事なことであります。併ながら諸君は、是からさう云ふ専門の學問をなさらうと云ふ御方では無く、既に學んでお出なさる方もありませうし、又私が講義いたしますのは、通俗に御話するのでありますから、



是等の事は簡單にしてこれ丈けに止めて置きませう。

(乙) 應用學としての心理學 前のは他の學問をする土臺であるといふ必要の上から御話したのでありますが、此度は皆さんが色々な業務をお執りなさる上に心理を應用することの必要なことを御話いたしませう。是は直接皆さんに關係する事で、私の御話することが直ぐに應用の出来る譯でありますから、私も注意して御話いたしますが、諸君も注意して御聞き下さる事を希望いたします。

(一) 家庭に於ける雇人の使用と心理學 唯今も申しました様に、心理學といふものは、御婦人方でも又ごなたでも別に一科の學問としてはなさらぬでも、多少此學問の知識を持つて居られて實際に應用して御出なさるのであります。例へば女中を御使ひなさるのにも、こちらが言葉あら／＼しく叱り付けて使ふと先方も蒞弱のお化のやうにぶり／＼して、碌に御辭儀もせずに出て行く。そこでこちらでは行儀の悪い女である禮儀を知らぬ女であると思ふのであります。女中の方では「宅の奥さんの様な人は有りはしない、人を使ふ法を知らぬ」といふやうな譯で、反抗心を起すのです。そこで毀さぬでも宜い茶碗を毀はし、引繰り返さぬでも宜い土瓶を引繰返すやうなことになるのでございます。すべて聊でも自分に面白く無い心が有ると、物を洗ふのでも何でも旨く出来ない。是れ即ち心理の原則が女中と奥さんとの間にちやんと行はれて居るのです。併しかう云ふ原則の應用は、態とした譯では無くて、偶然にさう云ふ應用が出来たのでせう。かういふ時に、學問はなくとも伶俐な人はすべて、人

を使ふには斯う云ふやうにしないでならぬ、斯う云ふ場合には斯うすれば人が喜ぶ、斯うすれば人が服するといふ事を知つて實行するのです。例へば御使にやるのでも、外から歸つて來たら「寒かつたらう、御苦勞だつたね」と言はれるのと、黙つて居つて其處へ來るとすぐに「何をして居た、大變遅いぢや無いか」と言はれるのとは、聞く方の人に響き方が大そう違ひます。是皆精神作用でありますから、かういふ場合に小言を言つて叱るのにも、一應は其人に「寒かつたらう」と云ふ事丈はこちらが認めてやつて、先づ「御苦勞だつた」とねぎらつてやり、それから後に「大變遅かつたがどうした、心配してゐた」といへば、先方は苦しいです。若し遊んで居つたのなら、眞綿で首を締められるやうに、「悪い事をした早く歸れば宜かつた」と思つて、氣の毒になりますから、此次からは急いでせう。さう云ふやうに、人は使ひ方に依つて違ひます。

又諸君が他へ御客にお出になつて洋盃コップを出された時、すかして御覽なさい、大概曇が附いて居ます。夏の暑い時に曇の出るのは宜いものでありますが、洋盃に曇が出たのは餘り感心しない。これは何故かといふに、大概不注意で、コップを洗ふのに氣を附けずに好い加減に水を掛けてゴチャ／＼やつて置くからです。そこで神経質の主人などは細かに調べて、「これは不可ぬ、お前は不注意だから」といつて叱る。さうすると女中は、「チャンと洗つて拭いてあります、決して曇は附いては居りませぬ」と言ふ。主人は更に「好い加減な嘘を言ふな、此の通り附いて居るでは無いか」と言つて叱る。是は主



人に取つては無理も無い、心理學を學ばぬ人の考へでは、自分の眼に見えるから曇が有るといふ筈です。そこで女中が横着だと思つて仕舞うのです。所が心理學から調べて見ると、さうで無い。諸君は、かくいふと或は不思議に思召すかも知れませぬ。併しそれには理由があります。吾々は皆同じ様な眼で見居るやうでありますけれども、學問をし練習をした眼と、少しも練習しない眼とは違ひます。それで私共に見える塵芥でも、山出しの女中に分らないのです。随つて女中は自分では一生懸命に拭うて奇麗だと思つてコップを持つて來るのですが、彼女に見える塵芥や曇が殘つて居るのです。それですからかういふ場合にはよく落ち着いて教へてやるがよいのです。即ち前の場合なら、徐に女中を呼び、コップを示して、「御前はよく洗つて呉れたが、まだ斯う云ふ物が附いて居る。お前には分らないか」と云ふと、「あゝさうでしたか、氣が付きませぬでした」と答へるでせう。是は必ずしも胡魔化すのでは無く、本當に眼に見えぬことがあるのです。

是を以ても、先生が小學校で子供に色々な物を見せて眼の働きを養ふのが、如何に大事であるかといふ事が御分りになりませう。即ち何の爲にかゝる事をするかといふに、すべて五官は棄て、置いて鋭くなるものではない。昔から英雄豪傑の眼容は違ひます。眼容は人の心の有様をよく現はすもので、太閤秀吉の眼は炯々として人を射るといふ形容が使つてあります。又諸君の中には、福島大將を御存知であつた方が有りませう。あの人は別に身體が大きくは無い、容貌も殊更變つた所は有りませんが、

あの人の眼は一種鋭い所がある。これは方々を旅行して非常に注意し非常に困難して心に少しも油断がないから、それが眼容に現はれて常人と違つて居るのでせう。尤も眼容が違ふと言つても、狂人の眼の釣上つたのとは違ひます。つまり心が發達すれば眼容まで違ふほどに眼がよく働くやうになるのです。それ故人を使ふにしても、何か缺點があつたからとて、すぐ不注意であると言つて叱る譯にはゆきませぬ。さう云ふ時には、よく教育を施してやるがよいのです。心が發達すれば五官も必ずよく働くものです。西洋各國では、子供の職工などには皆教育を施すのです。何の爲にするかといふに、それで段々精神を養つて感覺などが鋭くなつて來るから、物を毀はしたり拙くしたりする事が無くなるからです。それ故教育ある女は、女中であつても、物を毀はすやうな過失が少いけれども、教育の無い者は、氣を注げさせてもいろ／＼の過失をいたします。

私は唯今眼の方ばかり話しましたが、手でもさうです。段々精神が發達して手の練習が積んで來ますと、綿密な働きが出来るやうになります。手の先でちよつと弄つても、非常に細かい物がよく分るやうになるのです。其證據には、山出して學校へ行つたこともない女中などに、絹針を持たして御覽なさい。逆もこれを以て物を縫ふ事は出來ません。若し縫はしたら、絹針が百本有つても忽ちにしてびん／＼折つて仕舞ふでせう。それは手の練習がなく、又精神が發達して居ないからどの位にやつたら宜いかといふ事の見當が付かぬ爲めです。それですからさう云ふ女中に何か縫はせるには、大きな



特別製の針を誂へてやらなければ働きが本當に出来ないでせう。此の如く唯一つの感覺の御話をしましても、心理學を知つて居ると、心は養へば斯うなり、養はずに置けば斯うなるといふ事が分りますから、人を扱つて行く上に大變な利益があります。

(二)家庭に於ける和合と心理學 右は家庭の御話であります。唯女中を使ふことばかりで無く、例へば主人公が細君に對し、又細君が主人公に對し、どう言つて慰めたら宜いか、どうやつて同情を寄せたら宜いかといふことを知つてすれば、家が圓く治まるのですが、其由つて來る所はつまり精神を適當に働かして行くことに依つて出來るのであります。それゆゑ先きに言ひました様に、心理學の書物を讀まぬでも、麗はしく治つて居る家庭には心理學の原則がよく應用されて居るのです。私共の眼から觀ますと、ハ、ア此家は主人公も細君もよく調和して行くように心の働きが行はれて居るのであるといふことがよく分ります。之に反して夫婦喧嘩をするると云へば、どう云ふ譯で夫婦喧嘩をするか、詰り氣持が悪いから仲が悪くなるのでありますから、其氣持を悪くする原因を調べれば家庭の和合せぬ所以が分つて來るのです。

唯家庭の有様を御話しただけでも、此の如く、心理學を知つてゐると知らないで居るのとは、大に違ひます。兩親の心を知つて居れば、どう云ふやうに事へねばならぬといふ事がよく分ります。一例を挙げますと、年が寄ると誰でも吝嗇になつて物を欲しがらる様になるものです。人は何でも自分に無

い物は欲しくなるものです。年が寄ると自分の壽命が短くなつて生きて居る間が少いから、總て物が欲しくなるのです。それと共に、大そう神経質になつて、僅かな事にも非常に喜び、又僅かな事にも非常に腹を立てるものです。是は萬人一樣に來る精神の働きであります。さう云ふ事をよく知つて居ると、阿婆さんが大そう吝嗇になり、阿爺さんが大そう慾張つて來たといつても、決してそれを悪く思うたり怨んだり怒つたりする事は無い筈です。却つて人間の天性であることが分れば「阿爺さんもお年が寄つた御氣の毒である、どうかして慰めて上げねばならぬ」と云ふ心が起るでせう。ちつよと若い者の考から申しますと、阿婆さんに是ばかりの物を上げて仕方が無いからもつと好い物を上げやうと言つて、その品物を他所へ持つて行く、或は阿爺さんに斯んな物を上げると御笑ひなさるだらうと思つて、遠慮して贈らないといふやうなことがあり勝です。併しさう云ふ事は、心理の原則、人間の心の働きを知らないものと云はなければならぬ。人が六十にも七十にもなると、僅かな物でも、阿爺さんに上げやうと思つて買つて來ました、阿婆さんに上げやうと思つて買つて來ましたといつて贈られると、假令自分がそれを用ゐないまでも、非常に感泣して大そう喜ばれるものであります。さう云ふ事も心理の學問をして居ると一層細かに分りますし、又女にしても若い女は斯う、年寄つた女は斯うといふ事がよく分ります。尤も此方は私よりは諸君の方がよく御存じかも知れませぬ。子供でも幼い子は斯う、少年少女は斯うといふやうに、時期によつての違ひが分り、又一層大きくいへば、



支那人は斯う云ふ心、英吉利人は斯う云ふ心、亞米利加人は斯ういふ心といふ風に、國民精神の差異が分ります。そこでそれに應じて交際して行くから、何をしても旨く行くのです。

(三) 法律家と心理學 又法律家などが心理學を知らぬといふ事は危険な事です。法學には別に心理學といふものは無いけれども、法律の中に書いてあることは皆精神から起つた事であり、人を殺したもので、故殺と謀殺とは大さう違ひます、故殺であれば生命は助かるが、謀殺になれば死なねばならぬ。生死の境であるから、裁判をする人は、深く人の精神上の事を知て居なければなりません。獨逸の名高い學者にヘッケルと云ふ先生が有ります。此人は「世界の謎」といふ名高い書物を書きましたが、其中に、法律家が少しも心理學の事も知らず、一體に人といふ者を知らずに、唯刑法第何條といふやうな事ばかりで人の罪を斷じて行くといふ事は、非常に危険である。故に法律家は、日本も心理學、生理學其他總て人の心身に關した學問をせねばならぬと云ふ事を述べて居りますが、日本の法律家も此頃は、心理學の事に注意して居るやうです。判事の方からいへば、自分は唯法律何條に據つて裁判して居るからよいかも知れませぬけれども、裁判される人になつて見れば非常に危険な話です。法律家が心理學を知つて居ると居らぬでは、裁判される者の利害に大さう關係があります。斯う云ふ人が斯う云ふ悪い事をしたけれども、それは一時の怒に乗じて爲したのであらうか、或は前に之を爲やうと決心したのであらうか、それを調べるといふ事は大さう必要であります。私は有名な辯

護士の辯論などは喜んで速記を見ますが、中には巧みに心理上の學說を應用して説いて居る人があります。さう云ふ者に辯論される事は、被告に取つては幸福なことであり、それゆゑ法律家たる辯護士或は裁判官は、どうしても自分が其職務に應用する點からも心理學上の知識が無くてはならぬわけです。全體心理學を研究したと、しないに關はらず、法律家は先刻の家を治める奥さんと同じやうに、實は皆心理學上の知識を應用して居るのであります。

(四) 醫家と心理學 それから今までは醫者は身體を治すのであつて、心の方は宗教家や教育家が治すから、醫者には關係ない。醫者は藥の分量を知り病氣に對して其療法を施して行けば宜いといふやうな考が多かつたのです。然るに段々學問が進んで來て、人間の身體と精神とは殆ど區別する事が出来ない、身心の關係は密接不離のものであるといふことが分つて參りましたから、亞米利加や歐羅巴では、宗教家も、生理學や生物學を調べて、人の身體を救ふと共に精神をも救はうと努め、又醫者の方は、精神上的の學問を修めて、心の上から病氣を治して行くといふやうに進みつゝあるのです。さうなつて來なくてはならぬ筈です。我國でもさう云ふ傾向が段々現はれて參りましたのは喜ぶべき事です。此中には御醫者の方も御出でになりませう。此方々は既に御經驗上から幾らも心理上の事を治療に應用して御いでませうが、モウ一層専門的知識に依つて銘々の業務に應用なさるならば、非常な効果を奏すること、思ひます。同じ藥を盛るのでも、患者が醫者を信用するとしなないとでは、効果が非常に



違ひます。子供の御醫者で有るなら、子供の心理を知つて居ると知らないのとは、治療の上に大そうな違ひがあります。是から後にもだん／＼御話しますけれども、幼い子供は自分の身體の事でもチャンと場所を極めてどう斯うといふことを言ふ事は出来ない。例へば、身體の痛いといふ事でも、何處が痛いといふことを大人の様に確りと指すことは出来ないものです。是は御婦人方は御經驗もありませうが、四つ五つ位の子供が病氣の時などは、ボンボンが痛いと言ひます。痛い所がお腹で無くても矢張りボンボンが痛いと言ひます。併しどうも頭に熱があるやうだから、そこを壓へて、此處が痛いかと申しますと、其處が痛いといひます。又足を押へて、此處が痛いかといへば、其處が痛いといひます。つまり何處が痛いか分らぬ、唯痛いといふ丈けで、押へた所は何處でも痛いといひます。さう云ふ時に子供の心理を知つて居る人は、何處といふ事なしに色々な處を押へて見て、子供が強く押へられて痛ければ顔を顰める處がある。ハ、ア此處が痛いのだなといふ事が確實に分ります。さう無くても病氣の徴候で大體分りませうけれども、確實に分るには一體に顔なり足なりを押へて此處が痛いといふことを察し、即ち人間の精神作用の發展する状態をよく知つて居つて診断をし或は藥を盛るといふことは、醫者に取つても大事なことであります。

**(五) 宗教家と心理学** それから又宗教家に取つて心理学の必要なことは勿論の事です。宗教家が色々な説教をしたり人を感化して改過遷善させるには、皆此心理を應用して居るのです。昔、心理学と

いふ學問の名が無い時から、悉く應用して居るのです。今までの佛教には唯議論といふ立派な心理学が有つて、佛教家はそれに依つて研究して居たのです。それも誠に貴重すべき著述でありますけれども、今日科學的に發達し來つた所の心理学の知識を加へて宗教の研究をするならば、益々完全な應用が出来るでせう。

**(六) 商人と心理学** 又商人が心理学を知つて居れば、色々取引上から所謂機を見ると云ふやうな事に非常に役に立ちます。併しそんならお前は株屋にでもなつたら旨く當つて、大金を儲け、所謂成金にでもなるかと問はれると、それはさうはゆきませぬ。すべて物には熟練といふことが有りますから、たゞ基礎にばかり通じても成功するものではありません。併し私は本氣に商賣をやる氣になつたら必ず出來ると思ひます。幸か不幸か私は投機的のことは嫌であります、第一に株をやる人といふ者は、機先を制することが必要である。即ちズツと先の様子を見て行かねばなりません。全體人の感情といふ者は、始終一方の端から一方の端へ時計の振子のやうに移つて行くものです。此原則を巧みに應用する人は、商業上何でも成功するものです。彼の紀文大盡は、「沖の暗いのに白帆が見へる、アレハ紀の國蜜柑船」といふ歌が有る位有名の人ですが、其金儲をしたのは、全く機先を制して人の要求する所を知り、斯う云ふ時機には必ず斯う云ふ要求が起つて斯う云ふ結果になるだらうといふことを豫知し、尙いろ／＼の事から判斷し決心して、人のせぬ事を斷行したのであります。大體から云ひ



ますと、我國の近頃の社會でも、三十七八年の殺伐な血腥い事ばかりに人々の心が激昂して居つた後では、もうさう云ふ事には厭きて居りますから、必ず其反動が來るのです。元祿風とか何とか言つて、一時非常に派手な事が流行り、奢侈贅澤といふことが増長いたしました。併し夫も亦何時までも續くものでは無い。その後は大分悲觀的な考が起つて來ましたが、それが世界大戰ですつかり變りました。このやうにいつでも人心は大きくも小さくも變ります。商人は、其人氣に乗じて品物を商ひ、機先を制して先へ／＼と見通して行かねばなりません。さうすれば、自分の商業上にも非常に利益する所がありませう。お客に對するにしてもさうです。此人は斯う云ふ風にやつて居るからかう仕向けて行かねばならぬといふことを考へ、人を外さない様にする必要があるですが、是れも矢張り心理學が應用されて出來ることです。

(七)客商賣と心理學 私に常に下の如くに思ひます。宿屋とか料理屋とか總て御客を扱ふ商賣人は皆、應用心理學を知つて居るのです。假令心理學といふ事は知らないでも、實際ちよつと人を見て此御客は此位の部屋へ通すが宜いとか、此御客には斯う云ふ物を持つて行けば氣に入るとかいふ事を考へ、それを巧くやる處は繁昌するのですが、下手な處は段々寂れてゆくのです。それは、客が、彼處へ行つても面白くないとか、待遇が悪いかいふやうになつて仕舞ふのです。是等の事ばかりでは無く、拘摸のやうな者は、巧に心理學を應用して居るのでございます。拘摸の心理上の知識はえらいものです。

併し私は拘摸になつたのではないから精しい事は知りませぬけれども、拘摸が人の物を盗む時には確かに、人の注意が他の方へ馳せて居る時をつけ込んで巧にやるのです。かやうに善い事でも悪い事でも皆心理學を應用しないものは無いのです。此點から言へば、私が特別に講義するまでも無く、皆さんが心のことは實際に知つて御出でなさるわけです。假令己はそんな事は知らぬと仰しやつても、必ず實行して御出でなさるのです。今茲に寄り合つてお出なさる皆さんには、現に心理作用が働いて居るでせう。例へば、私の講義に對しても、「此寒いのには随分よく饒舌る、好い加減に止せば宜い」といふやうな考を起されるのも心理現象であり、亦「一體心理學といふものは六づかしいと思つたが、存外やさしいものである。ア、云ふやうに説かれると面白い又此次も出て來て聽かう」といふやうな考を起されるのも、矢張り心理作用であります。寒いと思ふのも退屈と思ふのも喧ましいと思ふのも心理現象なら、悲しい嬉しい腹が立つといふのも是皆心理現象であります。それゆゑ腹でも立つた時には、ハテナ、此心理現象は何だらうと考へて御覽なさい、ハツと細君を叩かうと思つたことも中止せられて自然と手が下つて仕舞ひます。それですから心理學といふ學問はなか／＼善い學問です。

(八)教育家と心理學 それから教育をする人、即ち學校の先生に心理學の必要なことは言ふ迄も無いことです。之を御話しすれば幾らも精しい御話がありますけれども、別に言ふ迄もない事ですから精しくは申しませぬ。一體人の心をよく知つて居らねば之を教育して行く事は出來ません。兵法にも



「敵を知り己を知れば百戦して百勝す」といふことがある様に、生徒の心を知つて居り、さうして其心に應じて教育して行くことが必要です。人を見て法を説くといふことは、宗教家のいふ所ですが、教育に於ても亦その通りであります。子供に六づかしい話をするとはそれでは分らず、又あまりやさしい事ばかり言つて居ると詰らぬと言つて喜ばぬものです。そこで餘りやさしくも無く、餘り六づかしいも無く、聽いて居ると丁度分るといふ位の程度のことか誠に面白いものです。かういふ事で無ければ子供の注意を惹くことは出来ません。子供でなくても大人でもさうです。人に物を話して聞かすには、宗教家でも演説家でも教育家でも心理を應用せねば成功は出来ませぬ。それですから若し私の講話が巧く出来ないといふ譯であります。併しながら理屈はさうであつても、應用の如何は其人の技倆に由るから、私の話が面白く無くても、心理學が悪いのでは無い、つまり私が悪いのであります。先づ是丈のことを御話いたしますと、心理學といふ學問は純粹な學問としても又應用の學問としても、どの位人生に大事なものであるか必要なものであるかといふことは御分りになりましたらうと思ひます。是から進んで心の働きの基礎になる事から御話いたして行きます。

### 第三節 心理學を學ぶ注意

心理學を學ぶにはどう云ふ事が最も大事であるかと申しますれば、書物を讀むとか講義を聞くとか

いふ事は無論必要として、次には先刻申した様に、「心理學の話は何か他人のことでも説いて居るやうに思つたが皆己の心の中の事を言つて居るのである」と考へて、自分で自分の心を反省して御覽なされる事が最も大切です。唯聞いて居ればかりではとても心理の事は分りませぬ。併し今此處で餘り御考へになると、私の言ふことが耳に這入らぬかも知れませぬから、御歸りになつてから、御寢みになる前に、一體どう云ふ事を言つたのかと、くりかへしてよく御考へなさると必ず分りませう。



## 第二章 意識

## 第一節 意識の意義

(一) 意識とは何か 今日では意識及び注意の御話ですが、先づ意識とはどう云ふことであるかといふことをお話いたしませう。此處には大分佛教家の方々が御出で、あります。佛教で申す六識の意識とは違ひます。心理學で申す意識といふことは、第六識より一層廣い一層簡單なことであります。今我々の心を假に圓い形のものとしてお話し致しませう。といつて、心は圓くも無く四角でも三角でも無いのです。それに就いて面白い話が有ります。皆さん三宅雄二郎と云ふ人を御存じでせう。雪嶺博士と言つて有名な人であります。餘り物を言なぬ人であるが、なか／＼面白い演説などをする人です。此人が鳥尾待庵さんに初めて逢つた時に、二人ながら蛇と蛙と睨つくらをして居る様に、顔を合はした切りで何も言はずに二時間ばかりもじつとして居つたさうです。よく辛抱したものですね、所が鳥尾さんの方から、お前の心は三角だと突然言はれたさうです。その時に三宅さんは、いや四角であると言つたので、ごつちも勝負が無くなつて仕舞つたといふ話であります。是れは多少事實のあ

つた事ではありませうが、此の問答は他から想像して作つたことです。併し作り話にしても大きな面白い話です。そこで何故勝負がないかといふに、三角だといつても心は三角なものでも無く、四角だと言つても四角なものでも無い。ごつちも無い物同志の喧嘩だから勝負なしなのです。金の有る者と無い者とが喧嘩して、無い者が負けた時には宜いけれど、有る方が負けた時には取られるから不可ませぬ。ごつちも無い同志なら、取り遣りが無いから勝負は無い。それと同じ様に、心は三角でも四角でも無いから、何と言つても同じ事なのです。

そこで心は無論圓いものではないけれども、此處に心の範圍を假に喩へて御話いたしますと、先づ皆さんは唯今私の話を餘程熱心になつて聽いて下さるやうでありますから、私の話は必ず御分りになつて居ませう。皆さんが熱心に御聽きなされるかなさらぬかといふ事は、皆さんの御顔を見ると直ぐに分る。皆さんは今不熱心では無い様ですが、若し私が餘り長い事を言つて居ると皆さんは退屈なさつて段々と御分りにならぬ様になる。私の言ふ事は明瞭であつても、皆さんの心に確りと受取らなくなつて陸上ボートを御漕ぎになるやうになるのです。全體、ボートは海で漕ぐものであるけれども、壘の上で漕ぎ、甚だしきは五百燭光の電燈が點いて居るに拘らず鼻から提燈を出すやうになり、一層甚しくなると心は働かず、段々と暗くなつて物が分らぬやうになつて仕舞ひます。此處に於てそれほごにならぬにしても御家へ御歸りになつて、一時間二時間の後十時頃になつて御寝みなされると、初めは



ウツラ／＼となり、遂には全く分らなくなつて仕舞ひます。其時は心は全く働かなくなるのです。暫くして夢を御覧なさるでせう。さうすると心が少し頭を擽げて幾らか働き出すのです。餘り夢が強いと其爲に眼が覺めて仕舞ひます。さうすると心がちやんと働いて参ります。假令夢が無くても毎朝眼が覺めた時には心は明かになります。併し疲れて眠くなつて來ると分らなくなつて仕舞ふのです。眠くならぬでも、突然頭を叩かれるとか、或は氣絶して倒れて仕舞ふと、心が働かない。是は日常皆さんが經驗して居られる事でありませう。勿論氣絶することを度々御經驗になつては不可ませぬが、その外皆さんの經驗して居らるゝ有様を現はす爲めに、心を圓い物に喩へて圖に描くと第一圖の如くになります。即ち外の線は心のボンヤリして分らぬ所を示し、段々と真中に行くに隨つて明瞭になり、一番の中心は最もよく明瞭に分る所を示します。即ち一番中心は心が最明瞭であつて、中の圓の處はほんやり分り、一番外の圓の處は全く分らぬ處であります。斯ういふ様に、私共が覺えがあり覺めて居る有様を名づけて意識と申すのです。

第一圖



なります。即ち外の線は心のボンヤリして分らぬ所を示し、段々と真中に行くに隨つて明瞭になり、一番の中心は最もよく明瞭に分る所を示します。即ち一番中心は心が最明瞭であつて、中の圓の處はほんやり分り、一番外の圓の處は全く分らぬ處であります。斯ういふ様に、私共が覺えがあり覺めて居る有様を名づけて意識と申すのです。

皆様は意識を持つてお出になりますから、私の言ふ事が明かにお分りになるのです。所で先刻も言つた陸上ボートや鼻提燈のやうな時は、半分分つて居るので、之を半意識といふのです。夢も半意識であります。夢は全く分らぬことは無いので漠然と覺えがあります。然るによく眠つた時或は氣絶した時は、全く覺えが無いから、それを無意識と申します。それから又真中の一番よく分る點を明識と申します。こんな言葉は一々覺えてお出でにならぬでも、皆さん方の實際の心に在りますから、すべて心は明かな時と、ボンヤリした時と、全く分らぬ時と、色々違ひがあるものであるといふことを御記憶になつて居ります事が必要でございませう。これが意識の説明であります。

(一) 心と意識との別 皆さん方が色々な書物をお読みになると、心といふ字が使つてあつたり、意識といふ字が使つてあつたり、精神といふ字があつたり、心意となつたりして、お惑ひになりませうから、茲に區別を申して置ませう。心と申しましても、精神と申しましても、心意と申しましても、三つは同じものであります。唯字が違ふのみで譯は同じことであります。即ち通常皆さん方の有つて居られる心です。皆さんは苦しい時には苦しいと思ひ、悲しい時には悲しく感じ、或は決心して事を行ひ、或は忍耐して情を抑へる等のことがありませう。さう云ふ働きが即ち心であり、精神であり心意であります。併ながら心と云ふものは、自分の生れた時から唯今まで働いて來たところの總ての働きを皆心と言ふのです。それ故十年來の心、二十年來の心といふやうに、銘々に經驗したことは皆積つ



て心となつて居るのです。人は生れた時には誠に單純で何の考へも無いのですが、段々年取るに随つて複雑な事と困難な事に出會つて發達して來るのです。故に心はかゝる出生時から現在の働き即ち意識が重り重つて來た全體であります。一體皆さん方の經驗は皆違つて居るものです。殊に此の席には婦人有り男子有り老人あり青年あり宗教家あり教育者もあり又商人も有るから、著るしく經驗が違つて居るのです。併し唯今此瞬間には皆同じやうに私の講義を聴いてお出になるのであるから、此場合の經驗は皆同じことです。此事を考へて見ると、實に人間の因縁といふものは不思議なもので、又面白いものであります。何十年來いろ／＼違つた經驗をして來られた皆さんが、現在の心としては一様に此の講義を聴いて居られるといふのは實に不思議というてもよいのです。そこで今一度くりかへしていへば、心といふものは生れてから今日までずっと續いて經驗して來た全體をいふので、現在の心は意識であります。それ故心といふも意識といふも違つたものには無い。唯過去及び現在の總稱と、現在だけの特稱との別があるに過ぎないのです。是は應用上には別に必要はありませんが、學問をなさる上に必要でありますから、一寸説明をいたして置きます。

(三)意識の明暗 前に御話した様に、人の心は何時でもボンヤリした時から全く分らぬ時に移り、又ボンヤリした時から分らぬ時、或は最も明かに分る時に移るといふ様に、始終繰返して居る。故に熟睡して夢も何も無い時は無意識でサツパリ分らぬものです。併し外からは始終色々な刺戟が有ります。

例へば鼠が枕元を駆け廻つたり、盜賊が覗いて居たりしても、コチラの方に感覺が働かないから、全く覺えが無い。即ち意識が無いのです。曉方になつて覺めぎはになつて來ると夢を見ます。夢を見ないにしても段々と眼が覺めて來てボンヤリとなります。その時には眼は覺めて居てもまだよく物が分らず、なんだかゴト／＼音がするとか、人が通るとかいふことは分るが、誰が通るのか分らぬのです。それから起きて顔を洗つていよ／＼火鉢の前へでも向ふと、チャンと明かに今日の新聞も分る、今の聲は誰だといふことも分つて來ます。その中にも相場でもやる人は、株の高低といふ所を見ると非常に注意するから、明識が起つて來る。小説の好きな人ならば新聞の續き物の中の人物のことに心を寄せて、あの人はどうしたらうといふ事が心の中に現はれて來るのです。丁度株屋が株の高低を中心に持ち來すと同じ様に、小説中の人物が中心になつて來るのです。又御婦人が今日のお菜は何にしやうかと思つてお出でなさる時には、その新聞の「今日の料理」といふ欄が直ぐに眼に入つて明識を占めるやうになるのです。かやうに大事なことは何でも明識に持ち來たされるのです。ボンヤリした心ではいけない。何時でも中心の一番明かな所に入つて始めてよく分るのです。併し別に心に中心が有るのでは無いけれども、或る事物に心を寄せれば、夫が中心になるのであります。此の事は次の説明に依つて一層よく御分りにならうと思ひます。



## 第二節 意識の統一性及び教育

(一)意識の統一性 意識には統一性があります。心のボンヤリしてよく分らぬ時には色々の考が續々と起つて来て統一が充分で無いのです。例へば、御婦人などが家に居られて別段用事も無く子供は遊びに行つて仕舞ひ、御主人も勤に出られて一人で留守番をして居られる時など、色々な考が後から／＼と頭の中に浮んで来るでせう。其の考が彼からは、是から彼といふやうに何處から出て来て何處へ往くか分らず雜然とボンヤリした考が浮んで来るのです。併し其中に明瞭な考が現はれて來ます。例へば「自分の實家の阿婆さんが此間病氣だと言つたがどうなすつたらう」と思ふと、阿婆さんの事から、自分が幼い時に阿婆さんに可愛がられたとか、又は斯う云ふ事を言つたら阿婆さんがお喜びになつたとか、阿婆さんの部屋には斯う云ふ物が有つたとかいふ様に、阿婆さんに關係した色々の事が出て來るのです、かく色々出て來ますけれども、其中で何か一番大事なことになり統一されて仕舞ふのです。即ち一の中心に皆吸ひ込まれて仕舞ひ、其事ばかりが確かになつて、他の事は消えて仕舞ふのです。前の例で申しますと、阿婆さんの病氣は肋膜炎であつたといふことに氣が附くと、肋膜炎には誰某も罹つた、誰某は肋膜炎で死んだ、阿婆さんは年を取つてお出なさるから危険はないであらうかといふやうに考へて來ると、肋膜炎といふことが意識の中心になつて、其他は皆之に吸ひ込まれて仕

舞ひます。又諸君が新聞を御覽になつても、色々な事が眼に着くでせうけれども、其中で諸君が一番大切だと思ひなされる事にすべてが統一せられて仕舞ふでせう。人の心は何時でもかう云ふ働きをするものであります。これが意識の統一性であります。

(二)意識の統一と教育 教育はこの原理を應用して、人の品性を養つてゆくものであります。凡そ人の性質は常に多く意識の中心になるものゝ如何に由つて定まるものです。例へば酒を好む人はどうかと言ふに、何を措いても酒といふ事が意識の中心を占めるのです。明識に於ても或は意識に於ても酒です。かういふ人は、茲に二圓の金が有ると、是で酒を買へば一升買へると考へるのです。或は此處に着物が有ると、此着物を賣れば幾ら酒が買へると思ふのです。或は其處に女が居ると、彼女に酌をさせたなら宜からうといふやうに、何でも悉く酒化して仕舞ふのです。又博奕の好きな者は何を見ても博奕化して仕舞ひます。其反對に學問の好きな人は、どんな物でも皆自分の學問の材料にして仕舞ふのです。私共が町を歩いて色々な品物を見ますと、何でも皆心理化して仕舞ひます。例へば大阪の町を歩いて料理屋が澤山有るのを見ると、大阪の人はなか／＼食欲が盛んで、其慾が現はれて料理屋になつたと思ひます。學校などが澤山有ると、大阪の人は知識欲が多くあつて是が現はれて學校になつたと思ひます。斯う云ふやうに何を見ても自分の専門の學問化して仕舞ひます。すべて人は善いことも悪いことも皆自分の最も注意して居る所に化して仕舞ふものです。そこで教育はさうするかと申す



に、教育は此中心に道徳を持つて來るのです。即ち忠なり孝なり或は信義なりを常に意識の中心に保たしめるのです。さうすれば各自が、斯う云ふ事をしては道徳に背きはせぬだらうか、斯う云ふ事は自分の主義に障りはせぬだらうかといふやうに、修養上一番大切な事を、いつも中心におくのです。國民教育では、忠孝即ち國を大事にして皇室を重んずること、及び父母によく事へるといふ事が、始終心の働きの起る處の中心となり、何時でも之を以て總ての事を判断して行くやうにと心がけるのです。又宗教でいへば、例へば日蓮宗の熱心者なら、祖師の事が絶えず頭にあるから、寒いなど言つてぶる／＼顛へて居る事は出來ぬ。祖師が佐渡で堪へ難い困難をせられたことに較べれば何でも無くなる。假令自分が着物を幾枚も襲ねて居てさへ寒いと思ふ時でも、祖師の事を考へればもつと着物を脱いでも宜い様になるのであります。宗教の熱心家は皆さうであります。基督教でも、信者が十字架を負ふといふのは即ちそれです。此一番大事な事を意識の中心に持來すが爲めに大なる勢力が生ずるのであります。宗教も廣い意味で言へば教育でありまして、大切な事を意識の中心に持來すことは同一であります。すべて感化修養は皆此原則に従つて出來るのであります。

(三)半意識の教育 意識の統一性の教育といふ事に就いてもう一言御婦人や家庭教育をなさる方々の御参考に御話いたして置きます。先きに何時でも大事な事が明識に上つて來る様にせねばならぬと申しましたが、これはたゞ一時明識に持ち來すといふばかりでは無く、永い間同じ刺戟を與へて、知らず

識らずの間に、無意識の境涯から半意識の境涯、次に明識の境涯といふ様に進んでゆき、遂には牢固として抜けなくなり、考へれば何時でも其事が心に出て來る様に教育せねばなりません。人の感化を受けるといふ事は即ち是れであります。感化といふ事は、長い間先生から話を聞いたたり、先生と共に居たりすると、何時眞似た何時習つたといふことなしに、夢のやうにポーツと心へ入這つて來て強い力となるのです。そこでよく注意して見ると、物の言ひ方から文字の書き方事物の考へ方までが先生に似て來て居るのであります。阿母さんが子供を取り扱つて行くのに、時として自分の思ふやうにならぬと、「此の子は何遍言つて聞かせても言ふことを聞かない、宅の子供の様な者は無い」と言つて、子供の聴きわけのない事を嘆く者も有りますが、さう云ふ場合には、唯子供を叱るとか或は聲を高くして話すよりも、夢のやうに半意識の教育をするが宜いのです。それはどうするのかと申しますと、すべて眠る前にはどんな暴れる子でも沈着くものです。始終暴れて居つては寝られませぬから、眠る前には必ず静かになる。其時に阿母さんが誠心を籠めて沈着いて話して聽かせるのです。例へば「お前は宅に居つて阿父さんの跡を繼がねばならぬのであるから亂暴してはいけない」といふやうな事を、子供がうつら／＼として居る時によく／＼話して聞かせるのです。時には涙と共に熱心に話して聽かせると、子供は半ば眠つて居るのですから、たゞ首を少しく動かし首肯ながら合點しつゝ寝入つて仕舞ふでせう。併しそれで宜いのです。總て子供は小學校時代殊に高等小學校時代には一番亂暴をします。



さういふ時には、度々阿母さんが前の様にして話して聞かせるがよいのです。併し始は阿母さんが何を言ふか位に思つて別に氣にも留めないでせうが、度々耳に這入つて夢現の様に残り、遂にはどうしても心中から其教が去らずに心を改めるといふやうになるものです。これは丁度催眠術で人の癖を治すのと同じ事でありませう。催眠術の治療の道理は、丁度半意識の状態に於て強い刺激を與へる事になるのであります。

(四)お伽噺の力　そこで私共の學問の立場から、日清戦争や日露戦争杯總て日本人が海外へ發展して行くのは、どういふ所から來るかと思はれますれば、子供の寝る前に話して聞かせる桃太郎のお伽噺が、日本國民の精神中に浸込んで、終に日本人はたゞ國內にじつとして居てはならぬ、どうしても海外に發展せねばならぬといふ事が深く心の根ざしとなつたからです。つまり桃太郎のお伽噺が日清戦争にもなり日露戦争にもなつたのです。今日一般に、決してたゞ國內に引込んで居るべきで無いと云ふ考へが日本人民の心の底にひそんで居るのは、阿母さんが何の意味なしに昔からの習慣に従つて話すお伽噺の影響であります。

(五)半意識の教育の効果　併しかやうな事を御話すると餘り仰山では無いかと御考へになる方もありませうが、現に私は此間或家の阿母さんから私の言に従つて半意識の教育をして子供が段々直つたと云つて喜んで禮を言はれたことがあります。若し子供が言ふことを聞かぬ爲めに御困りの方が有つた

ら、前のやうな教育を施して御覽なさい。學校の先生が教場ばかり嚴しい事を云つても平素子供が見たり聞たりする時に、先生に不品行な事が有つたり言ふ事と違つて居たりすると、教場で幾ら明識に入れて置いても、度々子供が繰返して先生の言行を見たり聞いたりする方が強いから、段々悪くなつて仕舞ひます。それゆゑ先生は自分が不用意で居る時でも、常に立派な言行が有るやうにしなれば、逆も感化することは出来ません。

實 例

謹啓仕候。時下益々御清適奉大賀候。斯く申す私は昨年中秋山形縣教育大會を幣郡鶴岡町に開會の際御高教を給はりたる者に御座候。それは教場にて教師の質問には入學以來(大正八年四月四日)一回も口答したる事無き兒童の取扱の件に御座候。私事昨年四月新任の當時は左程に氣も附かず居候處其後發見それより色々手を下し候へども効果なく困り居る最中に御高教を給ふを得て雀躍歸校直ちに彼の兄なる者を學校に呼び「將に眠に入らむとする沈心の場合に斯くくせよ」と申含め私もその後一層銳意努力仕候處最近に至り眞に完全に成功仕候。彼の家人も大に喜び當人も頗る欣快の面持に候。私も教鞭を執りてより茲に三十餘年中に斯く許り快感を覺えたる事數少く候。是れ偏に先生御高教の賜と深く奉感謝候。猶今後とも御指導を給はり度願上候。先は不取敢御禮申上候。謹言

大正十一年四月十九日

山形縣西田川郡田川村

吉 田 順 信

高 島 先 生 玉 案 下



## 第三章 注 意

## 第一節 注意の意義及び種類

(一)注意とは何か 注意といふのは「俗に氣を附ける」と言ふ事でありますが、氣を附けるといふのは一體どう云ふ心の働きでせうか。それから説明して参りませう。すべて我が心中に色々な考が起つて心が彼れ是れと移つて居る時には、注意が亂れて此心が一つに纏らぬ時であります。例へば、皆様が私の態度を御覽になつて居れば、皆様の意識の中には私の顔が映つて居るのです。……餘り立派な顔でもありません。頭は電氣燈と相反映する位になつて居ります、が……かういふ時には即ち諸君が私に注意してお出でなさるのであります。併しながら私を御覽なさる時に、こちらの電氣燈を御覽になつたならば、その意識は區々になつて居るから注意が纏らぬ。注意といふのは何でも意識の真中に唯一つの事が現はれる時に起るのであります。この注意の作用如何は抑も人の賢愚の分れる所であります。注意は最も大事な作用で、すべての事は、注意が無ければ出来ないでせう。講義を聴いても演説を聴いても、面白いと言つて熱心になつた時には、丸で聴衆は酔つた様になつて、其事より外に考

へない。それが済んで仕舞ふと、ア、と言つて溜息を吐くほどです。さう云ふ様な演説をすることはなか／＼六づかしいけれども、旨く話の出来た時は實際さうなるものです。又芝居を観る人が一生懸命で我を忘れて観て居ると、あとでがっかりする事が有りませう。其見て居る時にはもう親の病氣も何も忘れて、舞臺の役者が意識の中心を占めるやうになるのです。すべて熱心といふのはかう云ふやうに心が一つ所に集つて、即ち意識の中心點に一つの物が這入つて来て他の物は何も這入らぬといふ状態を言ふのであります。併し心がさう云ふやうになるにも、なり方が有ります。それを名づけて注意の種類と申すのであります。

(二)受動注意 注意の種類に大體二つあります、一つを受動注意と云ひ、一つを發動注意と云ひます。受動注意といふのは、自分が特別に注意しやうと思つて居るのでは無く、即ち斯う云ふ事を心に入れます。此事に心を寄せませうと云ふ考は無く、唯町なら町を歩いて居ると、面白い音がして我知らず其方へ心が移つて仕舞ひ、又他にピカ／＼光る立派な物があると、すぐに其方に夢中になるといふやうに、總べて、五官から色々な刺激を受けまして、其方へ心が奪はれるやうになるのをいふのであります。子供や教育の乏しい人は、受動注意が多い。田舎者が東京や大阪の様な賑かな町へ出て來ると、盛に此注意が起ります。向ではドンチャン音がする、喧嘩かと思つて之に心を寄せて居ると、コツチにはキラ／＼する物がある。繪草紙屋の前へ行くと綺麗な物があるから、一生懸命で見て居る。其時



には多くアーンと口を開いて居るのであります。夫は全く受身の注意で、心が空になつて居るのです。其處を拘摸が拘摸哲學を應用して、彼奴は彼處を見て居るから大丈夫だと鑑定して物を盗るのです。それ故に盗られた方では分らない。何か當つたと思つても忙しいからたゞ人が突當つたのであると思つて、矢張りアーンと眺めて居る。あとで調べて見ると財布が無くなつたといふ様な事になるのです。私は今教育の乏しい者に多いという受動注意の事を悪く言つたやうでありますけれども、幾ら教育を受けても、どんな伶俐な人でも、時に依れば矢張り外の事に氣を奪れて物を落したり、拘摸にすられたり致します。拘摸られるのは、すられる方が馬鹿だなどと言ふ者もありますけれども、さう云ふ口の下から立派な教育ある人で拘られることもありませう。現に私は斯う云ふ事はよく知つて居りながらすられました。或る年の大晦日に、電車に乗つた所が、非常に込んで居ました。さう云ふ中で私は先刻御話した獨逸のヘッケルが書いた面白い本を夢中になつて讀んで居たのです。そこで私の心は全く本に移つて受身の注意の状態になつて居たのです。其時何だか私の前へ押して來る者がありました。が、是は込んで居るから押すのだらうと、別に氣も附けずやはり本を讀んで居つたのです。所が何處ですられたのか分らぬ中に、紙入が無くなつて仕舞ひました。決して人の悪口を言ふどころでは無い、自分みづからすられたのを大に悔んだ譯であります。要するに熱心に外の物に心が移り、假令自分が見やうと思はぬ物にでも自然に心が引かれるのが受動注意であります。

(三) 發動注意 併し人にはさう云ふ受身の注意ばかり有る様ではいけません。段々進んで、見へても見ず聞こえても聞かずといふ様に、自分自ら選んだ事にのみ注意が出来るやうにならねばなりません。それが發動注意であります。かういふ注意は、幼い子供には出来ない。學校の先生が一生懸命に子供に向つて熱心に教へて居ても、往來を通る獅子舞が、面白い太鼓を叩くとか、樂隊が面白くはやして其前を通ると、子供の心は皆空になつて仕舞ひます。其時に先生が見ても宜いと言へば、喜んでバラ／＼出て行つて仕舞ふでせう。併し叱られるから仕方なしにじつとして居るけれども、子供の心は既に樂隊や獅子舞に移つて居るのです。それを先生が「皆さんこちらを御覽なさい」と言へば、見て居るやうな顔はして居るけれども、心は外に飛んで行つて仕舞つて居るのです。幾らそれを嚇しても、子供自ら熱心に注意しなければ駄目です。かゝる外界の刺激に反抗して一つ事に注意することが出来るやうになるのは、年を取り経験を積んだ後の事です。子供は尋常三四年の頃から、少しづつさういふ注意が出来る、高等小學・中學などに行つて段々と進んで來るのです。高等學校時代・大學時代となれば、本當に發動注意が盛になり、どうでも心が支配されるやうになり得るのです。それが出来ない間は矢張り子供と同じで、始終外界の面白い物ばかりに心が移つて仕舞ふのです。併したとひ鍛錬の乏しい人でも、事柄に由つては、熱心に自分が之を考へねばならぬと思ふと、幾ら人が側で邪魔をして一つ事にのみ心を寄せる事が出来るものです。例へば、面白い小説でも讀み出すと、所謂見



へても見ず聞こえても聞かずで、其方にのみ心を寄せて仕舞つて、なか／＼他に心が移らぬやうになります。即ち夢中に小説を読んで居る時は、細君が「御飯が出来ました」と言つても「ウン今行く」といふ調子で、唯器械的に返事をして居て容易に動かぬものです。所が眞面目な本を読んで御覽なさい、なか／＼さうはゆかぬ。例へば、ズット読んでゆく中に、母といふ字が有ると、阿母さんの事を想出す、さうすると本を見ては居るけれども、阿母さんの事丈けがいろ／＼思はれて本の事は解りませぬ。夫から又遠方へ出て居つて細君と離れて居る者であれば、妻と云ふ字が出るともう細君の顔が本の上へ出てそれから續々と細君の事ばかり出て来て、本はお留守になつて仕舞ひます。何でもかう云ふ工合になつて、何遍も読み返さなければ自分の心を全く書物に注いで仕舞ふといふ事は出来にくいものです。是は諸君も必ず経験なさつたでせう。私も矢張りかういふ事に出逢まして、度々繰返して練習したのであります。今でも時に依ると、氣が沈着かぬで初の間書物をうはの空で見る事があります。さういふ時には、度々押へ付けて他に心の移らぬ様にせねばなりません。

(四) 注意の極致と三昧 さて發動注意がチャンと成り立ち、他から幾ら妄念が出てもそれを押へ付けて自分の望む事ばかり出来る様になり、終に如何なる障礙が起つても、心が一事に寄つて動かぬ時は、其状態を佛教の語で三昧といふのです。是は梵語サマデー・Samadhiの音譯です。三昧とは、注意が其極に至つて他の事に心が移らぬ事です。それ故禪家で例へて説明しますれば、公案を貫ひ其公案に

就いて座禪し三昧に入る時には、公案と自分とは二者ならず一緒になつて、一切他の妄念が無くなつて仕舞ふのです。即ち他のことは一切棄て、仕舞つて、自分の心の一番中心、即ち前の圖に描いた意識の中心が、與へられた公案に由つて満たされて仕舞ふのです。こゝに至らなければ物事はよく分りません。此事に就いては、禪の方では、宗教的・神秘的の事がありませうけれども、たゞ心理學の上からいっても説明の出来る大切な事でもあります。諸君が何を勉強なさつても、三昧に入らなければ決して上達する譯にはゆきませぬ。三昧線を稽古するのも、三昧線より外の事は心の中に無いといふ状態にならねばなりません。寒稽古をするのが藝の上達の爲めになるといふのは、つまり寒さに抵抗して一つ事をするので、他の事を考へて居る暇が無いからです。又寒詣りといふことをしますのも之と同じことで、信仰が堅くなり心を一點に集めて他の一切の事に注意が移らぬのです。寒い時に色々の事を考へながらぶら／＼裸詣りをして居つたら耐りませぬ。トットと走つて行く間は、自分の願より外の事を考へないのです。かう云ふ状態は何れも發動の注意から起るので、受動的に他から刺戟を受けて起つた注意では無い。併し自分で考へたことが終に全く自分を引附けて仕舞つて、恰も外界の物事に引き付けられたやうになるのです。是等は皆さんは既に御経験になつて居りませうが、受動の注意よりだん／＼發動の注意を起し、發動の注意をもう一步進めて三昧に入るといふ事は、總ての事に必要であります。何でも物事は熱心にして行かねばなりません。



## 第二節 注意と精神の發達

(一) 注意の發達 人間の心が發達して來ると、注意も發達して來るのです。是れは餘程面白いことでもあります。幼い子供や教育の乏しい人の注意は、すべて受動でありまして、何でも眼に訴へ耳に訴へて音がするとかギラ／＼するとかいふやうなもので無ければ心を寄せないのです。然るにそれが段々進んで參りますと、總ての精神作用が進んで來て、發達の注意が出来るのです。更にもう一步進んで來ると、自分で自分の心の中の事を考へ、遂に三昧にはいるやうになるので、これが一番發達した注意作用であります。右は皆さんが御自分の心の發達を考へて御覽になると分ります。

(二) 動中靜觀 動中靜觀といふことが出来るやうになるには餘程修行を積まねばなりません。動中靜觀とは動の中に靜かに觀るので、人間は是が大事なことであります。佛教の修行をするのでも靜かな山の中ばかり這入つて修行するのでは、まだ足りない。銀座のやうな非常に雜沓して居る中で靜かな境遇を作る事が出来る丈の修養をしなければなりません。それはどうすれば出来るかと御尋があつても、直ぐに斯うすれば出来ると言ふ譯にはいかぬ。私は以前東京牛込の神樂坂に居つたことがあります。彼處は東西南北藝者屋であつて、その中でじつとして書物を讀んで居ました。友人が來て、此三味線の喧ましい所でどうして本が讀めるかと云ひましたから、「イヤ私にはそんな聲は聞えぬ」と

申しましたら、「そんなことは無い」といひますから、「ナニ聞えるのは聞えるけれども、私の精神には邪魔にならぬ」と言ひました。友は「不思議な事も有るものだ」と笑つたことがあります。丁度水車屋の亭主が始終水車の音ばかり聞いて居るために、遂に之に注意せぬやうになると同じであります。學問をするのに、三味線の音が邪魔になる様な事では、とても眞の學問は出来ませぬ。兎に角騒がしい處で書物を讀んでも何の邪魔にもならぬといふ程にまで精神を修練する様になければなりません。總て精神の發達と注意の發達といふことは伴つて居りますから、諸君が其人の注意を觀察なされば、其の精神の發達を知ることが出来ます。

## 第三節 注意と人生

(一) 興味と注意 次に注意と生活との關係に就いて御話いたしますが、前にも申した様に、注意といふことは、皆さんが日常生活をなさる上に大なる關係があります。第一人を使ふには其人物を見極めなければなりません。其人の行く處に尾いて行く様にしては拘摸か探偵かと思はれるから、さう一々尾いて行かぬでも宜いが、大體其人はさう云ふ事に氣を附けるかといふことを見れば、其人となり分ります。例へば御婦人方は呉服屋の前に行かれると大さう注意なさるし、男子の學問に志ある人ならば、雜誌屋の前か書物屋の前かに行くと、必ず注意して見て居るでせう。それから腹の空いて居る



人が鰻屋の前などに行くと、頻に鼻を動かしてその方に心を寄せるでせう。

(二) 注意の方面と人物 これ等は餘り卑近な例であるが、さう云ふやうに平生其人の心を用ゐる所を見て居ますと、其人の精神状態や其人の生活の有様が分ります。若し其人が大きな事に氣を附ける人であつて世界の状態はどうか、國家の利害はどうか、我國の文化は如何といふやうなことに注意するならば、僧侶としては高尚な宗教家であり、大臣としては、立派な政治家なのであります。それを私利或は私慾に馳せ、自分の事にばかり氣を附けるとか、或は頭にコスメチックなをつけて、蜻蛉のやうに頭ばかり光らして之を氣にして居るやうな人は、それ丈けの人物であります。それゆゑ平生注意を専らにして居る所を以て其人を知る事が出来ます。或は男女の雇人を御使ひなさるにも、何か吩咐けてどんな點に注意するかを觀察なされば、其人となりがよく分ります。斯様に人の心の有様は殆ど注意の如何に依つて分るのであります。注意がよく出来れば、世間に出てよく生活が出来、注意がよくないと失敗するのであります。私は曾て監獄の教誨師を教へた事があります。其場合に監獄の罪人の心理の事杯を色々調べました。罪人といふ者は大概注意が乏しい。盜賊はなか／＼伶俐な者でよく萬事に氣を附ける様に思はれますが、實はさうではありません。それは或一點には注意も届くかも知れませんが、全體に向つて注意が届きませぬ。所謂頭隠して尻隠さずで、何處か缺點が有ります。それゆゑ、人が罪を犯すのは天性にもよませう、又境遇の如何にもよませうが、中には注意力の足らぬ

爲に生活が出来悪いから物を盗んだりするやうになるものもあるのです。故に注意力は十分に養つて置かねばなりません。

(三) 恭敬と注意 恭敬といふことは大事なことでありまして、宗教の上から見ても教育の上から言つても、大切な人の禮義であります。恭といふのは「恭儉己を持し」と勅語にも仰せられた様に、うや／＼しいといふことで、形に現はれた上から言ふのです。例へば同じお辭儀をするのでも、人形の首が折れる様に「今日は」と言つてコツンとするのと「今日は」と言つて温順にするのとは、其お辭儀を受ける人の心持が違ひます。時としては、薙刀を倒しまに呑んだ様に反つて歩いて、人に逢つてもお辭儀をしては損だといふやうな者があります。斯う云ふものは餘程恭といふ徳に缺けて居るから、人の感情を害するのみならず、社會の平和をも害するものであります。お辭儀の仕方にも色々あります。日本などでは頭を低げますけれども、數年前英吉利に於ては頭を低げるのは衛生上宜しく無いから、寧ろ引繰返るやうにしやう、「ヤア今日は」と後に反るのをお互の禮にしやうと主張したものがあつたさうです。又西藏などに行きますと、舌を出すのが禮ださうです。ヤアと言つて長く舌を出すのです。また未開人の中には鼻と鼻とを擦り合すのもあるさうです。久し振りに故郷へでも歸ると、鼻を擦りむく虞があるでせう。かやうにお辭儀の仕方は色々ありますが、どの禮にしても心から出たもので無ければ恭といふことは出来ませぬ。



然らばその心の有様は何であるかと申しますれば、それは敬であります。心に敬といふことが無ければ恭といふ様子は現はれません。敬といふのは、通例敬ふと訓み、丁寧にするといふことを言ひますが、心理上から説明しますと、詰り注意といふことに歸着します。是れは私が勝手に解釋するのでは無い。宋の儒者程子は其の敬といふことを説明して、「一を主として適くことなき之を敬と謂ふ」と申して居られます。即ち心を一點に集め決して他に移さぬことが敬であるといふのです。實際敬ふ時には心がそれに集まり様子が自然とうや／＼しくなります。皆さんが御寺や社に御詣りになつて禮拜をなさるときを考へて御覽なさい、大概眼を閉ぢ掌を合せ頭を下げて、静肅になさるでせう。其の時には神さまなり佛さまなりの事より外に何等の考へもないのです。其の瞬間程人間の心の麗はしいことは無い。これが眞の敬であります。前に申すやうに、大概の人は拜む時に眼を閉ぢます。之は何の爲めであるかといふに、眼を開いて拜んで居ると、色々の物が見えて注意を妨げるのです。例へば、「アツ彼處へ奇麗な人が通る」とか、「アツあの柿は甘まさうだ」とかいふやうに、心が外に移るから不敬になるのです。それ故實は眼を閉ぢると共に耳を蔽うてお辭儀をするのが宜いのですけれども、さうなると掌を合すのに不都合だから、眼丈け閉ぢて拜むのです。此くの如くにして此の時には神聖な心になつて眞の敬が現はれるのであります。

以上の事實は神佛を拜む時には限りません。諸君が人に接して、眞にあの人は偉い人である、あの

人は徳の高い人である、と思はれる様な人の前へ行つて御覽なさい。自然にその人のことより外考へぬやうになり、頭を下げて御辭儀をするのにも我知らず恭々しくなつて参りませう。それですから、學校に於て本當に禮義を教へるには、禮を盡すべき對手によく注意すべきことを教へねばなりません。現に陸軍では大に此事に意を用ゐて居るやうです。即ち兵士が大勢隊伍を組んで進行して居て士官なごに出逢ふと、引率して居る人が號令をかけて、其の出逢つた士官の方を向かせます。兵士は唯其士官を見るのみでありますが、それでちやんと敬禮になるのです。斯様にお辭儀をする瞬間には、公の事より外に考へないのが眞の敬禮であります。幾ら丁寧にお辭儀をしても、公の人を馬鹿にして心中で、「彼奴は此の頃成上つた生意氣な奴だ」といふやうな考へがあると、決して敬にはならない。随つて恭も形式に止まるのです。それ故恭敬といふことは詰り眞の注意から出来るのであります。

敬は人や神佛に對するばかりではありません。仕事に對しても敬の心を有たねばなりません。是は非常に大切な事です。小學校の先生と巡査とは俸給の小さい所から、役人の中で位地の低いものといふと先生と巡査とが第一に算へられるのです。そこで先生みづからも、「教師をして居るのは詰らぬ、何か旨い事が有つたら何處かへ變らう」と思つて居る人が多いのです。即ち自分の仕事を尊敬して居らぬのです。そこで人が「あなたは何をしてお出で、すか」と聞くと、「私は詰らぬことをして居ります」と言つて頭を掻くのです。それから段々聞くと、「實は小學校の教師をして居ります」といふやう



な人が随分有ります。さう云ふ考へでは何をしても成功するものではありません。すべて人は自分の仕事を神聖のものと考へ全力を注いで勤めねばなりません。さうすればきつと成功します。御婦人が家庭を治めてお出なさるにしても、其家を唯一の居り所と考へ、自分のなさる事を唯一の天職と信じて、専心一意にお勤めにならねばなりません。家にも夫にも二心を持つていや／＼毎日の事をなさるやうでは、迎も幸福な生涯は送れませぬ。全心を捧げて夫を助け、全力を擧げて家の仕事をすれば、其の家は必ず榮えます。是れは私がたゞ學問上から知つて居るのみではありません、私自身が長い間小學校の教師をして経験したことであります。私と共に教師をして居た人は澤山有りますが、途中から詰らぬと言つて轉業した人も少なくないのです。然るに其等の人は今社會の何處に居るか分らぬやうになつて居ります。中には非常に零落して仕舞た人もあります。然るに私はたゞ自分の仕事は神聖なものだと思つて一心に續けて居りました。それ故別に大した仕事もいたしません、學問上の事に關して、皆さんに御話することも出来るのです。本を讀むのでもさうです。充分其の本を敬つて讀むと、よく分ります。ごんなに六つかしい本でも、人間の書いた物ならばよく／＼注意して讀めば必ず分ります。それゆゑ何事をするにも敬といふことは大切であります。

以上に申したやうな次第で恭敬と注意とはつまり一つの心の状態を一是心理的に見、一は道徳的に見たのであります。

#### 第四節 注意の異常

(一) 強迫性 以上述べた如く、注意は大事なるものでありますけれども、それがあまり強くなると注意の強迫性といふ病氣になります。それは或事柄だけが心に在つて、寢ても覺めても忘れる事が出來ず。これが爲めに他の事に注意を拂はぬやうになるのです。是が強くなると狂人になります。かういふ人は世間の他の事は一切分らぬから、無理を言つたり無茶なことをしたりいたします。強迫性は可恐い病氣です。それですから幾ら物事に熱心しても、それは或程度まで、あつて、自分の考次第で他に注意を移すことの出来る丈けの心の状態を有たねばなりません。松澤の精神病院に参りますと、氣の毒のやうに或る觀念に強迫せられて居る者が多いのです。かういふ人は、一つ事ばかり繰返して居ります。何か自分に氣になる事が有ると、寢ても覺めても其の事が忘れられぬのです。何事でも斯う云ふ風になつてはなりません。かう云ふやうにならぬ様にするには、所謂多方興味と云ひまして、自分の心を色々の方面に涉つて開發して置くがよいのです。それゆゑ、商人であつても、たゞ自分の商賣の事ばかりでなく、折に觸れては社會のあらゆる知識を得るやうに心がけ、それを纏めて自分の仕事の助けとするがよいのです。又宗教にしても、自分の信仰する宗教に熱心するのは宜いけれども、知識の材料としてはあらゆる方面の社會の有様を觀察することが必要であります。幾ら一方に熱心であつて



も、その一つ丈けより外に心が寄らぬといふことはよくない事です。それは既に一の病氣であります。即ち一のことのみ熱心にしてどうしても忘れることが出来ず外の事は一切耳にも目にも入らぬといふやうになれば、ごんな御醫者さんでも治らぬやうにきへなりません。

(二) 道德狂 以上に説きましたのは悪い方の凝り性のことでありますが善い方でもあまり凝ると害があります。道德狂といふのは即ち其の一例です。私の知つて居る人で此病にかゝつたのを私が治してやつたのが有ります。それはどう云ふ様子であつたかと申しますと、此人は立派な人で、立派な教育を受けた人でありますが、忠といふことに凝り過ぎて、絶えず忠々といふのです。誠に鼠の様です。それで三度位忠と言ふと萬歳と稱へます。即ち「忠々々萬歳」といふのです。女中や其外家に居る者にも之を言ふことを命じ、若し言はないと酷い目に遭はせるのです。これは日本臣民として、一日片時も忠を忘れてはならぬといふ處からかく命ずるのです。そこで女中も仕方が無いから、其人の前に居る時には忠々々と言ふのです。萬歳といふのは何の爲めかといふと、其頃は皇太后陛下が御在世でありましたので、天皇皇后兩陛下及び皇太后陛下の萬歳を唱へぬ者は日本臣民で無い。それ故皆萬歳を唱へよとの命令です。困つた話ですが、容易ならぬ嚴命でありますから、何れも忠々々萬歳と唱へました。それで親が大そう心配して私に相談しましたから、私もいろ／＼心理上から話をして終に治つた事がありますが、今は立派な人になつて居ります。それは一時的強迫性道德症とでもいふのでありませう。たとひ善い事でも凝り過ぎるとかう云ふやうになるから、幾ら熱心してもあまり一つ事ばかりになつてはなりません。常に心を廣く持たねばなりません。

(三) 散漫性 是れは又注意が纏らぬ方で、始終そわ／＼して一寸とも心が纏らず、彼からは、是から彼と移るのです。是れが烈しければ、躁狂というて、騒ぐ狂人であります。それほど烈しくなくとも學校の子供には、色々の原因で注意の纏らぬ者があります。さう云ふものは、先生が特別の方法を以て教育して、次第に注意を纏めさせて行かねばなりません。その注意を教育するにはどうしたら宜いかといふことはこれから説明いたしませう。

### 第五節 注意を良好にする方法

(一) 生理的方法 注意を盛んにすることは、三つの方法に依つて出来ます。第一は生理的方法、是は注意に限りませぬ。何でも心の働きを盛んにしやうと思つたら身體をよくせねばなりません。何處か身體に痛い所があるとか、或は病氣が有るとかする時には、決して注意は十分に出来ませぬ。ごんなに面白い事でも、身體に悪い所があると心が移らぬものです。それですから、注意作用を盛にしやうと思へば、第一に身體の健康が十分でなければなりません。併しながらそれも唯骨や肉を丈夫にしたのではいけません。牛や豚ならば骨が太く肉が多い方が宜いかも知れませぬが、人の身體に於ては、



骨や肉は唯内臓を保護し或は脳の命令を實行する爲めのものであるから、一番大事なものではありません。人の身體で最も重きを置くのは神経系統を丈夫にすることです。

故に婦人方が毎日料理をなさるにも、矢張り此事を考へてなさらねばなりません。夫は終日働いて精神も身體も疲れて居る時に、其疲を回復するには、心の慰めが第一であります。之と共に多くの滋養を含んだ料理を差められることが必要です。例へば、脂肪と蛋白質とを多く含んだ物が、心身の疲れを早く治すことが出来るといふことは、學問上から分つて居ますから、之を應用して料理をなさるがよいのです。料理の講習なども、唯斯うやれば斯ういふ料理が出来るといふ丈けでは足りませぬ。其材料の中に含んで居る成分を知り、カロリーやヴィターミンの事をも考へ、どう云ふ成分が滋養になると云ふことを基礎として食物を料理せねばなりません。此の如くいろ／＼の點より神経系統を盛んにするといふことは、注意力を養ふ一番根本的方法であります。それから眼が悪いとか耳が悪いとかいふやうにすべて感覺機關が悪いと、其の爲めに注意が不十分になります。就中鼻と耳とは注意作用と深い関係がありますから、十分氣を付けてその健康を保たねばなりません。

(一)物理的方法 次に物理的狀態から、注意を盛ならしめることに意を用ひねばなりません。例へば、物を視るのでも、明るい所で落ち着いて視、音を聴くのでも静かな所でちやんとして聴くのと、薄暗い光線の所ではんやりと見たり、騒がしい所で幽かに聞いたりするのは、注意の狀態が全く違ひま

す。すべて吾々の感覺に強い刺激を與へるものは注意を惹き易いものです。それ故、御寺であるとか、御堂であるとか、或は醫者の玄關などは、物理的に人の注意を惹く様に何れも高大に拵へてあります。淺草の觀音様は一丈八分であるといひますから、あんなに大きな御堂を拵へる必要は無いのです。二寸四方位あれば充分に入れることが出来るのであります。そんな物を拵へては人が注意しない。のみならず、何處に在るのか分らず、さん／＼草原の中を探して見當れば誰かポケットへでも入れて持つて行くかも知れませぬ。さう云ふ事ではいけぬから大きな御堂を建てゝあるのです。其の外高い所の上つて市中を見渡す時、一番目に着くのは、大きな建物です。そこで、あれは何ですと傍の人に問ふと、直ぐに、あれは本願寺ですといふ様に、大きなものは最も早く最も強く人の注意を惹くのです。此の原則の行はれて居ることは、西洋でも日本でも同じ事であります。ニコライの建物の大きかつたのは即ち其の例であります。

此の原則は何にでも應用することが出来るのであります。例へば、學校の先生が生徒に話をなさるのでも、又演説者が公衆の前で演説する時にも、之を應用することが出来ます。全體演説などに慣れた人は、初から大そう大きな聲を出して、「諸君よ／＼満場の諸君」などとやるから、初めの間はなかく／＼えらさうであります。話がだん／＼進んで、一番大事な處になつて「諸君よ／＼」といふ頃は、聲も枯れて出なくなつて仕舞ひます。それでは既に物理的に人の注意を惹くことが出来ないの



あります。それゆゑ、慣れた人は、成る可く聲の儉約をして、初はかつ／＼全體に聞える丈の聲にしておいて、サア此處が大事であるといふ時になると、聲を張り上げ態度を變へて話し出すのです。そこで聴衆は辯士の聲の變つた事や、様子の變つたことから、ハツと心を其方に寄せるやうになるのです。説教する人もよく注意して居ると皆さう云ふ事を應用して居るのがあります。ずつと説いて來て、此處は大事だ感動を與へねばならぬといふ時になると、急に聲を張上げ或は其調子を變へて、悲しい時には悲しい様に、腹の立つ時には立つ様にするのです。是れ皆外部の刺激状態が注意に影響する理法の應用に外ならぬのです。それゆゑ、諸君が自ら勉學をなさる時でも、此理法を應用して、靜かな所で朗々と書を読むとか、或は明かな室で落ち着いてはつきりした印刷の文字を読めば、注意がよく纏まつて明かに印象を留める様になります。又人を教へ演説をする時でも、之を應用することが出来るのは、前に述べた通りであります。

阿母さんが子供に教訓をするのも、此原則を應用しなくてはなりません。一體阿母さんは阿父さんと違つて始終宅に居つて子供に接して居るからでもありません。ノベツに朝から晩まで、さうしてはいけない、かうしてはいけない、ヤレ芥を散らしたとか、ソラ足袋が汚れるとか、下駄を引つ繰り返へしたとか、靴を破つたとか、小言ばかり列べて喧しく言ふ傾向があります。それでは子供には利目がありません。又阿母さんの例の僻が始つた」といふやうになります。それですから、刺激

は成るべく少くして、是非言はねばならぬときには、阿母さんが眞面目になつて、平生と態度を變へ、子供を呼んで徐かに話して聽かせるがよいのです。さうすると子供はいつもと違つてよく心に感ずるでせう。是れ即ち子供の注意を惹くことが深くなるからであります。

(三) 心理的方法 總て、人は、自分に利害のあることだと、よく注意するものです。先刻云ひましたやうに、相場をする人は相場の高低といふことによく注意をする。是は何故かといへば、その昂り下りで身代が出来るか潰れるかといふのでありますから、新聞を讀んでも相場の處をよく視るのです。我々はかゝることには利害の關係がありません。何時も讀んだことは無い。相場丈は新聞から抜いて呉れ、ば宜いと思つて居る程であります。すべて自分の面白いと思ふ事が紙面に出て居ないと、新聞を見る張り合がないのであります。それゆゑ人に注意させ様と思つたら、人の利害に關係した話をすれば必ず成功します。さう云ふ譯はよく分つて居ても、之を應用することはなか／＼むづかしいのであります。つまり子供に話して聽かせることでも、人に説諭して聞かせることでも、斯うやつて居るとかういふ損がある。又斯うすれば斯う云ふ得があるといふことをよく覺らせると、必ず注意がよくなるのです。其の外好奇心というて、物好きからいろ／＼珍らしいことを知りたがりその刺激でよく注意することもあります。又或る事柄が自分の趣味に合ふ所から其事柄によく注意することなどもあります。それですから、人の注意を心理的にすゝめてゆかうと思つたら、以上に述べたやうな



いろ／＼の點に心を用ゐねばなりません。

注意の影響

- 一、すべての感覺は強度を加へる。
- 二、直觀と記憶もその心像がすべて明瞭になる。
- 三、記憶を強める。
- 四、運動を止め或は生せしめる。
- 五、注意せられた感情の強度が加はると共に他のものゝ強度が減ずる。
- 六、心像が永續する。

第四章 感覺及び直觀(知覺)

第一節 感覺の意義及び屬性

(一) 感覺とは何か 今日では感覺と知覺とに就いて御話を致します。先づ初に感覺といふことを説明致します。感覺と申しますのは、心の働きの一番土臺になるのであります。それは五官と申しまして眼だの耳だの舌だの鼻だの皮膚だのが、見たり聞いたり味はつたり嗅いだり觸れたりする働きを致しまして、段々と身外の事を感じて來るのです。それですから、感覺といふのは、主として五つの器官が色々の刺戟を受けまして感ずる事の出來る一番初步の心の現象であります。皆さんが今私の聲を聞いてお出でなさるのは、耳の感覺に基いて居るのであります。又此電氣燈の光を認めて御出でなさるのは、眼の感覺に基いて居るのであります。さう云ふやうに、私共は起きて居ります間は絶えず五官に色々の働きを受けて、見たり聞いたり觸れたり致して居るのであります。眠つて仕舞ひますと、其働きが止んで仕舞つて、眼は持つてゐても見え、耳は持つてゐても聞えず、皮膚は持つて居ても感ぜぬといふやうに、皆働きが止んで仕舞ふのであります。併し五官の働きは止んでも、有機感覺といふ



ものは矢張り働きをして居るのです。それですから色々な夢を見ることもあり、又色々な気分も起るのです。

有機感覺といふのは、五官の外の身體器官から受ける刺激に基く感覺であります。詰り感覺と申すのは、身體の内外の刺戟が與へる單純な感じをいふのでございます。それゆゑ皆さんが御兩親の事をお思ひになるとか、自分の前途の事をお考へになるとかいふやうなことは、感覺よりは高い心の働きに依るのであつて、感覺ではないのであります。感覺といへば何時でも、或る身體の器官に影響するといふことが缺く可らざる條件になるのであります。

(一)感覺の質 次に感覺の屬性といふ事をお話致します。感覺には無くてならない性質が四つあります。第一に、感覺には質があります。即ち耳の感じと眼の感じと鼻の感じと舌の感じと皮膚の感じとは、同じく感覺であるけれども、其の性質が違つて居ます。又同じ眼で見るとしても、色と光とは質が違ひます。又一層細かにいふと、同じ色の中でも、赤もあれば黄もあり、紫もあれば緑もあるといふやうに、いろ／＼違ひます。此の如く總て其持前の色々に違つて居るのを名けて感覺の質と申すのであります。

(二)感覺の度 次に感覺には度があります。同じ眼で見るとしても耳で聞くのでも、其強弱に大そう違ひがあります。例へば、説教を御聴きになつても、又演説を御聴きになつても、大きな聲をしてよく

分る様に話をする人もあるし、又何だか内所で話をして居る様な工合にこそ／＼話して居て、誰に向つて何を言つて居るか分らぬ様なものもありませう。さう云ふのは、同じく聲であるけれども調子に高い低いの度の違ひがあるのです。又同じ光でも、蠟燭の光と電燈の光とは強さが違ひます。即ち電燈の光は強いけれども、蠟燭の光は弱いのです。それゆゑ電燈の光りの度を表はすには、十燭光とか二十燭光とか言つて、蠟燭一本の光の倍数で表はすのであります。此の如く、感覺には總て強弱の別があります。それを名けて感覺の度と言ふのであります。

(三)感覺の廣さ それから次は感覺の廣さであります。廣さの事は皮膚に就いて御話するのが一番よく分りませう。今皆さんの皮膚に、何か尖つた冷たい物がチョツと觸ると、たゞ一點がヒヤツとする計りであるけれども、若し着物の如く身體全部の皮膚を被うて居るものであると、廣い感覺が起ります。即ちチョツと一點に觸れるのと、全體に觸れるのとは、感じが違ひます。光でも其通りで、稻妻の光は強いけれども幅が狭い。月の光はボーツと全體に明るくなるので、光の度は電光程に強くはないけれども廣いのです。さう云ふやうに、感覺には狭いと廣いと別の別があるのでございます。

(四)感覺の長さ 次は長さです。是れは前の三つに較べると最もよく分ります。即ち音がするのでも、色が目を刺戟するのでも、時間の長く續くのとチョツとの間のものでは、大そう違ひます。感覺が有るといへば必らず長さが有ります。皆さんが何か聞いてお出でなさるのでも、何か味はつてお出でなさる



のでも、或は見てお出でなさるのでも、觸れてお出でなさるのでも、必ずこの位の間觸つて居たとか、この位の間聽いて居たとか、この位の間見て居たとかいふやうに、時間が有りませう。それを名けて感覺の長さとするのであります。

それで皆さんが眼や耳や鼻や口や皮膚など五官を働かしてお出でになる時には、前に擧げた質と度と廣と長とが伴うて居るのであります。此感覺の性質の色々に違ひます所から心の働きが段々と違つて來るのであります。

(六)感覺の律動 次に感覺の律動といふことに就いてお話致しませう。其前に一體律動といふことはどう云ふことであるかを説明致しませう。律動など六つかしい字が使つてありますけれども、それは詰り、物事の働が進んで行くのに、何時でも波のやうな形に高低／＼と一定の形をなして變つて行くことを申すのです。總べて物事の進行は一直線に行くものは少く、大概の物は何時でも波のやうに、進んで行くものであります。是れは總べて天地の法則でありまして、唯人の心の働きのみではありません。何でも此世の中のことは始終高く上つたかと思ふと下り、下つたかと思ふとまた上るといふやうに、變つて行くのであります。例へば、世の中が亂れた次には必ず治り、治つた後には復亂れて戦さが起つて來るのです。又人の一生でも、始から終までズツと好い事ばかり續く者ではありません。良い家に生れて仕合せであると言はれる者でも、何時の間にか下つて他人から誠に氣の毒であると言

はれるやうになることがあり、さうかと思ふと、またズツと上つて來る事があるものです。人の一生は七轉八起といふ様に、起きたり轉んだりするもので、つまり好い事と悪い事とが律動的に働いて行くものであります。又四季の時候でも、春夏秋冬、春には花が咲き秋には實を結ぶといふ様に、次第に變化をして行くのであります。又人の身體にしても始終血液が脈を搏つて活動をなしつゝ、巡つて居ますし、呼吸も亦始終吐く息と吸ふ息と互ひ違ひになつて居ります。かう云ふ工合に、總て世の中のことは、上り下り高い低いといふやうに移り變つて行くのであります。是が世の中の原則でありまして何人もこの原則を變へることは出來ません。何れも皆チャンとそれに従つて行くのであります。それゆゑ誰でも現在に於て好い事があつたとて餘り得意になるものではありません。あまり得意になつて居ると急に落る事があります。之と同じく、悪くなつた時、例へば商業で損をして困つた時などにも、餘り悲觀して、猫いらすななどの、厄介になつてはなりません。これは律動の下つた時であると思つて辛抱して居ると、また上つて來る時があります。自分一代に成功しなければ子孫に至つて必ず成功するといふ様に、氣を永く持つがよいのです。律動はたゞ人の一代ばかりで無く、世の中のすべてを通じて物の進行する變化といふものは定つて居るのです。それが感覺に現はれて來るから面白いのです。それは其譯でありまして、感覺と雖も世の中の一の働きに外ならぬから、世の中の事物の進行する原則に違はぬ様に現はれて來る筈なのです。先づ人の視覺に就いて調べて見ると、眼は二つある



でせう。その二つを同時に働かすのは不経済であります。経済の上から言へば、一つで済むものは、同時に二つ使はず、一つが悪くなつた時又他の一つを使ふやうにするがよいのです。ラムプでも二つあるのは一つで済ましておき、之が毀はれた時にしまつておいた方を出すのが儉約で有りませう。これと同じく、通常二つの眼のある者は経済的に右の眼が働く時には左の眼が休み、左の眼が働く時には右の眼が休みといふやうに、始終替り／＼になつて居ります。銘々は自分には之を知らないのです。之を試験して見ると、眼の働きの律動的に變化して來るといふ事はよく分ります。之を實驗するには、緑色の硝子と赤色の硝子とを兩方の眼へ別々にあて、燈光を見つめて居るのです。さうすると、燈光が緑に見えたり赤く見えたり致します。是れは即ち兩方の眼が律動的に交代に働くからであります。

(七) 感覺の對比 次に感覺の對比のお話をいたしませう。對比は較べることに由つて現はれるものであります。例へば、黒い物と、白い物とを併べて見ますと、黒い方は、益々黒く見えまして、白い方は益々白く見えます。赤い物と緑の物とを並べても同様の結果が現はれます。すべて物事は、較べ物に依つて大變感じが違ひます。御婦人方が着物を召す時に、色のウツリといふ事を注意なさるでせう。下着が黄八丈だから上着が藤色ではウツリが悪いといふ様な事は、御婦人はごなたでも御存じでせう。色に限らず、對比はすべて反對の物の比較に由つて双方とも益々其の特色を強く現はすやうになつて

來るのであります。

それで對比の最著しい例は、大きい物と小さい物とを並べると、大きい物は益々大きく見え、小さい物は益々小さく見えることです。それですから、蚤の夫婦といふやうに、御亭主が小さくて細君の方が大きい者が一緒に歩くと、御主人は益々小さく見えて、奥さんは益々大きく見へるであります。それ故、さう云ふ夫婦は一緒に歩かぬ方が宜いでせう。併ながら又ごうも自分の家内は餘り美人でなくて困るといふ心配の人は、自分が毎日日向に出て成る丈け色を黒くする事恰も印度人の様にするのです。それから細君と手を曳き合ふなり組み合ふなりして、月夜に散歩でもすれば、自分の色の黒いのに對比して、細君は色が白いから頗る美人に見えるでせう。自分の細君を美しく観せる爲めには、夫たる者は自分が黒くなる位の辛抱はせねばなりません。

かう云ふ譯でありますから、人の感じは其の強度が定つて居るのではなく、同じ物でも、他の較べ物に依つて強くもなれば弱くもなり、色々と變つて來るのであります。斯う云ふ事は何にでも應用する事が出來ます。例へば、皆さん方が東京に居られて何か御覽になり、之は東京一である、東京一であるから日本一であらうと御考になると、大さう間違ます。他に比べる物が無いから日本一と思はれるのですが、他國に出て同じ物と較べて御覽になると、今迄の物の及ばぬ事が分つてくるのです。此の時一方がますます良ければ、一方はますます悪く感じるのです。すべて較べ物が低ければ自分の方



が非常に高く感ずるけれども、較べ物が高ければ自分の方は益々低く感ぜられます。此の如く物の感じはたゞ一つでは定められませぬ。他の物と較べて見て初めてよく分つて來るのであります。

## 第二節 一般感覺

(一) 一般感覺と特殊感覺 感覺は色々ありますけれども、それを大別しますれば、一般感覺と特殊感覺との二つになります。一般感覺は又有機感覺というて、眼とか耳とかいふ特別の器官がなく、筋肉運動や内臓の働に伴うておこる感覺であります。特殊感覺といふのは、即ち五官であります。ごちらも大事なものではありますが、一般に感覺といへば五官の事をいふのであります。併し一般感覺の方も人心に取つてナカ／＼大事なものであります。

(二) 筋 覺 次に筋覺より始めて、一般感覺に屬する諸感覺の事を説明致しませう。諸君の中に身體の瘦せて居られる人はありませうけれども、全く肉の無いといふ人は無いでせう。此肉は運動の機關です。諸君が、手を動かし、足を動かし、或は全身を動かさるゝのでも、或は又舌を動かして話をなし、筆で字を書き、算盤を弾く等の場合には何時でも、筋肉が縮んだり伸びたりして色々の働きをするのであります。かゝる運動をする時に筋肉の感覺が起るのです。今諸君は座つて御出でなさるが、立つて御歸りなさる時には必ず筋肉の感覺が起るわけです。それは今まで座つて居たため、筋肉が張

り詰めて痺れが切れるほどであるから、俄にヒョイと立つには大變骨が折れる。若い人は平氣ですぐ立ちますけれども、それにしても力を要するのです。年寄になると一層骨が折れる故、腰を叩きながらそろ／＼と立ち上ります。さう云ふ時には、筋肉の感覺はよほど強く起るものであります。又今まで立つて居た人が歩き出す時、又は重いものを擦げる時には、其處に筋肉の働きが起るから一種の感じがあります。

そこで筋覺の特性はさう云ふことかといひますと、他の感覺は皆受身になつて居るのに、此の感覺は働きかけるものであります。例へば、私は殊更に見やうと思はぬでも、光が來て眼を刺戟すれば物が見えます。又私が殊更に聴かうと思はぬでも、空氣の振動が來れば物の音が聞えます。私が殊更に觸れやうと思はぬでも、寒い空氣が來れば自然と寒く感じます。然るに筋肉の感覺だけは發動的感覺であります。即ち自分から手足を動かして働かねば感覺は起りませぬ。

筋肉の感覺には大切な働があります。此感覺があるから、吾々は自分の心以外の實物を確かりと知ることが出来るのであります。外物は勿論眼でも解ります。即ち眼の内の筋肉の働きが視覺を助けて物の大きさとか何處にあるとか云ふことが分るのであります。併し眼といふものは中々偽を告げるのであります。時によると柳の枝が幽霊に見えることもあります。又時とすると外に何も無いのに妖怪などの顯はれることもあります。かやうな時に若しも筋肉が働いて之を捕へて見れば、確かに其物が



あるかないかチャンと分ります。即ち何も捕へるものがなければ、此物は實際にはないのであります。若し又掴むことが出来れば、たしかに其物があるといふことが分るでせう。それゆゑ外物を確りと知るには、手や足の筋肉の働きが一番大事であります。物の長さを子供に教へるとか、或は何處から何處まで何町あるといふことを間違なく覚えしめるには、成る丈け手に持たせて見せるとか、或は足で歩かせて見るとかいふやうにすることが必要であります。どんな家の子供でも、眞に知識を興へやうとしたならば、總て自ら觸れさせて見せることが大切であります。私は學習院に居りまして、當時の皇太子殿下即今上陛下の御教育にも時々携はつたことがあります。かういふ方にも感覺の教育をするのが必要である故、色々の種子を蒔いて草花などを御造りになつたり、或は實物教授で畑に行つて大根を抜いてお眼にかけ、殿下御自身で大根を御持ちになることさへありました。即ち之に由つて大根は冷たいものであるとか、又何の位の長さがあるとか、どんな形であるとか、何んな色であるとかいふことを、すつかり御自身で實驗をして御覽なさるといふやうな御教授をしたのです。それゆゑ今日の皇族の方々は、昔の上流の人々のやうに決して迂濶なことではない。確りした知識を有つてお出でになります。さういふ譯ですから、大根にしても唯お目にかけて是が大根でございませうといふ丈では確實でない。實際に自らお持ちになつてみると、色々確實の事がお分りになるのであります。それですから皆さんがお子さんをお育てになる時にも、それを持つてはいけぬ是を持つてはいけぬ彼れを取つては

いけぬといふやうに、子供の自由を束縛せぬがよいのであります。時として子供が何か持つと、それを持ち出してはいけぬ。それお父さんの大事な時計の硝子を毀すと大變だ」といふやうに、ただ小言をいはずに、さういふ時には、「それはお前にはいけぬから之をあげやう」といつて、何か代りの物を興へるがよいのです。又子供が、インキ壺の中へ、ペンを突込んで、字を書かうとするやうなことがある場合には、たゞ之を禁めず、「それはいけぬから之をお前に上げやう」といつて、筆か鉛筆と共に、新聞の古いのでも當てがつて、さあ幾らでもお書きなさいといふやうにしてやるのです。それで子供は喜んで筋肉を働かせいろ／＼の事を書くでせう。すべてかういふやうに唯無茶苦茶に禁めず、爲しても宜いといふことは、させるといふやうにして、段々と筋肉を働かせるやうに導くと、大きくなつても横着をせず、困難に處してよくそれに堪へてゆくといふ元氣が出るものです。暴れる子供が後に偉くなるといふのも、つまり是が爲めであります。それ故筋肉の感覺や眼や耳の感覺は實に大切なものであります。學校でも成丈け標本を持たせて子供自らによく検査せしめることが良いのであります。

(三) 臆 覺 臆と申すのは、牛肉などを御覽になると、赤い肉があつて其脇に白いゴリゴリした固いものが着いて居りませう。その白い所が臆であります。牛肉などは此處を切つて犬にでもやつてしまひますが、生活體にあつてはこれが大事な働きをするのであります。すべて私共の骨と肉とを聯絡す



るものは腱であつて、それが骨に密着して肉を引張つて居るのであります。腱の中でも一番有名なのは踵の上の所にあるものでこれは身體の内の一番大きな腱です。昔希臘にアキリースといふ大變脚の速い人がありましたが、後に此の人が力が抜けて大變弱くなつたことがあるのです。それはどうしたわけかといふと、踵の上の腱が斷絶した爲であります。それ故今でも生理學者は之をアキリースの腱といつて居ります。さて腱に感覺のあることはよく分ります。誰でも足を真直に下に着けて置いてその先ばかりをチョット舉げると、踵の上が釣つて一種の感覺が起ります。かやうにして足が色々に變る度に腱の感覺が起つて居るのです。それに依つて、私共は足の位置がどう變るといふことを知ることが出来るのです。

(四)關節覺 私共が運動する時には、節々が色々に曲るでせう、其曲る時に、一種の感じを與へるのであります。これを關節覺といつて腱覺及び筋覺と共に働いて、吾々に大きさや距離の知覺を與へる基をなすものであります。是等の感覺を總稱して内觸覺と申します。

(五)權衡覺 これは矢張り一般感覺の一種であつて、面白い感覺であります。耳内に三半規管といふ機關がありまして、其機關の内に液があり、液の中に小さな砂粒のやうな骨の塊りが這入つて居ます。それが私共が身體を動かす毎に彼方へ觸れたり彼方へ觸れたりしてその位置を示すのであります。うづう／＼廻りをすると、目が眩んで倒れることがあります。子供は比較的によく耐へますけれども、

大人は二三遍やるとすぐ倒れます。これは畢竟耳の中の機關が亂れるからであります。船に酔ふのも亦動搖のために此機關が錯亂するからであります。それ故此機關の完備しない子供は船に酔はないけれども、段々完備するに従つて酔ふやうになるものです。諸君が今自分は斯ういふ風に座つて居るといふことを覺られるのは、此權衡覺のある爲めであります。

(六)其他の一般感覺 其他一般感覺に屬するものには、食道覺といふのがある。之は何か召し上がる時に分ります。大變にお腹が空いたとか、お腹が張つたとか、或は胸が悪くなるとかいふのは、此感覺であります。次に血行覺といふのは血の循環の感じで、呼吸覺といふのは空氣を吸つたり吐いたりする時におこる感覺であります。亦性覺といふのは、生殖器の感覺であります。

(七)感覺の數 斯の如く一般感覺は澤山あります。古來感覺は五つと限つて五官といひますけれども、どうして五官どころではない。丁度薩摩薯が安くなると貫目が段々殖えるやうに、感覺もその數が段々殖えて來ました。今日では一般特殊の二つを合せば十官位ありませう。今後一般感覺は新に發見せられるかも知れません。

(八)一般感覺と氣分との關係 一般感覺は、今お話しましたやうに、之は血が循環する感覺であるとか、之は耳の内の權衡の感覺であるとかいふことは、明らかに分らぬものです。併し乍ら是等多くの刺戟が腦に感じてそれが一つの纏つた氣分となるのです。御婦人方などは殊にさういふことをお感じなさ



ることが多いものです。例へば、天氣が悪い時は、朝起きても、今日は何だか頭が重くて氣分が悪いといひ、亦天氣の好い時には、今日は何となく氣分が清々しいといふのは、何に基くかと申しますと、是等は皆有機感覺或は一般感覺といふ不明の感覺から來るのであります。それ故何時も氣分を清々しくしやうと思つたならば、平生よく氣を付けて、身體機關の働きを十分に置いて置くに限りません。又氣分が悪いといふのは、丁度氣分が好いといふことの反對で、何處といふ事なしに不快なのであります。けれども、キツト身體に何處か悪い所があるのです。醫者が細密に調べて見れば、例へば、心臟が悪いとか肺臟が悪いとか或は食ひ過ぎて腸を傷めたとかいふことが分るのであります。是等の悪い處があると、それが一般感覺に由りて氣分に影響するのであります。

そこで唯今此處に來てお出でなさる方々の中にも、必ず氣分に差があらませう。氣分の快い方々は私の話をお聞きになつてもよくお分りになるでせうが、氣分が悪い方々は早く退屈もなさるでせうし、又領會なさることも骨が折れるのです。それ故氣分の悪いのは何につけても不幸です。随つて身體を丈夫にすることが教育上最も大事であります。

(九)氣分と氣質 此氣分も一度や二度僅の間悪いといふことは餘り全體の心に影響もないでせうが、一年も二年も何所となく氣分が良くないと、終には何を聞いても面白くなく、何を見ても愉快でなく、人が親切に言つて呉れ、ば却つて腹を立て、今迄難有いと思つた人も存外恨めしくなるといふやうに、

其人の性質が全く變つて來るやうになります。これは即ち氣分が氣質に影響したのであります。氣質といふことは、後に精しくお話しいたしますけれども、今簡單に説明しますれば、人には何時も愉快な様子をして居てその人の顔を見ると氣持が快くなるといふやうな人があります。又男でも女でも其人の顔を見ると何時も不快になるといふやうに沈んで居る人もあります。是等は皆氣質の然らしむる所であります。又或る人の前へ出ると自然と心が改まつて、先方は笑つて居ても此方は嚴格にせねばならぬといふやうな心持のする人もあります。是等も亦其人の氣質に由ることが多いのであります。或は又何時も愚圖々々してサツパリ譯が分らぬといふやうな人もある。是も亦其人の氣質の爲めであります。然らば其氣質は何處から來るかといふと、全く身體の状態から來るのであります。それゆゑ身體の状態に注意すれば、愚圖々々して居る人でも活潑の人となることが出來、或は始終經卒で騒いで居るやうな人でも、自然と落ち付きのあるやうにすることも出來ます。是等は平素身體の状態から氣分を動かし終に氣質を變へて來るのであります。

(十)厭世觀と樂天觀 氣分が氣質に影響する例はいくらもあります。現に諸君は實際に於て此世の中は楽しいと思はるゝこともあり。又或時は厭はしいと思はるゝこともありませう。是等は其時の氣分に由ることが少くないのであります。これが反覆永續すれば氣質になるのです。又其日稼ぎの立ン坊などが、五圓か拾圓の金を儲けて、偶に酒でも飲むと、樂天家になり世の中は面白いと思ふけれど



も、若し一日間が悪くて儲からぬと、直ぐに困つて厭世觀を起し、コンナ世の中は嫌だ、早く死にたいといふやうに感じて來るでせう。是等は一日の中に樂天觀から厭世觀に變り或は此反對に變るのです。それで若し其厭世的の考が永く續いて仕舞ふと、何時もクヨクヨとして川端柳が水の流を見て暮すやうに吞氣な譯に行かず、更に進むと、猫いらすの厄介になるやうになつたり、或は汽車の厄介になるといふやうな事にもなるのであります。詰り何となしに身體の状態が悪くなると世の中が嫌になつて切羽詰つて死ぬに至るのであります。けれども、眞に心が健全であり身體が丈夫であり、さうして宗教道德の心を持つて居れば、どんなに切羽詰つてもなか／＼死ぬものではありません。自殺するに何處か身體に悪い所があるのです。即ち身體に基いて悪い言行をなし、或は其の行爲に基いて身體が悪くなるのです。それが、有機感覺に影響し氣質に影響して、遂に世の中の觀方にまで影響して來るのであります。それゆゑ諸君が子供を勢のよい子供に育てやうと思はれるなら、幼い時分から身體の攝生に注意し、何時も氣分の清々しいやうにしてやり、樂天的・積極的・進取的に強い精神を養はしめるやうに努めねばなりません。

### 第三節 味 覺

(一)舌と味覺 味を感じる機關は諸君の御承知の通り舌であります。舌にはその上面に味蕾として細か

い粒々があります。その味蕾が即ち味を感じる機關であります。味を感じるには、何でも液でなければならぬのです。すべてよく噛み碎き唾液に混じて汁となし、その汁が舌の上の味蕾に觸れて、それから神經に傳はり腦の中樞に感じて始めて味が分るのであります。

(二)味覺の種類 味の種類を分けて見ますと頗る簡單になります。元來味には色々な名が附いて居りますけれども、學問上で純粹に分けて見れば、たゞ四つの外無いのであります。即ち甘・酸・鹹・苦であります。猶辛い唐辛とか、澁い柿とか、エゴい芋のやうな物もありますけれども、是等は純粹の味では無いのです。其證據には、是等の物は何處でも總て粘膜のある軟かい皮膚に觸れると皆感するのであります。それで純粹の味は四種より外に無いのです。是れが色々と雜つて食物の味が出來て居るのであります。

(三)味覺と婦人の心得 婦人の方々は殊に味覺の事を聞いてお置きなさる必要が多くあります。一體舌といふものは知識を與へることは少ないもので、柿を食べて大變伶俐になつたとか、薩摩芋を食べた爲めに急に學者になつたといふやうな事はありませぬが、味覺が人の感情に影響することは著しいのであります。旨い物を食べた時には心持が快い。すべて人が理窟を言つて怒つて居るやうな時でも、お腹へ旨い物が入ると何時の間にか闊麗顔が地蔵顔になり、ア、旨かつたで濟んで仕舞ふことが多いのであります。一體人が理窟を言ふのは大概空腹の時に限つて居ります。それで家庭がよく治まるの



と治まらぬとは色々の原因もありますけれども、食物といふことも、なか／＼大きな原因になります。主婦が食物の事によく氣を付け、たとひ廉價の材料でも旨く食べさせる様になると、主人は勿論一家族皆満足するでせう。平生主婦が注意して、宅の主人は斯ういふ物が嗜きだとか、斯ういふ物は滋養になるとかいふ事を考へ、適當に調理をして進めるやうにすれば、主人も必ず喜んで違ひないのです。固より今日は旨い物を食べさせて呉れたから可愛がつてやらうといふ人も無いでせうけれども、誠心を以て盡して呉れる事は、自然に主人の心身を快くし、随つて家庭も圓く治まるやうなことになるのであります。それ故宿屋でも料理屋でも料理番の良いのを置くことが大事であります。それを置けば、旨い物を拵へて客に出すことが出来るので延て料理屋や旅籠屋の人氣に關係するのであります。上流の家庭では無いでせうけれども、下等社會殊に東京の九尺二間の裏店などでは、夜半に摺鉢が飛んだり摺粉木が躍つたりすることがあるさうです。それは何の爲めに起るかといふと、多くは女房が宅で横着して居つて、亭主が歸つても食物の事などには一向氣を付けてやらないと云ふ事が原因をなすのです。即ち何時でも干物など手のかゝらぬ物を食べさせて置くといふやうに、すべて夫の爲めを思はぬといふことから來るのです。實に食物は人の生命の根本で、たゞ身體のみならず、精神にもい／＼影響しますから、餘程氣を付けねばなりません。

(四)味覺と料理 元來食物の味は舌に味覺ばかりで無しに、その他の感覺とも色々の關係が有ります。

是れは殊に氣を付けねばならぬ事です。第一に舌觸り、口觸りといふことがあります。いくら旨いものでも口へ入れて見てゴソ／＼するやうな物はいけないのです。軟かで皮膚に觸れる工合が誠に宜くなくてはなりません。又温度の關係もあります。幾ら旨い物でも冷めて居たり、又非常に熱かつたりしてはいけません。又どんなに旨い物でも香が悪いといけない。柚子を入るとか欸冬の菜などを入れると、その香が大さう食物の風味を助けるのです。皆さんが風邪をお引きなさつて鼻がつまると、物の味が分らぬでせう。これほど物の香と味とは離れない關係が有るのです。さう云ふ事は誰でも分つて居る事ではありますが、其外にも尙形や色が大きさう食味に關係いたします。即ち食物の形や色の附合せといふ事に注意せねばなりません。色にしても兎の糞のやうに黒いものばかりでもいけないし、又何を見ても赤い物ばかりでもよくないのです。私の知人に日清戦争前に支那に往き彼の地で病氣になつて殆んど百日程も臥せつて居た人がありますが、その間一番困つたのは食物であつたと申します。今なら日本人も澤山行つて居ますから日本料理でも何でも食べられませうけれども、其時分には日本料理などはなか／＼得られないから、仕方なしに三度が三度支那料理を食べたのです。そこで附合せを見ますと、豚の肉を切つてドロドロに煮たものとか、卵の腐つたブーンと妙な臭のする様なものとか、或は犬の嘔き出したやうなものもあれば、猫の排泄したやうなものもあつて、ごうも弱つたといふことです。所が漸く治つて長崎に歸着し久し振りで我國の旅籠屋に泊つて出て來る料理を見ると、



色の配合が何とも云へぬ美しさを見せて居ます。瑪瑙のやうな綺麗な色をした鯛の刺身が出る。それも赤いのばかりでは無い、白い物もあり半ば白いのもある、またそればかりでなく、コツチには山葵が淡緑色を呈して小山を作り、ソツチには海藻が眞紅をなして森を現はし、醤油の紫があれば大根おろしの白があるなど、一つの皿の内に五色燦然として美観を極めて居る。そこで自然と箸が出て魚肉が口へ飛び込む様に愉快に食べたさうです。此の時其の人は日本といふ國は難有い國である。食物にまで美術の現はれて居る無上の美しい國であると思つたと話しましたが、如何にも左様だらうと思ひます。さう云ふやうに食物の色々の附合せから、人が食物を見るや否や、是は綺麗である。旨さうであるといふ感じを起させるやうにする事が大事であります。かゝる事を考へずに、無茶苦茶に味さへ好ければ、よいといふ積りで料理すると、折角實質は良い物が出来ても失敗して仕舞ふことになるのです。

以上は婦人方や料理をする人の爲めの注意であります。食べる方の人即ち主人なりお客なりの方も餘程氣を付けねばなりません。折角奥さんが旨い物を拵へて今丁度出して宜しいといふ時機に「御飯が出来ましたから入つしやい」と言つても、「ウム今行く〜」で何時までも食べに来ない。奥さんの方では早く来て下さらぬとお汁も御飯も冷えて仕舞ふと色々心配して、「サア御汁が冷えますから早く来て下さい」といつても、主人はやはり「ウム今行く〜」で一向出て来ない。三度目に催促に行くと「五月蠅」などと叱られる。それで仕方がないから捨て、置く。やうやく御飯を食べる段になる

と、「何だ斯んな冷たい物を食はせる」などと攻撃する。さう云ふのは細君の罪では無い、食べる方が悪いのです。此の如く味は色々な感覺と關係が有るから、決して唯甘酸鹹苦の純粹の味ばかりで料理が出来るのではない。主婦や料理人は、それ等の事によく氣を付けて、取合せをして置き、なほ溫度や、對比の道理にも注意する事が必要であります。

#### 第四節 味覺と人生

(一) 食味と平和 次ぎには味と人生と、どう云ふ關係が有るかといふことをお話いたしました。先づ第一に、人々の間の平和とか、喜びとか、樂みとかいふことは、味から導かれる事が決して少く無い。意地が汚いやうであるけれども、すべて人は、何か事があると、直ぐに宴會を開くものです。お祝でも、仲直りでも、皆宴會をします。産れた時にも食べる、婚禮の時にも食べる、死んだ時にも食べる。人間は、皆食べる事に依つて禮をなして居るのです。實に食味は、人の感情を和げる上に大なる關係があります。巧者な外交官はタツタ麥酒一本で、國の大事を纏めて仕舞ふことさへあるさうです。かういふ點からも、味の人生に大なる關係のある事が分ります。

(二) 味覺を以て生活する人 モウ一つは舌の働きて生活をして居る人があります。尤も舌の働きて生活するといふと、我々も其一人であるかも知れませぬが、さうでなしに唯だ味覺のよく發達して居る



丈けて生活して居るものがあるのです。我國の酒利などもそれでありませう。これは一々酒を飲んで居つてはたまりませぬ。どんな酒飲でもグデン／＼になりませう。唯チヨツと舌に觸れると、是はさういふ酒だといふことの判定が出来るのです。又茶の味を極める人があります。それは茶が出来ると其葉を取つて噛んで見て、此茶は一斤何圓位に賣ればよいといふことを判定するのです。人に依つて違ひさうなものでありますけれども、巧な者になると多くの人の選ぶのが、チャンと一致するさうです。私の友達に臺灣の拓殖課に出て居た人がありますが、此の人に話によれば、茶が出来ると、臺灣土着の人々の中から、鑑定者を五人選んで、價の投票をさせるのに、其の價付が大抵皆同じことで、幾らも違はず、一斤二圓とか二圓五十錢とか云ふ位の茶に於て、僅かに五錢位の違ひがある程ださうです。是等の人は、たゞ是丈のことをする爲めに雇はれて、相當の月給を貰つて居るのです。それゆゑ是等の人は唯味の感覺丈けて生活することが出来るのです。かく唯一つの感覺の働きでも人生に取つて大なる助となるのです。

### 第五節 嗅 覺

(一) 嗅覺の特性 次には臭ひの感覺のお話に移ります。嗅覺は、味覺のやうにチャンと種類を分ける事は出来ません。たゞ之はよい匂ひだとか、悪い臭ひだとかいふことが出来るばかりです。その外は、

薔薇の匂ひとか麝香の匂ひとか、或は又「ヘリオトロップ」の匂ひとかいふやうにその物に就いて分けることが出来るばかりです。心理學者は是を學問的に分けやうと思つて骨を折つて居るけれども、なか／＼出来ません。何故かといふに、臭ひの性質は非常に感情的のものでありまして感情は到底細かに區別し難いからであります。御覽なさい、悪い臭がすると厭な臭だと云つて直ぐに人が厭な顔をするでせう。物を食べて居ても、厭な臭を嗅ぐと胸が悪くなつて非常に人の感じを動かすものです。其反對に匂のよい香水などは矢張盛んに人の情を動かすのであります。かう云ふやうに嗅覺は感情的のものでありますから、さうしても精しく分けることが出来ないのです。味も感情的でありますけれども、臭の方が味よりは一層感情的であります。

(二) 嗅覺と本能 然るに嗅覺は動物或は野蠻の方が我々文化人より餘程よく働くのです。我々の鼻はよほど利なくなつて居るのです。是は何故かといふに、動物や未開の人は鼻の助に依つて敵を防いだり餌を求めたり配偶を求めたりするのです。此三つの働きは本能として大切なものであります。例へば、弱い動物が遠くから獅子の臭を嗅ぎ分けると、早くから隠れて出ないやうにするでせう。又鼠が猫を知つて居るといふのも敵を防ぐ爲めでありませう。之を反對にいへば、嗅覺は餌を求める爲めになるのです。即ち猫が臭を嗅いで此邊に鼠が居さうだと思へば、其處を去らず頻りに探して終に之を捕へるのです。このやうに、遠くから鼻が利くと、餌を求めるのに都合がよいのです。然るに、鼻の利



かぬものは餌を求めることも出来ないし、敵を防ぐことも出来ないから、生存を全うし難いのであります。なほモウ一つは、鼻の利かぬものは配偶を得ることが出来ず、随つて子孫を遺すことが出来ないのです。即ち動物は鼻で雌や雄を嗅ぎ出すのですから、その鼻が利かねば配偶が得られません。動物は以上のやうな鼻の働きをするのですが、人はそんな必要がない。鼻で米國人を防ぐといふこともなければ、或は之は露西亞臭いぞと云つて嗅いで見る必要もないのです。それから又、臭を嗅いで食事のある所を探し出す必要もありません。尤も鰻屋の前だけは例外かも知れませんが……何にせよ臭が解らねば食物は得られぬといふものではない。併し配偶を求める上には多少の必要があるでせう。皆様も御経験があらませう。獨身者では是から妻でも求めるといふ人は香水などをふりかけます。又之と同じく夫を求めるといふ年頃の婦人も香袋を以つて身を鑑ひます。さうすると誰が通るか分らぬけれどもよい香がするから、人が振り向くといふやうになるのです。勿論是等は人の注意を惹く爲めのみするわけではないけれども、矢張り遺傳的の傾向が残つて居るのです。それですから年寄りも誰れも香水などをつけない。これは新に配偶を求める希望がないからでせう。併し年寄りになつてもこの希望のある人は頻りにコスメチックを付けたる香水を振り掛けたるるのであります。

## 第六節 嗅覺と人生

(一) 香臭と社交 鼻と人間の生活とはどういふ關係があるかといひますと、是れ亦味覺以上に大切なものであります。前に申した香水なども社交上大事なものであり、厭な臭氣を發する人は、人から厭がられるばかりでなく、終には其人は交際場裡に立寄ることが出来ないうやうになります。殊に客商賣をする人が腋臭などで臭いのは最も不利益であります。一體何でも臭いものは好ましくないものですが、人をして悪い感じを抱かせるやうな臭は努めて避けねばなりません。佳き香は實に人をして一種の清淨な感を引き起させます。ハイカラの香水と伽羅の奥床しい香とは、逆も比較の出来るものではありません。一體香は唯臭いばかりでなく、煙がスーツとなやかに立昇るところは人の心をジツト静めるものです。昔から精神を沈着ける時には香を立つてその前に座るといふことが行はれて居ます。要するに香はその香と煙とで人心に少からぬ影響を與へるのであります。唯今香のことを多く述べましたが、香に限つたことではなく、香水にしても花の香にしても、すべて佳き香は前に説いた本能以外に大に人心に影響しますから、總て人に不愉快な感じを與へないやうに氣を付けることが必要であります。支那の藝者は香の良い花を頭に着けるさうです。それは非常に高價なもので、冬でも温室でついで置いて花の絶えぬやうにするのださうです。是れ即ち嗅覺に宜いものを頭に付けて人に快感を與へる爲めでありませう。一般に修養のある人は個人としても香臭といふことには心を用ゐるのがあたりまへであります。



## 第七節 皮膚覺

(一) 皮膚覺とは何か 次には皮膚の感覺の話です。吾々の肌は物が觸れると、一種の感じが起ります。之が即ち觸覺又は壓覺といふものであります。又吾々が寒いか暑いか感ずるのも、皮膚の感覺であります。温度覺といふのであります。それですから皮膚は唯觸れたといふことが分る計りではなく暑く寒いといふことも分るのであります。それからモウ一つ皮膚は何處に觸れたといふこと分る働きを有つて居ます。それは局部徵驗と申すのであります。何處に觸れたといふことが分る働は、たゞ單純な感覺ではありませんから、その働きも外の感覺よりは後れます。是れは小さな子供を試して御覽になると分ります。即ち幼い子供には局部徵驗がよく分りませぬ。子供の目を瞑らして置いて、白墨を取つて子供の頬の邊を衝いて、今何處に觸れたか言つて見るといふと、とんでもない所を示すことがあります。これはつまり局部徵驗が發達して居らぬからであります。所がそれのよく發達して居る人はどうかといふと、お婆さんなどが何かモジ／＼して居ると思ふと、直ぐに指で摘んで蛋を捕ります。これはよほど皮膚覺が發達して居なければ出来ぬことです。これは概してお爺さんよりもお婆さんの方が上手です。つまりお婆さんは小さい時から始終手の先を働かして居るから、皮膚の何所に何が觸れたといふことが直ぐに分るからであります。即ち皮膚の何處に觸れたといふ感じがなけ

れば蚤を捉へるわけにゆきませぬ。斯の如くにして皮膚には三つの働きがあるのです。

(二) 皮膚覺の練習 皮膚の教育をすることが亦必要であります。其の法は、成る丈け種類の異つた色々の物を皮膚に觸らせ、さつして皮膚が寒さ暑さに十分耐へることの出来るやうにするのであります。貴族や富豪の家庭では、子供を大事にして始終着物を澤山着せておくから、段々皮膚を弱くして仕舞ひます。さういふ子供はチョット外へ出ると直ぐに風邪を引くのです。そこで又着物を着せるものですから、終には笱の化物か何かのやうになつて仕舞ひます。かういふやうに何枚も／＼着物を着て居るといふことはいけないのです。私は三十年來毎朝冷水浴を行つて居りまして、雨が降つて居やうが雪が降つて居やうが之を缺かした事はありませぬ。私は以前田舎に居て、廣い庭のあるところに住んで居ましたが、其の頃は朝起きるとすぐに裸になつて庭の中の池の邊の水の出るところに行つて頭から水を浴びるのです。さうすると冷たい皮膚は直ぐに暖かくなります。これほど壯快な氣持はありません。人が海水浴に行くとなせ風邪を引かぬかといふに、皮膚が丈夫で其働きが自由になり、寒ければ寒さに應じ暑ければ暑さに應ずるやうになるからであります。皮膚と云ふものは、教育に依つて強くも弱くもなるものであります。私は平生皮膚を鍛鍊して居ますから、寒中でもシャツは一枚しか着て居りませぬ。人は出来るだけ薄着をする方がよいのであります。



第八節 聽 覺

(一)音の起因及び聽覺の範圍 次は聽覺であります。先づその物理的説明といふことを御話いたしませう。一體音と云ふものはどうして出るかと申しますと、物理学を習つた人は直ぐに分りませうが、音は即ち物の震動から起るのです。物がブル／＼と顫へてこの顫へが空氣に傳つて音が起るのです。今私の聲も私の咽喉の聲帯がブル／＼顫へるから生ずるのです。此の顫へが一秒時に十六になると初めて音として耳に聞えます。十六以下では幾ら顫へても音として感じない。それから人の聲が一番低いのが一秒時に百二十八顫へるのです。女の聲には斯んなのは無い。男の聲の中で一番低いのがこれです。それから人の聲で一番高いのは、一秒時に千二十四も震動します。是れは女で無くては出ない聲です。女の黄色い聲は私には眞似は出来ませぬが高い聲です。それゆゑ唱歌をするのでも、男はバスの方を出し、女はソプラノの方を出すのです。それからピアノの如き大きな樂器となると一秒時に殆ど五千も震動し得るのです。それから自然に木が風の爲めに靡られて發する音とか、汽笛のピツと言ふやうな音は、殆ど一秒時に五萬も震動するさうです。それ迄は人が音として聞くことが出来るけれども、それより以上は音としては感せず、耳が痛くなり、鼓膜が破れる事さへあるのです。それで人が通常聞く聲は、一秒時六十四から五千の間であります。人の聲は無論百から千の間が多

いのであります。以上が物理學的の説明です。

(二)樂音と噪音 それから聽覺の種類を挙げますと、たゞ騒がしい音と調子の整つた音との二つに分けることが出来ます。前のは噪音で後のは樂音であります。大砲の音とか物の毀れる音とか潰れる音とかいふものは、噪音で、それから琴の音とかピアノの音とか總て樂器の音は樂音であります。これは高低の調子があつて面白いのであります。

第九節 聽覺と人生

(一)音と人 聽覺は人生にどう云ふ關係が有るかと申しますと、是れ亦非常に大事なことで、前の諸感覺に較べると、感情の上から言つても亦智識の上から言つても、一層大切であります。第一に、吾々の交通に必要な言葉は、聽覺に依つて知る事が出来るのです。私が斯うやつて大勢の方々に話をして御聞かせ申すことの出来るのも、皆さんに聽覺が有り、私にも聽覺があるからであります。それゆるお互に自分に思うて居ることを傳へたり、又人の知識を受けるといふことは、耳の御蔭であります。耳は實に非常に有用な働をなして居ます。勿論かゝる働は眼にも出来ませぬけれども、耳の方が殊に感じが強いです。それ故私の講義の速記を御覽なされると、此處に御出でにならぬでも、私が御話したことは御分りになるけれども、色々と上げたり下げたりして言葉を變へて言ふ事は、逆も此の



速記では寫すことは出来ない。幾ら荒浪さんが速記が上手でも、私の聲が自然に出て行つて耳に傳はつて、現在聴いて居る其儘に聞へるといふ譯にはゆきませぬ。聴覺といふものは實に人の感じに強く影響するものであります。即ち人が驚くのも悲しむのも、音に基く事が多いのです。こゝによく氣を附かねばならぬ事は、幼兒に滅多な音を聞かすものでない事です。妙な音がすると子供は啼き出す。啼き出す位なら宜いが、餘り變つた大きな音がすると氣絶して仕舞ひ、其の爲めに片輪になるやうな事が偶にはあります。私の調べた兒科雜誌の中に、次の報告がありました。それは五つになる女の子が自分の弟の節句の幟が立つて居る下を通り、その幟の風に動く音を聞いて驚いて氣絶して仕舞つた。それから醫者が段々療治をしたが、其爲めに耳を悪くして、生涯聾啞になつたと云ふことです。一體幟の音は妙な音で、急に風でも來るとポロ／＼と平生聞き慣れぬ音を發します。昔の人は手拭をしぼつてバタ／＼と音のするのを大さう嫌ひました。それは此の音が人の首を切られる時の音の様だと申す爲です。丁度幟の音も之と同じ様な音がいたします。それを弱い女の子が何も知らずに驅け出して居る時に突然聞いたから、ビツクリして倒れたのです。一體音は色や形よりも人を感動させることの強いものであつて、聲をやさしくして言ふのと強く言ふのとは、聞く方に非常に違つた感じを與へます。優しく言うてやると、子供はよく言ふ事を聴きますが、若し荒々しく言ふと、假令言ふ事は聴いても、ナニといふ氣になつて心服しません。それですから人を使ふのでも人を諭すのでも、成る丈け聲を優

しく沈着して話してやらねばなりません。勿論猫撫聲などいふのは宜しくありませぬが、成る丈け荒々しい言葉遣などをせぬ様にして行くことが大事であります。また音樂の樂は婦人に最も必要であります。家庭の仕事も構はずジャラクラして始終音樂ばかりやられては困りますけれども、時に琴を奏でるとか、三味線を弾くとか、オルガンを鳴らすとかいふことは、一家の平和に頗る有効であります。主人をして餘所へ行つて藝人の三味線を聞くよりも、家庭で娘のピアノを聞いた方が面白いといふやうにさせたいものです。現に米國はかういふ域に達して居るやうです。米國ほど音樂の普及して居る處は少いといふ事です。かゝる事は家庭の圓滿に大に影響がありますが、それは皆聴覺からの仕事でありますから、聴覺は人生に取つて大切な働きをして居るものであります。

(二) 耳聞の學 所が此處に注意しなければならぬ事は、所謂耳聞の學と言つて、耳で聞くことが餘り便利である爲めに、實際の事に當つて、調べずに聞いたばかりですぐに之を眞理として受け取る者があります。即ち實際觸れて見ねば分らぬことでも、耳で聴いて済まして居るのであります。今私の話して居ることでも、諸君が之を聞かれたばかりで済まして置かれるなら、所謂耳聞の學であります。諸君が實際にやつて當て箝めて御覽なされば、初めて眞の學問となるのであります。すべて實際に當らねば分らぬ事までも、唯口で話して済まして置いてはなりません。かやうなことをすると、時として飛んでも無い間違ひが起ることがあります。曾て第一高等學校の學生が、友人の死を弔する爲めに、



坊さんを頼んで法事をしたことがありました。その坊さんは前田慧雲師でありましたが、お勤の後で追弔の説法をされました所が、前田さんが、「生死シヤウジの境を蹴破らねばならぬ」といふ事を繰返し／＼言はれたら、生徒の一人が、「あの坊さんは温順しい人だけ共障子の界を蹴破るなごひごいことをいうではないか」と驚いたといふことであります。是れは生死の境と障子の界と間違つたのであります。それゆゑ物は耳から聞いたばかりではいけない、どうしても本當に其意味を解するやうに努めねばなりません。若し不審に思つたら、文字に書いて見るとか、或は物に觸れて見ることにせねばなりません。特に子供には聞かせた丈けではいけない。必ずそれ／＼適當の感覺に訴へて、物事を確實に知らしめることが必要であります。

### 第十節 視 覺

(一) 眼の構造 眼は實に巧妙な機關であります。耳も固より巧妙であります。眼の方は一層巧妙であります。眼球は外から見れば唯一つのやうですけれども、實は一つでは無く、幾つもの機關が重なつて居るのです。眼の一番底には網膜がありまして、之に外界に在る色々の物が映り、それが脳髓に影響して初めて其物の何であるといふことが、はつきりと視へるのであります。

(二) 光覺と色覺 視覺の種類は光と色とです。此二つは感覺が違ひます。光の一番強いのは純白、光の一番弱いのは黒で、其の間に灰白とか灰色とか色々の階級があるのです。普通は黑白などを色と云ひますけれども、實は光であります。色には赤と樺と黄と緑と青と紺と紫との七色があります。此の外いろ／＼の混色や又はその濃淡に由つて無数の色が生ずるのです。光の中にも澤山種類がありまして、二つの感覺を合せると三萬以上も異つた種類があるのです。

(三) 色 盲 眼はかやうな細かい働きをするものであります。不幸にも世の中には色の分らぬ人が有る。赤い色が緑色と一緒に仕舞つたり、或は色が全く分らぬ人もあります。それを名けて色盲と云ふのです。純粹の意味の色盲は、日本には比較的少いのです。併し或意味の色盲は随分澤山有るさうです。……純粹の色盲の人が電車の車掌になつて居たゝめ、赤と緑とを一つに見て電車が衝突したといふ事があります。それゆゑ此の頃は何れの會社でも人を採用するに、眼の試験をします。

(四) 餘 像 次には餘像又殘像といふことに就いてお話しませう。餘像の試験は簡單な物で幾らも出来ます。例へば、白い紙に黒い圓を描き、之を見つめておいて白壁などを眺めれば、壁に光る圓が映つて見えます。又飴屋の袋に圓が附いて居つて之を廻しますと動いて廻るやうに見えますが、是れ亦餘像の實驗の例になります。これは何の爲めであるかと言ふと、前に見たのが網膜に残つて居る中に、アトから／＼輪が見えて来るからです。丁度佛教で、物が空であるのに實の如く見える事を、火の輪のやうな物に譬へると同じことです。即ち線香をグル／＼廻すと、火の輪のやうに見えます。



或は又星が流れる時長い火が流れて来るやうに見えます。是れ皆前の印象が網膜に残つて居る爲めです。是等餘像の理を應用して色々の玩具が出来て居ます。活動寫眞の如きも亦この理を應用したのであります。

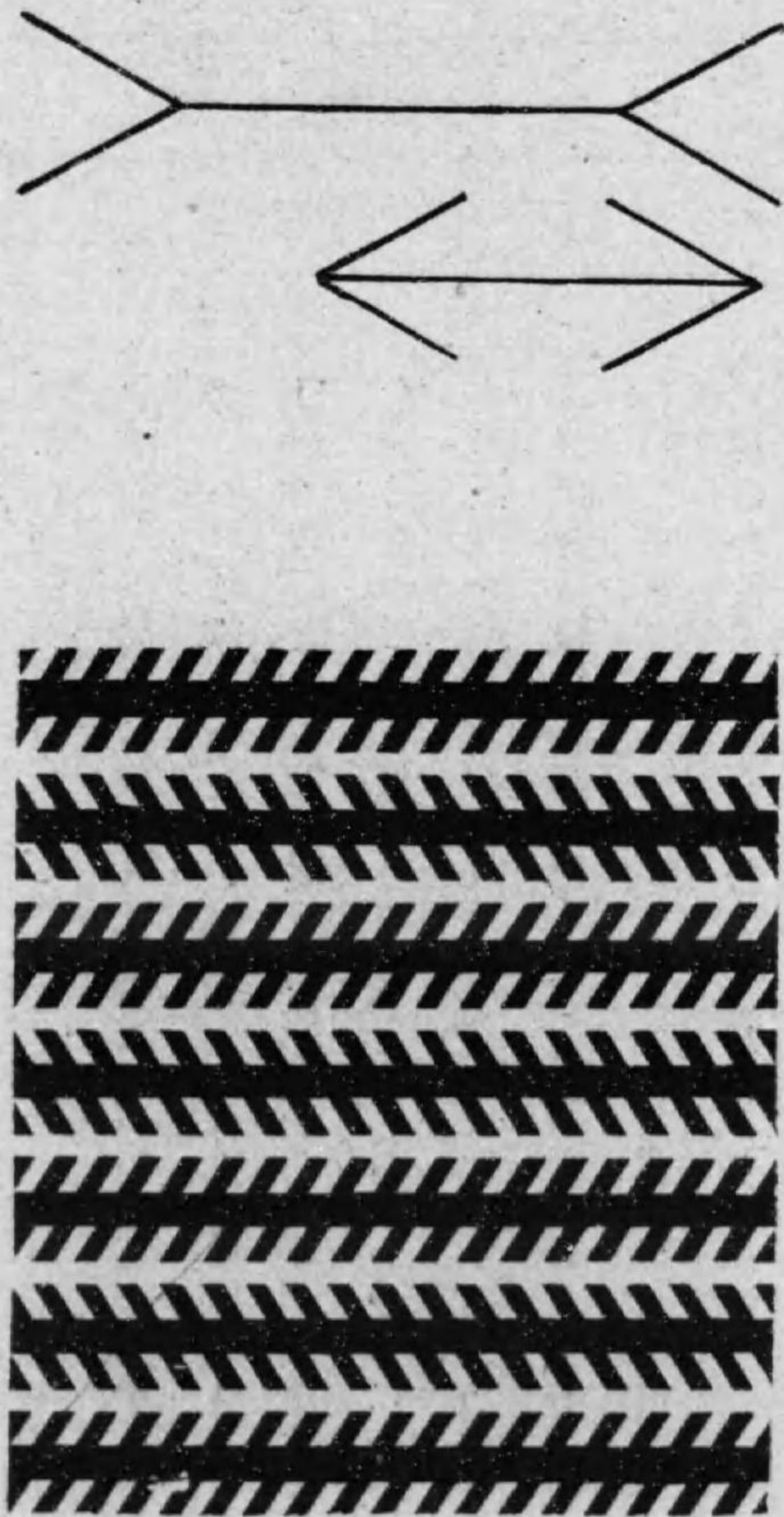
### 第十一節 錯 覺

(一) 錯覺とは何か 次に錯覺のことをお話致しませう。私共は眼で物を見て間違ないと思ふのでありますが、眼はするぶん間違を傳へるものであります。例へば、第二圖の中の上にある二線は、何れも同じ長さであります。其兩端に附いてゐる線が、外に向くか内に向くかに依つて、同じ長さとは見えません。御覽なさい、上の線が長く下のが短かく見えるでせう。また第二圖中の下の方の線を御覽なさい。七條の黒線は皆並行してゐるのですが、數多の短い切線のために、並行してゐるとは見えません。第三圖も同じです。中央の二並行線は、それを横切る放射線の爲めに中央部が少しく外方に曲つて見えるでせう。此外眼の見損ひは幾らもあります。

(二) 錯覺と日常生活 かく眼は關係に依つて色々と間違はされるものです。これは眼ばかりでなく、日常生活に於ても幾らもあります。例へば、人間は裸體にしてしまへば誰も同じだけれども、色々飾りをするると全く變つて見えるのです。また坊さんが錦襦の袈裟を掛けると、大變偉さうになり通常の人

でも正二位とか公爵とかいへば、大層偉さうに思へるのです。鼻低くで頬高の女でも綺麗な着物を被

第 二 圖



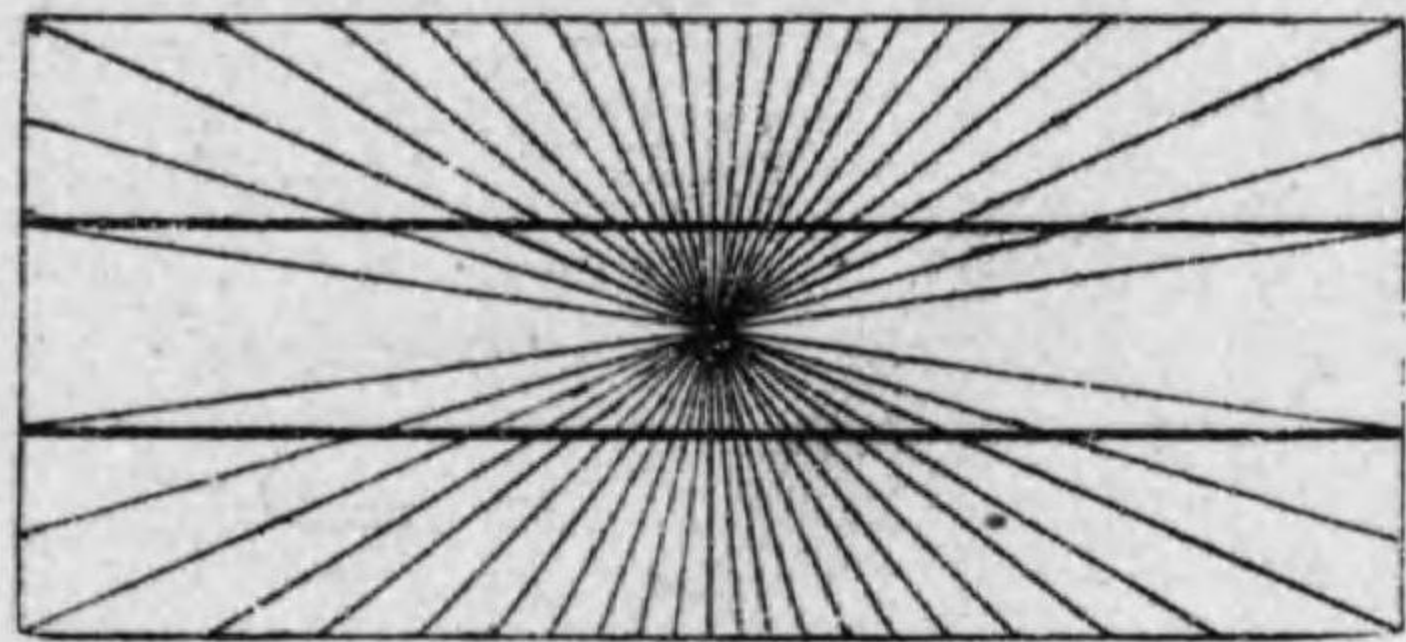
せてえらいお化粧をすると、偉さうに見えるものです。併しそれを剥ぎ取つて裸體にして見れば、皆同じことです。諸君は大に悟つて宜しいです。

此の如く眼は間違ひ易いから物は只見たばかりではいけません。必ず實際にそれ／＼の感覺を働か



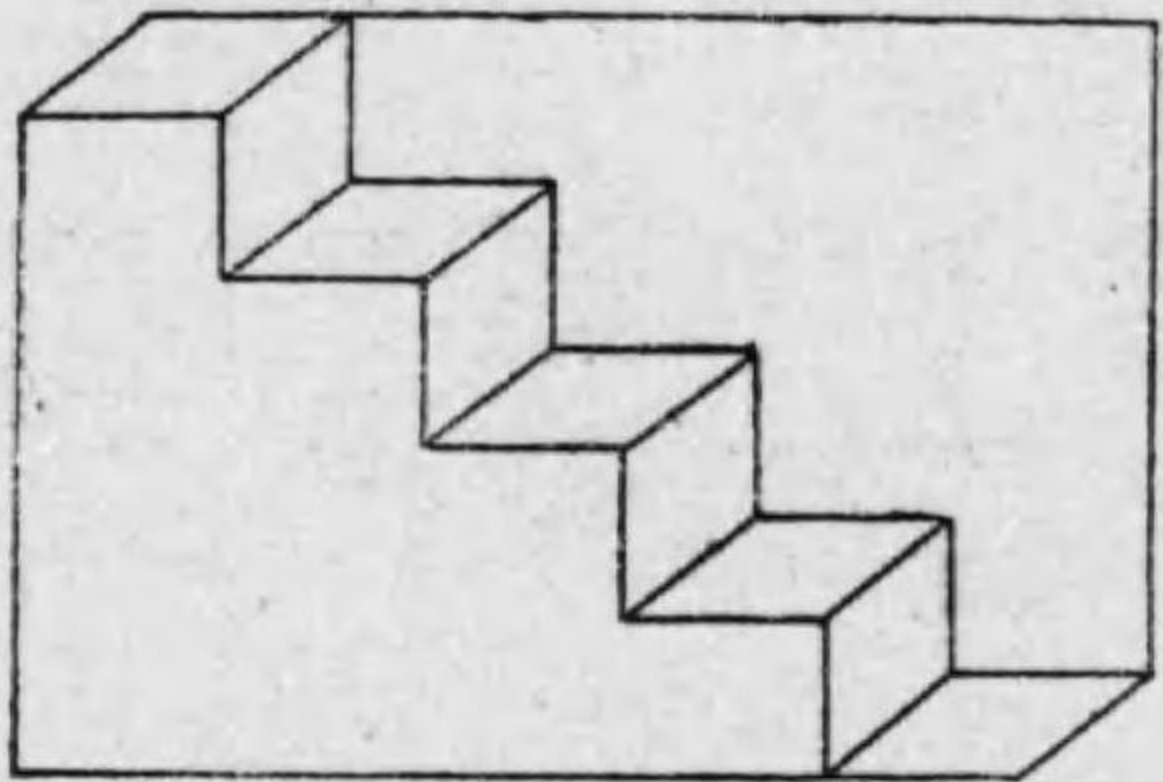
せ實驗せねばなりません。尤も人の顔を見て痘痕が有るやうだが實際どうかと、撫で、見る譯にも參りませぬが、すべて出来る限り皮膚覺・筋覺などに訴へて見るがよいのです。それから又幽霊を見ることがあつても、決して驚くには及びませぬ。幽霊も錯覺から見ることが多いのです。例へば柳

第三圖



の下に干してある浴衣が妖怪に見えるの類であります。かういふ時に、實際に幽霊が有るのかどうかといふことは、先刻申したやうに手の感覺を働かして見れば分ります。即ち有れば捕まるし、無ければ捕まらない。捕まへれば幽霊でなければ何であるといふことがすぐ分ります。此の外自分の考に依つて色々變る錯覺があります。簡単な例を示せば第四圖のやうなものでも、見様に依つては、階段のやうにも思はれ、また天井の方に階段を倒にしたやうな材木をはめてあるやうにも見られます。

第四圖



るとか、或はその思ふ事を行ひます。それは丁度眼の錯覺のやうに、一寸した刺戟から全體が分るから宜いのでありますが、若し左も無いと、一々言つて仕舞はねば分りませぬ。例へば、「阿花やあの二階の六疊の机の上の左に置いて在る所の何といふ本をお前が其處まで歩いて持つて来てそれを私の前へチャンと置いて行つてお呉れ」と言はねばなりません。ア、ナカ／＼長い。此の如くに一々詳細に命令するのは大變です。それを錯覺と似よりの働から申すと、譯なく「オイ彼の本を」と言へば、直ぐと以心傳心で分つて仕舞ふのです。其處が夫婦たる處でせう。すべて平生さう云ふ工合に簡單に用が辨じ、一を聞いて十を知り、鑿と云はゞ槌と云ふやうな働きは、錯覺と類似の心の働きのであります。併し以上のお話は純粹の錯覺ではなく、たゞ之と同じやうな心の働きの用を説いたに過ぎませんが、純粹の錯覺その物も美術上殊に繪の面白味としては大さう役に立つのです。文人畫などの面白味は、全く錯覺の助に由るのであります。すべて繪と寫真との主なる違ひは、繪に錯覺の應用が多い點に存するのであります。又劇は多く錯覺に由つて、成り立つのであります。



## 第十二節 光色と感情

(一)光と色 一體陽氣な客商賣などをする家では、お客にも陽氣で生々とした感情を與へる様にせねばなりません。それには電氣燈が暗いやうではいけない、「隣座敷の電氣が暗い」といふ歌の様ではないのです。隣は構はぬにしても、自分の家はカツカと明るくなくてはなりません。明るい光は人の心を引き立て、暗いのは沈鬱にする傾があります。又色もいろ／＼心に影響するものです。温順しい色といふのは、赤や黄やすべてケバ／＼しいものでなく、オリ／＼とか藤色とか鳩羽鼠とかいふ様な淡い色であります。かう云ふ色の着物を被て居る人は、温順しく見えるのです。これは色が心を落ち着けるからです。此反對に赤い物を多く用ゐてみると、大さう人の眼を刺戟して感情を引き立てるものです。料理屋などではさう云ふ色を多く使ふのです。若し料理屋で寺や學校のやうに、壁でも何でも赤い色を使はず水色など温順しい色を使つて置くと、御客が這入つて、「何だか此處は寂しい様だ、ごうだ君、酒を飲むのは止して歸らうでは無いか」といふやうになるのです。それですから料理屋などでは、チョツと見ても如何にも勢ひが好くて何もかも忘れて「遣れ／＼」といふ心になる様にしてあります。之に反して、學校などでそんなケバ／＼しい色を附けて裝飾して置くと、生徒が皆浮き立つて踊り出すやうになり、迎も勉強などは出来なくなります。それゆゑ學校の壁は多くは淡い水色にし

てあります。そこで生徒が教場に入つて行くと、ジツと心が沈着いて、先生の仰しやることがよく分る様にしてあるのです。お寺などでも餘り硝子や何かでハイカラめいて居る處だと難有く無いものです。全體お寺は其處に入ると外の家と違つて心が改つて自然と難有くなる様にしてあるものです。これは全く光と色との關係から來るのです。かう云ふやうに、光や色は人の感情に關係が有りますから、日常生活に於ては大に注意せねばなりません。それゆゑ一言御婦人の爲めに附け加へておきたいと思ひます。例へば着物をお作りになるにしても、色の配合といふことが人柄に關係するのです。昔から芝居で使つた色には役者の好みに依つていろ／＼と變遷があります。さう云ふ事を調べて見ると、餘程面白い話が出来るのであります。詰り赤色とか黄色とか濃紫などは、人の氣を引立て、其中でも紫などは神聖な貴いやうな感じを與へます。又緑とか青とかいふ色は、心を落ち着けるものです。黒は色では無いけれども、色と同じやうに人心に影響して、大さう嚴格な感じを與へますし、白は清淨潔白といふ感じを與へます。それで白を婚禮の時に使ひ、黒を葬式の時に使ふといふのも、潔白とか嚴肅とかいふ感じが伴ふ様にしたものであります。

## 第十三節 視覺と人生

(一)眼の力 眼は人の生活と密接な關係があります。盲目の不便といふことは分り切つたことであり



ますが、吾々が眼から受ける樂みはどの位多いか分らぬほどです。又眼から受ける知識も實に莫大のものであります。眼は自分みづからが働きのするよりは、色々な感覺の代理をすることが多いのです。之を例へば、諸君は實際食べて御覽なさらずとも是は旨さうだとか或は不味さうだとかいふ感じを持たれるでせう。かういふ感じは非常に人の心の働きの便利にするものです。それですから、眼の見えぬ人は實に氣の毒なものであります。之を考へれば、眼の見える人は充分之を大切にして働かせることが必要であります。大切にすることと言つて始終働かせずに置くと悪くなります。亞米利加に「マシモース」と云ふ有名な大きな洞穴がありますが、その魚は皆盲であります。それは光線が來ないから、眼が働きのしない爲であります。此通りに吾々の眼も使はないと鈍くなります。偶には小さい物も見、遠くも見るといふ様に、色々働かして行くが宜いのです。つまり無理をせぬ様に而も色々な物を成る丈け多く見て知識を殖して行くやうにせねばなりません。

#### 第十四節 感覺教育

(一) 感覺の用 感覺教育の大切なことは、御話いたすまでもありません。全體唯今も申す様に、人の心は、總て五官から智慧を得るのであります。見ることに聞くこと味ふこと觸れること嗅ぐことなご色々な働きのして、之に由つて總ての智慧が出來て來るのであります。人には生れながらにして偉い人

もあります。併し又例令愚に生れても、外から色々な刺戟を與へて感覺を働かせれば、多少とも進歩するものであります。宗教家にしても、各宗の祖師が、佛と仰がれるやうになられたのは何の爲でありませうか。無論何れも天性偉い人で有つたからでせう。併しながら又非常に自分の修養に努め幼い時から感覺を働かして、所謂見聞を廣める爲めに注意されたことが偉くなられた一大原因でありませう。ごんな人でも見ざる聞かざるで猿を氣取つてじつとして居ては、逆も偉くなれるものではありませぬ。全體三猿の教は、年を取つた人が、現に働いて居る壯年の者の爲る事に、餘り口を出したり手を出したりしてはいかぬといふ事を戒めた者でせう。例へば、御婦人などが年をお取りになつて、姑となられた時には、成る丈け嫁に任せて見ざる聞かざる言はざるが宜いのです。其時に餘り嫁の缺點を搜してやらうと蚤を取る様に、鵜の目鷹の目で感覺を働かしては良くないのであります。

(二) 感覺の練習 併し子供の幼い時には、見る物も聞くものも成るべく精確に成るべく多く見聞させるがよいのです。家庭で、阿母さんが子供を遊ばすにしても、子供に目を瞑らしておいて太鼓を叩き、さうしてごつちの方で太鼓の音がしたかといふことを當てさせると、子供は自然と聽覺を養ふことになりす。即ち子供はそれに依つてよく注意します。又色々な玩具を觀せて子供の目を養ふと、視覺を養ふことが出來ます。一般に此頃は段々近眼が多くなつて來たやうです。帝國大學の學生などは、百人中七十人までは眼鏡を懸けて居る割合ださうです。いくら學問しても近眼になることは感心した



ことではありません。殊に女の近眼と来ては困ります。若し聴衆諸君の中に近眼鏡を懸けてお出になるお方が有つたら御免下さい。併し何れにしても近眼鏡などは成る丈け懸けぬ方が宜いに違ひないのです。一體近眼は生來にも由りますけれども、一つは眼の衛生に依つて防ぐことが出来るのです。私がお今御話することを、阿母さんやお姉さんが注意なされば、よく子供の近眼を防ぐことが出来るのであります。即ち遊ぶ事にでも、一間半より先きの方を見させることによく氣を附ければ、近眼を防ぐ助になります。それは細字を読んだ後などには、鞠子を一間半以上先きに投げて遊ぶ様な遊戯をさせると、眼を遠くへ働かせるから、近眼にならぬやうになるのです。現に私が證據であります。私は幼い時から随分書物を読みましたが、外國の小さい文字を見た後などは、毎も必ず遠くを見ることとして居ります。例へば、あの山の上に木が何本あるとか、あのお寺の屋根に鳩が何羽居るとかいふやうに、つまりぬ物を見て勘定したりなど致しました。それですから今日に至る迄近眼鏡を懸けたことはありません。随つて學者の資格に缺けて居るのです。何でも偉い學者になるには近眼にならねばならぬといふ極めでも有るかのやうに、我國で有名の學者は大概近眼です。そこで眼の良い者でも氣取つて眼鏡を懸ける風さへ生じたのであります。私は別に近眼を攻撃する譯ではありませんけれども、子供の時から注意してやれば、近眼にならずに濟む事もあるのですから、親たる人が心を用ゐて、子供の感覺を養つてやるといふことは甚だ大事であります。子供には出来る丈け自由に聞かしてやり見さし

てやり弄らしてやるが良いのであります。幼い時に暴れて仕方が無いといふ子供が、大きくなつてから存外偉い者になるといふことは、度々皆さんお聞きでありませう。それは何故であるかと申しますれば、詰りかういふ子供は、自由自在に自分の感覺を働かせて見たり聞いたり持つたり嗅いだりして、スツカリ外物の經驗をいたしますから、後になつてそれが役に立ち偉い者になるのであります。それゆゑ學校の先生なども子供をお教へになるには、成るだけ多くの感覺を働かしてやる様になさるねばなりません。

(三) 天才の感覺 天才といふのはどう云ふ人かと申します。生れながらにして大さう偉い人をいふのです。釋迦でも基督でも皆天才です。別に教へないでも天性偉い人は一體どう云ふ感覺を有つて居るでせう。一々調べて見た人もないでせうが、書かれた傳などに由ると、多くの天才は生れながらに耳目が聰明で、ものを見たらシツカリ視て茫やり見ない。物を聞いたらチャンと正しく聽いて曖昧な聞様をしない、物を持つて見ても何をしてもチャンと明かにそれがよく分るのです。而もそれが唯眼で視るとか耳で聽くとかいふことばかりで無く、或は又食物にはかり氣を附けるとか、花にはかり心を留めるとか云ふ事で無い、何でも見たり聞いたりした物は皆スツカリ心に留めるのです。即ち天才といはれるほどの人は、智慧の入つて来る門を充分に開くと共に、其の入つて来る事柄を皆間違なくチャンと心に留めることが出来るのであります。さう云ふ人は假令教育をせず棄て、置いても凡人に



優つた人となるものです。これほど感覺は大事なものであります。

(四) 低格兒及び貧兒の感覺 低格兒といふのは、少し足りない子供です。マア俗にいふ天保錢です。天保錢は今はありませんが、一錢に通用しない子供です。さう云ふ子供の感覺は誠に鈍い。他の子供は一遍見ても覚えて分るのに、數回見せても分らないのです。例へば、尾のない犬を見せて、今の犬は何處か普通の犬と違つて居ないかと言つても、ボンヤリして氣が付きません。併し賢い子供ならば、此犬には尾が無いといふことにすぐ氣が附くのです。これはたゞ眼の働きではなく、心の働きから來るのですが、それが最もよく感覺に現はれるのです。それですから人の賢愚は、大體眼と耳との働きでも分ります。伶俐な者は、僅かな音でもよく聞いて明かに辨別することが出來ますけれども、鈍いものは、その辨別が出來ない。是れは學校の先生などが、受持の子供を、よく出來るものと出來ぬものと、中位のものに分けて置いて、試験をして御覽なさるとよく分ります。即ち一番よく出來る子供は、耳がよく働き、時計を遠くへやつて置いても聞えますが、よく出來ぬ子供には、同じ距離でも聞えません。餘程近くへ持つて行つて初めて聞えるのです。それから貧しい人の子供も感覺が鈍いものです。尤も貧しい人にも色々程度が有りまして、私なども貧しい者の一人であります。此處で貧しいといふのは、三度の食事に差支へるほどで、時には一日や二日は物を食べずに家族のものが家にゴロ／＼して居るといふ様なものを指すのであります。斯う云ふ家の子供は、眼も見え耳も聞え

るには違ひないのでありますけれども、充分に育つたもの程に働かないのです。それは家も悪く食物も悪いから、身體の機關が弱つて居て、充分の働きを仕兼ねるのみならず、心の働きが滿遍に往き渡らぬ爲めです。即ち眼がよく働き、耳がよく働くといふ譯にはゆかぬのです。其の興味を引く事物が限られて居るのです。或人が貧民の子供ばかり集めて教へた經驗を話した事がありますが、其の話に、此子供等は平生動物園へも行かぬだらう、淺草の奥山をも見ないだらう、さう云ふ處へ連れて行つたらさぞ喜ぶだらうと思つて、つれて往つてやつたが、一向喜ばない。アレハ獅子だ是は虎だと言つて見せてやつても、フンといったやうな風で、小犬を見る程にも注意しないのです。是は不思議だと思ひつゝ、聽て向ふへ行くと、蜜柑屋があり駄菓子屋がある。さうすると、子供等は、ア、先生彼處に蜜柑屋があります、彼處に菓子屋がありますというて、非常に活氣を帯びて來ました。そこで先生がそれは面白いものではないと言つても、なか／＼その注意を外に轉じなかつたといふことです。それは貧民の子弟に取つては無理のないことです。獅子を見てもお腹は張りませぬが、饅頭を食べれば確かに旨くしてお腹が張りますから、之に注意するのです。一體貧民の子供は始終飢に困められ平生困難をして居るから、折角耳や眼が働いても、あらゆる方面に向つて知識を得る爲めに働くことが出來ないので。それゆゑ、幼い時に家が貧しいと、子供は食物の事ばかりにガツ／＼して居て、珍らしい物を見て智慧を磨くとか、不思議な事の道理を考へるとかいふことが無くなるのです。是は實に可



愛想な譯であります。それですから先づ充分に飢寒を防いで置いて、さうして漸々に、總ての感覺を働かしてやる様にせねばなりません。

(五)犯罪者の感覺 是は又よく氣を附けるべきことです。若し此處に刑務所の教誨師が御出であれば、私の言ふことの間違ひのないことがよくお分りでせう。刑務所に入る者の罪はいろ／＼あります。例へば、盜賊をするとか、詐欺をするとか、火つけをするとか、一々數へられぬほどです。併しかういふ人の眼や耳の働きを調べて見ますと、何處か通常の人と違つて悪い處があるものです、固より素人が見ては分りませぬ。専門の人が精しく調べて見ないと分らぬのであります。すべて罪を犯すほどの人は、何處か感覺の不可い處のある者が多いのです。例へば、眼は見えるけれ共耳がいけぬとか、或は鼻が悪いとか、耳の内部に缺點が有つて聞えることは差支ないが、何處か悪いとかいふやうなことがあります。かう云ふ人は、罪を犯す様になる傾きがあるのです。それ故今日ではさう云ふ悪人を治すのには、唯説教をしたり教誨をしたりするばかりでなく、醫者の方から充分身體を調べて、其の缺點を治してやらねばならぬといふことが唱へられ、又實行されるやうになつたのであります。

(六)感覺器官の異常と感情状態 ストライキといふ事は皆さん御聞であります。「東雲のストライキ」と言つて、一時流行歌にまでなつたあのストライキの起つて來るのも、基く所はいろ／＼あります。が、感覺のよくない事もその一つであります。獨逸の醫者の調べに據ると、職工が鼻の悪くなつた時

にストライキの起つて來るといふことです。これは「ハナ」はだ困つた譯であります。鼻の内に芥が溜り病的微菌などが着いて病氣が起るのであります。さうすると、氣がイライラして腦を刺戟し、何でも癢を起し腹を立てるといふやうになるのです。かうなれば假令ストライキを起さぬまでも、家族は主人の取り扱ひに泣くやうになるでせう。即ちかういふ人が宅に歸つて來た時、細君の言ふ事に少し氣に入らぬことがあつても、直ぐコッソと來るやうなことがあるのです。是れは獨り鼻ばかりでは無い。耳でもさうです。耳に缺點があると精神に影響して注意が悪くなり、或は亂暴する様になるものです。

(七)感覺教育の必要 それ故たゞ感覺といふと何でも無いことで、眼は見る、耳は聞く丈けのやうに思はれますけれども、實は總て精神の根本になるのであります。随つて家庭に於て父母はよく幼い子供の感覺に注意してやり、何處か悪かつたら、醫者に掛けて治してやる様にせねばなりません。無學の産婆は、子供を取擧げる時に、充分の注意をせぬ爲に、子供の感覺器官を害することがあります。例へば、子供の生れた時に點眼水を點することを怠るから眼が悪くなるとか、洗ふ時に注意しない爲に、耳の内に惡液が這入つて耳だれになるとかいふやうな類が、少くないのです。さうすると、之が爲めに子供の性質が悪くなることもあるのです。

又今まで、日本の婦人は無智で役に立たぬと言つて攻撃する人もありましたけれども、其筈であります。日本の婦人は家庭にばかり居て、知識の門戸を鎖されて居たのであります。第一、日本の婦



人は、奥様などと言つて、奥の方に計り居るのです。又モウ少し下の方では山の神などと言つて、これ亦祭り込まれる傾きがあります。娘の時には箱入娘などと言つて、箱へ入れて仕舞つておいて、御客が來ても成る丈け出さぬ様にし、演説會があつても展覽會があつても、マア／＼女は行かぬ方が宜いと云ふやうに、なか／＼家を出さぬのです。そこで折角見たり聞いたりして知識を入れるべき門戸が塞がりますから、偉くなりやうがないのであります。併し現に今日などは、多數の御婦人がお出でになり斯うやつて知識の門戸をお開きになつて居りますから、此後は御婦人方が一層偉く御成りなされるに違ひありません。それで何でも機會があれば、よく物を視よく音を聴くといふやうに、すべての感覺を十分働かさなければなりません。

#### 第十四節 直観（知覺）

（一）直観 今茲に水差がありコップがあります。是は諸君が眼に由つて見ておゐでなさるでせう。此水差なりコップなりの實物全體を心で知るのが直観であります。これは感覺が働いたのでありますけれども、是は何々であるといふ全體を知るから直観であります。つまり感覺と直観との別は、コップだか何だか分らぬで唯光なら光といふ事が分るのが感覺でありまして、その光や色や形や大きさや堅さや冷たさや、色々の感覺の集つた一物體の代表の心象が直観であります。それゆゑ感覺が働いて直

観が出來て來る譯であります。今諸君は現在私を見てお出になりますから、諸君の心には私の直観が出來て居るのであります。

（二）直観教授 今日小學校では、直観教授と申しまして、何でも成るべく實事實物を以つて子供を教へることに努めて居ります。それはあらゆる感覺を働かして、外物の正しい心象を得しめる爲で、甚だ良い教授の主義であります。どうか父兄方が幼い子供を教へられるにも、此方法に由る様にしたいものです。さうすると確實な知識の基礎を養はしめることが出來るのであります。



## 第五章 聯合

## 第一節 意識流

今日は聯合のお話を致します。其前に先づ意識の流といふ事に就いて説明を致して置かうと思ひます。前に意識の説明を致しました時にも御話を致したやうに、私共の心の有様を調べて見ますと、心と云ふものはチョツともヂツとして居ない、始終色々な考へが起つては河の流の如く、ズン／＼移り變つて行きつゝあるのです。今諸君が御考へになつても御分りになりませう。今朝御起きになつて現在只今までの間に諸君の心が如何に移り變つて來たか、如何に心の中に色々な事が起つて來たかといふ事が明にお分りになるでせう。かう云ふ状態は急がしく物を見たり聞いたりして居る時にはよく分りませぬけれども、静かな時に獨りでヂツと自分の心の有様を考へて見るとよく分ります。色々な出來事が不思議なやうに次ぎ／＼と起つてまゐります。それを名けて意識流と云ふのです。是れは丁度河の水が流れて止まぬやうに、我々の心には断えず新しい現象が流れて居るのです。かう云ふ意識の流は無茶苦茶に出て來るのであらうか、それとも何か一定の法則に隨ふのであらうかといふことは、

諸君が自からよく考へて御覽なされれば直き分ります。例へば、故郷の事を思ふ時には、その山の事を思ひ、河の事を思ひ、昔遊んだ時の事を思ひ、それから其の時共に居た亡友の事を憶ひ出すと云ふやうに、一寸考へると殆んど無茶苦茶に出て來るやうに思はれますけれども、よく調べて見ると決して無茶苦茶では無く、それにはチャンと一定の極りがあるのであります。その一定の極りは何であるかと申しますれば、即ち次に御話する觀念の聯合と云ふことです。觀念の聯合が意識の流を支配するのであります。

## 第二節 聯合の意義及び種類

(一)聯合の意義 觀念聯合即ち聯想といふのは、何か一つの心象が起ると、それに伴つて他の心象が出て來ることをいふのです。そして其の聯合に二つの法則がありまして、一つを類似法と言ひ一つを接近法と言ひます。

(二)類似法 類似法といふのは、二つの物の間に似寄つた點があると、一方に由つて他の一方を思ひ出すのをいふのです。例へば、諸君が他國の町を歩いて居られて故郷とは何百里を隔て、居るにも拘らず、町の中で自分の親の横顔に似て居る人に出會ふと、直ぐに親の事が心の中に浮んで來るでせう。これは殆んど電氣の光が閃くやうに速に現はれて來るのです。或は又西洋などへ行つて、天涯萬里の



山の中へ這入つて旅行して居る時にでも、其谷の形とか道端に咲いて居る花などに故郷の有様に似た所がチヨツとでもあるならば、直ぐに故郷の事が憶ひ出されて非常に懐かしくなると云ふやうな事があるものです。かういふ事は諸君が始終経験して居らるゝ事せう。是等を總て類似法といふのでありますが、其憶ひ出される方は實に不思議なほどであります。全體類似にも完全と不完全との別がありません。完全な類似といふのは、例へば、私が今此處で皆さんに御目に懸つて居りますが、後日又皆さんが私を御覽なさる時に、ア、彼の人は前に心理學の講義を聞いた高島であると云ふことを諸君が必ずお憶ひ出しになるでせう。是はつまり同一の私を時を變へて憶ひ出さるのでありますから、完全の類似で一番よく似て居るわけです。一つ人のことを似て居るといふのは可笑しいやうですが、道理上からいふと、過去の私を御覽になつた時の諸君の觀念と、現在の私に就いての諸君の直觀とが、同じと云ふ事は無い。明日諸君に御目に懸れば前の私とは多少違つて居るから矢張類似であります。かく同一の物を見て前の事を憶ひ出すのは完全の類似であります。

それから又不完全な類似にも色々あります。それは唯形の一部が似て居るとか、色が似て居るとか、聲が似て居るとか、溫度が似て居るとか、味が似て居るとか云ふ様に、一部分丈けがチヨツと似て居るのは不完全の類似であります。一部分の類似に依つても矢張其全體の物を憶ひ出すものです。支那の詩人の句に、例も郷味に依つて故郷を憶ふと云ふのがあつたと思ひますが、是は何時も故郷の味

をあちはふことに依つて故郷の事を憶ひ出すといふことで、例へば、東京は鰻が名物でありますから、東京人が他に行つて居て、鰻の蒲焼などを出されると、それに依つて東京に居た時の事を思ひ出すのです。さう云ふのは、他の事は皆違つても鰻の味丈けが似て居るために東京の事を憶ひ出すのであります。香でも聲でもその通りです。聲が似て居れば假令他の事は違つて居つても、直ぐに自分の友達なり親なり兄弟なりの事を憶ひ出すものです。かやうなのは全體が似て居るのでは無く、一部分が似て居るのであります。此の種の類似の中に性質が似て居るために聯合するのがあります。例へば、人でも顔貌も身體も總て違つて居るけれども、大人しい柔順な性質が似て居るといふやうな場合には、是れ亦一方の人の事から他方の人の事を憶ひ出すことがあります。これは人ばかりで無く、總ての物が皆さうです。二つの物の性質が似て居ると、一方に依つて他方を憶ひ出すと云ふことがあるものです。次には又關係の類似といふのがあります。これ亦不完全類似の一種ですが、これは形も聲も色も性質も似て居るのでは無いけれども、たゞその關係が互に似て居ると、一方に依つて他方を憶ひ出すことがあるものです。例へば、商人が金が無いにも拘はらず如何にも有るやうに觀せかけて、空相場などの危いことをして居ると、あの人は綱渡りのやうな事をやつて居ると云ひます。綱渡りする人の危いのと、空相場をする人の危いのと、其の關係が似て居るから、相場師に由つて綱渡りを思ひ出すのです。綱渡りは一本の綱を踏んで居るので、一つ失敗すると覆へる。併し相場師でも實際綱渡りをして居る人



ではない。けれども唯關係が似て居るから一方に依つて一方を憶ひ出すのです。凡べて是等の事は皆さんが自分で考へて御覽なさると皆その事實を發見なさるでせう。類似に依つて互に思ひ出すといふことには、實に不思議な法則があります。假令何萬年隔つても何千里隔つても、似寄つて居る二つの觀念は直ぐに聯合するのです。人の心の働きの中で、類似の聯合程不思議なものは少いのです。是が有るから私共は非常な慰めを得たり、又偉大な學問上の道理を發明したりすることが出来るのです。是等の事は是から後に段々御話して行きませう。

(三)接近法 接近法とは、二つの物が接近して存在して居る場合、一方に依つて他方を憶ひ出すのであります。二つの間に何も似た所がなくとも、一方に依つて他方を憶ひ出すのであります。例へば、坊さんと袈裟とは何時でも伴つて居る。袈裟が獨立してそこらを歩いて居るものには無いから、一方に依つて他方を憶ひ出すのです。俗諺に、坊主が憎ければ袈裟まで憎いといふことは、即ち袈裟と坊さんとの接近聯合を言ひ現はして居るのです。また十字架は、耶蘇の會堂に附いて居るから、十字架と言へば會堂を憶ひ出し、會堂と云へば十字架を憶ひ出す傾きがあるのです。何も十字架と會堂とが似て居るのでは無い。たゞ接近して居る爲にさう云ふ聯合が出来るのです。接近法には色々な種類がありまして、第一は、全體と全體の聯合、例へば、此私も全體なら此時計も全體である。此時計が何時も私に伴なつて居るから此時計に依つて私の事を憶ひ出し、私に依つて時計の事を憶ひ出す。即ち全體と全

體との聯合であります。それから次には部分と全體との聯合です。例へば、諸君が鳥の足丈をチヨツと御覽になつても、足は鶏だとか或は鷹だとかいふ事を直きに御考へになる事が出来るでせう。即ち足だけ見て他は見なくても接近聯合に依つて自分の頭腦の中で想像するのです。かう云ふのは部分に依つて全體を憶ひ出すのです。それから又部分と部分との接近、即ち一部分に依つて一部分を憶ひ出すといふ接近の仕方もあります。例へば、人の手を見て其手が大変柔かだ優しいと、足も優しいだらうと云ふ考がおこるものです。かういふのは一部分に依つて一部分の事を憶ひ出すのであります。或は又聲を聞いてそれが如何にも優しいと、顔も優しからうといふ様に考へるのも亦之に屬します。又物の用法に依つて、一方を見ると一方を憶ひ出すこともありませう。例へば、鑿と云はば槌と云ふ様な風に、何時でも此二つは相待つて居て、鑿を使ふには槌が無ければならず、槌はまた鑿が無ければ其用を全うしないのです。かう云ふのは即ち用法に依つての聯合であります。

それから又次第に依つて憶ひ出すのがあります。例へば、一二三四といふやうな順數は、一と云へば直ぐ次に二といふ事を憶ひ、二と云へば又直ぐに三といふ事を憶ふといふ様に、次第順序の立つて居るものは、前に依つて後を憶ひ出し、或は又稀れには後に依つて前を憶ひ出すのです。私共が子供の時には、學校に行くと御歴代の天皇の御諱が書いて高い處に貼つてあつて、歸る時には全校の生徒が集まつて皆それを讀んだものです。これは私の九歳位の時のことでありますが、今でも私は餘程その



順を覚えて居ります。即ち神武、綏靖、安寧、懿徳と云ふ様に次第に口から出て来るのです。是は實に大事なことです。寺などで歴代の住職の名を覚えさすといふやうな場合に、かう云ふやうにして、意味は無くとも度々繰り返して居るとよく覚えて忘れなくなります。或は家の系圖でもその通りで、順序を追つて繰り返して居れば、アトから／＼と接近聯合でズン／＼出て来るやうになります。

次は因果の關係であります。即ち結果から原因を憶ひ出すことがあり、又原因から結果を憶ひ出すこともあります。諸君が海岸に行つて船が大變に毀はれて居るのを御覽になると、是はごうも暴風雨があつたに違ひないといふ事をお考へになるでせう。それから又非常な激浪怒濤の有様を御覽なさると、是はキツと毀れる船が有るだらうといふことをお考へなさるでせう。即ち前のは結果に依つて原因を憶ひ、後のは原因に依つて結果を思ふの例であります。斯ういふやうに、接近聯合の種類は多くあつて、類似の聯合のやうにナカ／＼強く働く作用でありますけれども、學問上の價値は類似の聯合の方が多いのであります。

以上例を挙げましたけれども、別に例を擧げる迄もなく、接近聯合は日常諸君が始終経験してお出なさる事であります。又子供は御母さん杯に對して接近聯合の爲めに色々の事を思ひ出して色々の事をして居るのです。例へば、今迄何も忘れて夢中になつて遊んで居た子供が、ドンといふ音がすると、「御母さん御飯にしてお呉れ」と、急に御腹が減つた様に催促します。「貧すればドンの鳴る時朝の飯」

といふ句がありますけれども、そうでは無く、朝充分に食べさせて置いて、今迄夢中に遊んで居たのが、ドンの爲にさう云ふ事を云ふのは、ドンが鳴れば其次は晝の飯だと云ふ事がチャンと接近聯合で極まつて居るからです。それは原因結果の關係では無い、即ちドンが飯の原因になるのでは無いけれども、ドンの次に飯と云ふ事はチャンと極つて居る。何時でも朝起きれば床を疊むとか顔を洗ふとか御飯を食べるとか學校へ行くとかいふやうに、ズツと順序が立つて居るから、次から次へと出て、始終その順によつてやつてゆくのです。かう云ふのは即ち、接近聯合に依つて、先刻云つた意識の流れが續々起つてそれが行に現はれて来るのです。それから又普通の家では、御母さんは、平生忙はしいから、日常着物を着替へてチャンとして居る者は少い。餘程お洒落の御母さんは別として、普通は襦袢前垂掛で働いて居るのです。今日は客が来るからと云つて少し着物でも着替へると、「御母さん何處へ行くの、坊も連れて行つてお呉れ」と云ひます。それは通常御母さんが着物を着替へると餘處へ出ると云ふ事が接近聯合に依つて分つて居るからです。さう云ふ事は、子供が知らず識らずに心理の法則に依つて行ひをして居る譯であります。さて此の如き法則がありますから之を應用して行くと日常の事業に非常に役に立つのであります。故に次に聯合の應用といふ事を御話いたしませう。

### 第三節 聯合の應用



(一) 教育に於ける應用 先づ之を教育に應用すれば、類似の聯合法で物を覚えさせることが出来ます。一つ何か物を覚えれば、之と同じ道理で説明の出来る事を教へて行けば、子供は是もさうだ／＼といふやうによく悟るでせう。着物の縫方を教へるにしても、一つ／＼違つたものを教へれば覚え悪いでせう。併し一つ筋方が出来たら又之と同じやうな筋方をさせるのです。さうすると子供は、成程是は斯うすれば出来る、今度のも斯うすればよいといふやうになるのです。それを度々重ねれば、その記憶は愈々確實になつて來ます。小學校に於てもその通りで、例へば、鶏といふ事を覚えれば、次に雉子の事を教へるやうにするのです。さうすれば雉子と鶏とは似た處が多いから容易に分つて仕舞ふのです。かういふ様に聯合法を使つて行くと記憶がよく出來ます。それから又接近聯合で覚えさせるのは、イ・ロ・ハ・ニ・ホ・ヘ・トと云ひ、A B C Dと云ふやうに、次第順序を追うてくりかへし／＼教へるので、子供が何か忘れた時にも、先生が全體を云つてやらないで、一部分を云つてやり、「どうです是れだけ云つたらあとは思ひ出せるでせう」といふやうにすると、部分から全體に及ぼす接近聯合を以てそれを憶ひ出すことが出來ます。又物を教へるに、同じやうな名稱で聯合せしめることがあります。小學校の開け初めに色圖と云ふ事がありました。今は餘り教へないけれども、昔は大切な教科でありました。私共が教はつた時に、生壁色といふのがありまして、餘程覚え悪くかつたのです。殊に幼児はなか／＼見分けがつかずに困りました。これはナマカベ色の札を出して、是は何色かと問ふのです。

或る試験の際、試験官が立會つて之を答へしめました。其答の如何に由つてその子供の及落が決まるのです。そこで先生がどうかして悟らせやうと思つても其方法に困つたのです。終に先生が一策を考へ着き、ウーンと云つて何か退屈でもしたやうに壁に手を當て、どうかしてナマカベといふことを思ひ出させやうとしたのです。それでも子供は氣が附かぬのです。先生は氣が氣でなく、エヘンなども無い聯合作用から、手の色と答へて仕舞つたさうです。昔の學校ではこんな可笑しいこともあつたのです。すべて何か少し似寄つた言葉が有ると、それと類似の聯合をさせて、意味なしに記憶させるからさう云ふ誤解が出来るのです。かういふ誤解は幾らもあります。例へば英語で、取除けのことをエキセプション Exception といふのですが、それを鶏の毛だと心得た者がありました。それを又軍鶏と間違つて仕舞つて、エキセプションを軍鶏の毛と翻譯したさうです。是れは意味なしにたゞ言葉の上の似寄つたもの、聯合から間違つたのであります。それゆゑかう云ふ聯合を使ふと教育上却つて害がありますけれども、意味があつてその意味が類似したものを聯合させれば自然とよく物が覚えられます。それから又推理の働きの上に類似法を應用すると、大に理會を助けます。前にお話した雉子と鶏とは似寄つた點が多くて同じ種類に屬して居るやうなことは、論理上で謂ふ歸納法であります。歸納法は吾々の知識を擴める上に大切な働であります。かく類似法を使つて推理を確めて行くことが出



來るのであります。其他總べて教育上色々な働きも此聯合法の應用に由つて出来るのであります。

(二)文學に於ける應用 次に聯合を文學に應用することに就いてお話いたしませう。是れまた應用の廣い者でありまして、文學の面白味は聯合法の應用に依つて出来ることが多いのであります。殊に類似の聯合を應用する場合が多いのです。こゝに文學と申しますのは、極めて廣い意味に使ふのでありまして、例へば、簡單な者で云へば俳句も和歌も漢詩も皆之に屬するのです。それから又少説戯曲なども總て文學の中に這入るのでありますが、其文學は擬人法に依つて非常な面白味を得て來るのです。此擬人法、即ち人で無い物を人として歌ふ所に非常な面白味があるのです。唯草を草とし鳥を鳥とし虫を虫として歌ふのでは面白く無い。それを人間に當て、見てから其處に無限の面白味が出来るのです。例へば、日蓮上人の歌で有名な「おのづからよこしまに降る雨はあらし風こそ夜の窓は打つらめ」といふがありますが、それも唯々風が吹いて雨が横に降るのだといふ丈けに考へたら何でも無い、當り前のことであります。然るに、人の心は實に美しい立派なものであるけれども、外の邪念が其處に這入つて來て邪道に心を導くのであるといふ意味に取るから面白味が出来るので、唯雨の事ばかりでは一向我々を感嘆させるに足らぬのであります。

かう云ふ例はまだ澤山あります。諸君は一茶といふ人の俳句集をお読みになつたことは無いかも知れませんが、是れはごなたがお読みになつても宜い面白い本です。私はごなたにも一茶の俳句をお勸

めしたいとおもひます。此人は擬人法を澤山使つて子供を大さう可愛がりました。私は此點に於て殊に一茶が好きです。子供を可愛がらぬ様な人は仕方が無いのですが、此の人は非常な子煩悩で、大さう子供を可愛がりました。此人の句の中には、眞に讀んで涙の零れるやうなのがあります。例へば、「庵の苔花咲くすべも知らざりき」といふのがあります。是も唯々山の庵に生えて居る苔が花咲くすべを知らないで、何時までも花が咲かぬといふ事では何の感興も無い。併しながら此所に憐れな人が居つて、實に有爲な人物であるけれども、家が貧しくて都へ出て勉強する事も出来ずに、山の中で朽ち果て、居るといふことであると思ふと、實に涙が零れます。一茶は確にさう云ふ意味で言つたのでせう。苔の花が咲くことも出来ぬと同じやうに、人にも一生花咲かすして終つて仕舞ふ者があると考へて見ると、其句を讀んでも私は同情に禁へぬのです。それから又今の人は不平を言ふのにも向き出して、「ごうも社會が我を容れない」とか何とかいふのです。女でも随分さう云ふ事を云ふ人があります。曾て私の家に来て私に向つて、「ごうも先生社會が私を容れて呉れません」と言つた女がありました。私の母などは昔者ですから、その言ひ振りに驚いて、その後はその女が來ると社會が容れない人が來ましたなどと申して居りましたが、ごうも言ひ方が餘り露骨であつて面白味が無いのです。所が一茶は矢張郷黨に容れられないで非常に困つたのですが、それを直接に不平を言はずに、「故郷は蠅まで人を刺しにけり」「故郷は西も東も薔薇の花」と申しました。斯うなると不平も美化されます。



そこが即ち文學であります。若し自分の不平をドシ／＼列べて仕舞つたらば、文學でも何でも無い。或は不平文學と言へるかも知れませんが、そんなものは餘り感心したもので無い。

何でも此通りで、よく喩へに依つて或は人で無いものを人とし、或は類似して居るもので人の思ひ附かぬやうな類似點を捕へて歌ふから面白味が出来るので。御婦人の爲に一つ婦人の歌の話をしてしませう。昔足利の末、亂世のことで世の中が一向文學などを貴ばぬ時に、上州沼田から出た圓珠尼と云ふ名高い人がありました。此人は元からの尼さんでは無く、良人を持つて居たのですが、良人は此人を大變可愛がつて結婚後三年も老親の居る故郷を見舞はなかつたのです。そこで良人を諫めて、「私を可愛がつて下さるのは難有いが、御兩親の所にも見舞に行かれず、私が有る爲にあなたがさういふやうになさつては御兩親に濟まぬ故、今日より暇を下さい。併し私はどうするのでも御座いません、豫て佛門に這入りたいと思つて居りましたから、頭髮を剃つて尼にならうと思ひます。どうぞあなたは家にお歸りになつて、御兩親に孝養を盡して下さい」といふ意味を立派な文章に書いて良人に送り、終に尼になつて仕舞つたのです。そこで良人はそれに感じて、家に歸り、兩親に孝行をしたといふ美談があるのです。さういふ心の麗はしい人であつたから、歌も亦實に麗はしいものを詠みました。それは「立田山もみちを分けて入る月は錦に包む鏡なりけり」といふのです。今から言へば斯んな歌は誰でも作りますが、亂世の頃一婦人にしてかういふ歌を詠むものは珍しいことです。そこで

その噂が段々傳はつて、時の主上後伏見天皇の御覽に入るほごになりました。然るに同天皇が大さう御感じになつて、「上野の沼田の里に圓かなる珠のありとは誰か知らまし」といふ御製を賜はりました。これから圓珠尼といふ名にしたのです。即ち名譽を紀念する爲めに、圓珠尼と言つて生涯行い濟して暮したといふ御話がありますが、此歌を御覽なさい、紅葉を錦に喩へ月を鏡に喩へたのは、如何にも女らしい類似の面白い発見ではありませんか、是も矢張り心理作用で類似の聯合から出た働きであります。其他かう云ふ例は諸君が何か文學の本を讀んで御覽なされば澤山あります。

すべて歌や詩を讀んでも、其儘に解釋しては面白味が少い。凡て詩や歌は自分の心の中の事を喩へを假りて言ふ場合が多いのです。即ち吾が心中は露骨に言ふことは出来ず又之を言ひ表はすことも出来ぬ、苦しいと言つても唯苦しい丈けでは一向文學にはならない、悲しいと言つても唯悲しい丈けではどう云ふやうに悲しいのか分らぬ、面白いと言つてもその通りです。斯る場合にそれを表はす爲に物を假りて美しく言表はすのが、詩歌であります。それゆゑ詩歌を解釋する時は、何時でも諸君がそれを心に當て嵌めて、即ち自分の心の有様と比べて見て、其類似の聯合に依つて解釋して行くと、或は何か其中から発見する事が出来ませう。詩歌と云ふものは皆かう云ふものであります。文學に應用された聯合法は大體かう云ふもので、喩へといふのは類似聯合の應用であります。昔の偉ひ人は皆な喩を多く使ひました。殊に釋迦はよく譬喩を使はれました。又基督も多く譬喩を使はれました。是等の



偉い人は物の喩を引くことが上手で、直ぐに人を成程と思はせるのであります。それゆゑ諸君も人をお教へになる時には喩を用ゐられることが必要であります。

(三) 科學に於ける應用 次に科學と聯合との關係をお話いたしませう。すべて大發明をする者は類似聯合の働きから思ひつく事が多いのです。例へば何處にも釣橋がありません。下に橋杭なしに唯釣つて架つて居るのです。橋杭があると船の通るに不便であります。けれども、昔は決してア、云ふ橋は無かつたのです。それゆゑ船の通るのに大變不便であつたのです。それを或時ブラオンといふ人が、杭の無い橋を造つて呉れと頼まれて、頻りにその方法を考へながら、晩方庭に下りて散歩して居りました。さうすると蜘蛛がコツチの端からアツチの端に巢を掛ける状を見て手を打つて喜び、成程斯う云ふ風にすれば確に下に何も置かないで橋が架かるに違ひないと考へ付きました。これが釣橋の出来る基でありました。諸君も、何物を御覽になつてもよく注意なさる必要があります。特に學校の先生などは子供によく諭すがよいのです。すべて人は散歩する時にも、空しく時を費さずに、何か眼に觸れ耳に觸れる物の状態を調べて置くと、何時となしに自己の仕事の爲になるものです。一體蜘蛛が巢をかけるのは誠に不思議です。例へば、高い處に蜘蛛が巢を造つて居ると、其の下に大變深い溝がある。どうしてコツチの端からアツチの端へ巢を掛けたかチョツと分らぬ事があります。併しよく見て居ますと、此方の高い枝に止つて居つて風が吹く時に糸を出し、其糸が風の爲めに向側の木の枝にひ

つ掛かるのを待ち、之を手寄りにコツチからアツチへ傳はつて行くのです。あの一本の糸は蜘蛛の體を支へる丈の力があるのです。それから又風の吹く時に何處か他の方へ引掛けてだん／＼巢を作るのです。之れが爲めには蜘蛛は非常な辛抱をするのであります。ブラオンは之を見てア、云ふ風にすれば釣橋が出来ると思つてやり出したのです。ボンヤリした人ならば思ひ附かぬことでもあります。此人の才智と熱心とは、蜘蛛の網から大發明をしたのであります。亞米利加のナイヤガラの上流に架つて居るブルークリンの橋は、世界でも有名な長い橋ですが、是れ亦釣橋で下には何も無いのです。こんな大きな物が蜘蛛の巢から考へ附いた事であるといふのは驚くべき事であります。

又水道の鐵管はワットが鰍を食べる時にその殻から考へ附いたのです。伊勢鰍を食べると、丁度水道の鐵管の重なつたやうな殻が残ります。ソレから氣が附いて水道鐵管が出来たのです。通常の人はそんな物を見て何とも思はぬのですが、偉い人はそれを自分の學問に應用して大發明をするやうになるのです。すべて斯う云ふやうな自然の事物は、御母さんが子供に話して聞かすのにもよく氣を附かねばなりません。例へば、木の皮を剥いて見ると蟲が喰つて色々な形が出来て居ることがありますが、あんな物でも唯虫が喰つて居るとのみ見て置けばそれ丈けのことですが、北海道のアイヌが色々な彫物をするのは、是れに倣つたのであるといふことです。即ち虫の喰つた跡には色々な面白い筋が出来て居ます。ソレを見てアイヌは彫物を始めたのであるといふことです。アイヌは器用で何等の支度もし



ないですぐに小刀を以て盆に彫物をしますけれども、その天性の然らしめるものと見えて、立派な物が出来ます。さう云ふやうに、少し何處に形が似て居るとか、或は關係が似て居るとかいふことを捕へて、それを偉い仕事に應用して行くのが人の進歩する所以であります。

## 第六章 暗示

### 第一節 暗示の意義

(一)暗示とは何か 次に暗示といふ事に就て御話しいたしませう。近頃催眠術で頻りに暗示と云ひますから諸君も御存じでありませうが、此字に書いてある通り、暗示とは明かに斯うであるといふことを言はずに、何かチョツと合圖して、それで全體を悟らせること、丁度部分から全體に及ぼす接近聯合の例と同じやうなものであります。或る人が病氣が治らぬ時に醫者がその患者に暗示を與へると段々治ることがあります。暗示の力といふものは實に強いものであります。信用して居ると水を吞まされても病氣が治るものです。或は水を吞まされても、酒だといはれ、ば酔つて來るのです、是れは實に不思議な現象であります。

(二)催眠術に於ける暗示 私は或者に催眠術を施し、水を吞ませて之を酔はせたり、又自ら水を吞んで見せて向ふの者を酔はせたり、或は自分の腹を撫で、向ふの腹の痛いのを治したことがあります。それらは皆暗示の例であります。さうしてかういふことをするかと申しますれば、先づ私自身が被催



眠者と身體を替へる暗示をして置くのです。即ち私が向ふの者になつて向ふの者が私になると云ふ暗示をするのです。これは嚴格な態度で被術者に向つて「見て居れ、御前と私と身體が替るぞ」と言つて、チョツと合圖をするのです。さうすると被術者はチャンと身體が替つたと思ふのです。そこで私が自分の手を抓ると、向ふの者が痛いと言ひ、向ふの者の何處を抓つても平氣で笑つて居るのです。私の試験したのは私の家の下女でしたが、「旦那様は自分の頬を抓つてお出なさる」と言つて自分が抓られながら少しも痛く思はないのです。又其女中は酒などは無論飲めないと云ふのですけれども、身體を替へて置いて私が是れは酒だと言つて湯を呑んだら、下女は自分が呑まされたと思ふ者ですから、イヤだと言つて居ましたが、やがて「酔つぱらつた」といつて顔が赤くなり、御酒臭いゲイが出ると言つて大そう酔つた状態になつて困つたことがありました。是れは現在私の實驗した事で、眞實にさう云ふ事が出来るのです。是等は不思議なやうで實は不思議なことは無いのです。即ち心理上から説明が出来るのです。その説明は今略しますが、この位精神は身體に強く影響を及ぼすものでありますから、お互に身體を良くせうと思つたらば、常に心を爽かにして、或は信仰に依り或は自分の道徳上の觀念に依つて、精神を落ち着けて置くと、確に身體に非常な好い影響を與へます。

(三)自然界に於ける暗示 全體暗示といふことは人間からばかりで無く自然物からも受けるのです。大きな山の澤山ある處に生れた人は、山のやうな氣象を有つて居ます。山のやうな氣象といふのは鋭

いのです。自分丈け偉い積りでナカノノ氣が強く、獨立心には富んで居るけれども、量見が狭く人を容れないのです。それから又平野に生れた人は、ナカノノ太ッ腹で人を容れるけれども、其の代りに宵越の金は持たぬと云ふ風で、深い考へを持つて深刻な事をするには出来ず、廣い代りに始終變り、迎も一つ事に執着し辛抱して貯金するなど、いふ事は出来ませぬ。かういふ氣象は相場師などによく見るのです。何萬圓といふ金が取れても直ぐに使つてしまひ、他から幾ら忠告しても貯金をさせぬ。是等は皆自然の暗示を受けて居るのであります。それゆゑ大市街の建て込んだセ、コマしい所に住まつて居る人は、タマには子供を連れて海でも觀せるとか、或は御寺や何か大きな建物を觀せるがよいのです。是れは何でもないやうですが、それに暗示されて心が養はれるのです。九尺二間の家にはかり居つて貧乏して居ると、先回に御話した通り始終食物の事はかり思つて、面白い物を觀せても之に心が寄らぬといふやうになります。それですから吾々子供の教育者はよくかう云ふ事に注意して、子供を海へ入れる時など、假令鎌倉の海岸であつても、地圖などを覽せてこゝは太平洋といふ廣い海の一部であるといふことを考へさせると、非常に子供の思想が違つて來ます。大體暗示といふのは聯合の作用と同じやうなものであります。

## 第二節 被暗示性と社會生活



(一) 兒童の被暗示性 次に子供の被暗示性といふことに就いて説明いたしませう。すべて子供は、何か言はれるとすぐにそれに傾き易い性質を有つて居るのです。それゆゑ教育することが容易に出来るわけです。子供に感化を及ぼすといふ事は、つまり暗示を與へることでもあります。大人になると段々理屈を覺えて来るから暗示を受け難いのです。子供の時分には纏つた考へが無いから、何か言はれるとそれに就いて全體がさうなつて仕舞ふのです。尤も大人にも被暗示性に富んだ人もあります。さう云ふ人は催眠術に掛り易いのです。衆議院議員の中にも被暗示性の多い者があつて、米搗議員と云ふのがあります。若しそれが米を搗いて辛抱して議員になつたのなら宜いが、さうではなく、或る説の賛否を表するに、定見がない爲めに、一方に立ち掛けてその少數なのを見て止めるなど、恰も米を搗くやうに立つたり坐つたりして居るのです。それが即ち米搗議員で、全く他から暗示されて居るので、即ち他の人が立つから自分も立つといふので、其の精神は誠に簡單であつて、何に賛成したか分らずに立つたり居たりするのです。さう云ふ點は丁度子供と同じ事です。すべて被暗示性に富んで居るものは、何處かでチャン／＼といふ音がすると、直ぐに飛出して「オイ／＼何處だ／＼」と言ひながら驅けて行く連中です。何だか知らずに火事だと速断して方向も分らずに駆け出すのです。さうして火事では無いと聞いて、「何だ詰らぬ」と言つてす／＼歸つて来る位のものであります。かう云ふやうに輕卒ではいけぬけれども、子供の時に被暗示性に乏しければ、教育は出来ませぬ。

(二) 男女と被暗示性 そこで此の性質は男女どちらが強いかと申しますれば、女の方が強いのです。それですから、婦人は自ら警めないといふ、他から動かされ易いのです。流行を趁ひ人の眞似をするといふことは、皆被暗示性に富んで居るからの事でありました。私は此程或處の葬式に行きました、さうして女學生の様子を見て實に女の被暗示性の強いのに感じました、其時幾百の女學生が慟哭して居ましたけれども、其學生達は死んだ人に對して涙を零す程の關係も無く、又其死んだ人がそれ丈け多くの人から泣かれる程の人でも無いのであります。併しかく一般の女學生が泣くのは、恐らくは其の人の事を悲しい氣の毒だと思つて泣くのでは無く、心の弱い一人二人がその場の光景に打たれて泣くと、他のものも亦之から暗示されて涙が出るやうになつたのでありませう。朝鮮や支那には葬式の時に泣女といふものがあつて、始終盛に泣くさうであります、是等も眞に悲しい爲めではなく、又必ずしも作り泣きをするのみでなく、被暗示性の爲めに感化が強く實際悲しくなるのでありませう。被暗示性の強いのは婦人の弱點であります、又是れが婦人の美しい點であります。餘り冷淡になつて仕舞つて人が悲んでも平氣で居るやうなのは衰めたことではありませぬ。

(三) 群衆の被暗示性 個人に比すればすべて群衆は被暗示性に富んで居ります。野次馬といふのは即ち是れであります。例へば、日比谷公園あたりに人が數人立つて居ると、「何んだ／＼やれ／＼」と言つて忽ち三十人が五十人になり、百人が二百人と集つて、遂には電車の焼討などといふことが始まり



ます。かう云ふのは被暗示性の強い證據であります。一般に子供は以上の婦人や群集と同じ様に、極めて暗示され易い心の傾向を持つて居ます。

(四) 社會生活と暗示 唯今御話したやうなことは即ち社會に於ける暗示の勢力の一例であります。詰り此世の中は人々互に暗示を受けて居るのです。全く暗示を受けぬ人は世間から孤立して仕舞つて關係が無くなるわけです。それですから幾らか宛互に暗示を受けて頑固のことを言つてゐる人も、何時の間にか世間並に鬚を切り洋服を着、靴を穿くやうになるのです。社會に於ける暗示の勢力は實に大なるものでありまして、宗教上の信仰なども、矢張暗示の勢力で動いてゆくのです。十數年前までは宗教などは殆んど人が顧みなかつたが、此頃宗教といふ事が社會に頗る注意せらるゝやうになつて來たのは、時勢の變化と云ふこともありまされども、矢張社會の上流の人達、世の人の仰いで模範とし、或は模範とせぬまでも一の勢力と見て居るやうな人の中で、宗教の事を説き出し、又自己も信するやうになつた爲めに、其以下の群集も亦自然に感化されて宗教は必要だといふことになつて來たのです。それゆゑ社會の主なる人々が善い事をすれば、全體が善くなり、悪い事をすれば、又全體が悪くなるといふことは、心理上争はれぬ事實であります。諸君の如く、以下に多くの人を有たる、方々は、大に警められねばなりません。曾に一個人としてのみならず、社會に對する務として言行に注意せねばなりません。

## 第七章 記憶

### 第一節 記憶の意義及び過程

(一) 記憶とは何か 吾々の心には前に述べたやうに觀念聯合の働きがあつて、意識に色々の事を憶ひ出させます。一般にはすべて憶ひ出すことを記憶といひますが、學問上から記憶と言ひますと、唯々憶ひ出すといふことではないのです。即ち唯々憶ひ出すこと、記憶との間には區別があります。固より物事を覚えて居り又それを憶ひ出すといふことは記憶の大事な性質ではありますけれども、唯こればかりが記憶では無いのです。若し唯々憶ひ出すのが記憶であるならば、意識の流も記憶で無くてはならぬわけです。併しさうでは無く、記憶には憶ひ出す外に特色があります。それは記憶の過程をお話いたせば明かになります。

(二) 把 住 記憶の過程、即ち記憶作用の進行の第一は把住であります。今私が御話して居ることを諸君が心の中によくお留めになれば把住であります。把の字は捕まへるといふ字、住の字は住所など、言つてチャンと留めて置くといふことであります。それですから私のお話を諸君の頭腦の中によく



お留になれば、それは諸君が把住されたのであります。併しながらそれを留めて置いたばかりでは仕方が無い。今の演説の御話は何ひました誠によく分りましたと言つても、それを餘り奥へ入れ過ぎて仕舞つて、出さうとする時にさつぱり出ないでは仕方が無いのです。奥へ入れるのなら未だ善いが、實は右の耳から聞いて左の耳へ出すといふのでは把住も出来ないのです。いづれにしても記憶の初めには、記憶すべき事柄を捕まへることが必要であります。

(三)復 現 其次には復現、即ち憶ひ出すことです。前の例で申しますと、諸君が後日今日の講義を必要に應じてお憶ひ出しになることとあります。併しながらその憶ひ出すのが、何處で聞いたか何時聞いたか分らぬで、勝手にヒョイ／＼出て来るのは本當の記憶では無いのです。記憶に最も大事なことは第三の再認といふこととあります。

(四)再 認 再認と云ふのは、例へば、自分の頭腦の中に、ア、是れは大正十三年十月一日に東京の講演會で高島から聞いた話であるといふことが、スツカリチャンと現れて来ることです。即ち眞の記憶には、時間と空間との憶ひ出が極めて大事であります。諸君がよく考へて御覧になると、眞の意味の記憶といふものは存外少ないことを御覺りになるでせう。吾々は色々知つて居るけれども、何處で何時聞いた、讀んだ、經驗したといふことを憶ひ出すことは存外少ないものです。併しそれが眞の記憶であつて、學問上では唯だ之のみを記憶といふのであります。つまり再認作用が完全でなければ確實

な記憶とはならぬのであります。併し多くは何處であつたか何時であつたかといふことは、ボンヤリと出て来るばかりでシツカリとせぬのです。唯だ吾々が熱心に習つたことは今斯うやつて居て考へて見ても、何時何處で聞いたとか、或は何の書の何枚目位の處にあつたといふことまでも分るものです。私は度々斯う云ふ事を講義しましたが、講義する毎に自分の讀んだ書物のページに至るまでもチャンと心の中に浮んで來ます。今斯やつて色々な事を話して居る間にも、私の心には十數年前に讀んだ書物があり／＼と浮んで來ます。かう云ふのが確實な記憶であります。かういふ記憶があれば、今此處に居つても必要に應じて即座に其書の或ページを抜いて用を辨することが出来るのです。女の子が琴の稽古をするのでも、ピアノの稽古をするのでも、皆此通りでありまして、スツカリ覚え込んでしまひ何處から弾き出してもチャンとアトから／＼續々出て來る様になつて來ねばなりません。

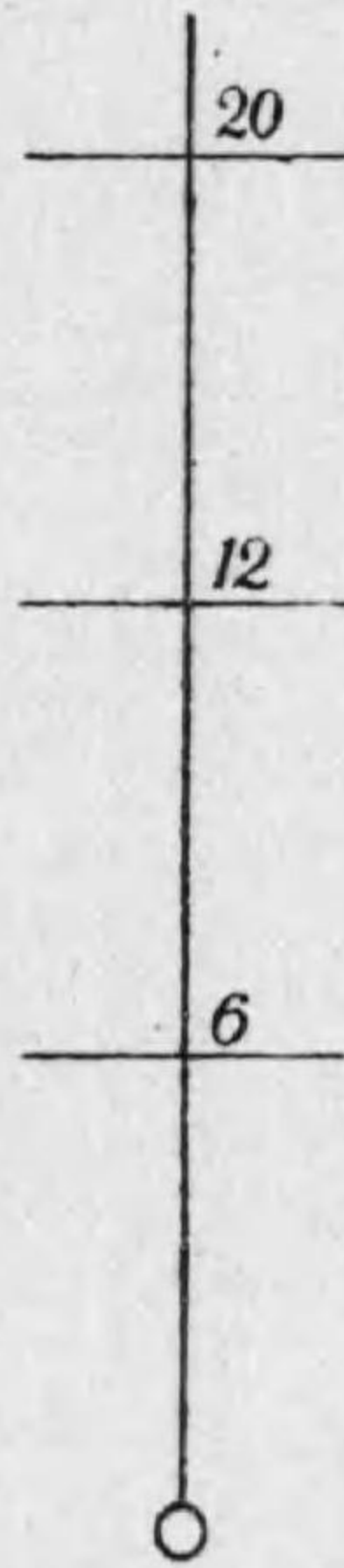
## 第二節 記憶と年齢及び眞質

(一)記憶の發達 次に記憶と年齢及び賢愚との關係を御話しませう。すべて物を覺えるといふことは、大に年齢と關係があります。若い時に物覺が宜いといふのはどう云ふわけであるかといふに、若い時には腦の組織が軟いからして印象をよく留めるのです。チョツと譬へて見れば、軟い物へ型を押せばよく着くやうなものであります。若い時には理屈に由つて覺えるのでは無く、唯見たり聞いたりした



ことを其儘腦に留めるのです。それですから外國の言葉を習ふには六七歳から二十歳前後迄が宜いのであります。語學は理屈でなく、唯其儘に覚えて仕舞ふのが近道です。併しながら道理に關したことをチャンと覺つて固く心に留めるやうな記憶即ち論理的記憶は、モット年寄つて三十位から五十以上になつても盛んな働きをします。女はモウ少し年の若い中に一番盛りが來るのでありますが、どうしても記憶殊に器械的記憶は、年の進むに随つて段々衰へて來るのです。併し又餘り幼い時はいけぬのです。

第五圖



第五圖の下の圈點を生れた時とすると、そのすぐ上の六歳頃から器械的記憶が始まつて、一番盛になるのは十二から二十位まで、あります。それから以後は又次第に下つて來るのです。而して六歳までは殆んど永續する記憶が成り立たぬのであります。それゆゑ何か教へても成長の後は大抵忘れて仕舞ひます。随つて幼稚園に子供をやるのを小學校と同じ様に學課を覚えさせる爲めだと思ふのは間違ひです。又教へる人も理智的に物を覚えさせやうと思ふのは間違ひです。唯、色々の實物に觸れて感

覺を養はしめ、之と共に悪い事をせぬやうに身體の發育を助けてやれば宜いのです。さうすれば習慣が附いて、自然に善い事をする様になつて來ます。

(一) 永續記憶と年齢 生後六歳までは記憶が永續せぬといふことは、どうして分るかといふと、六歳以上で盲人になつた者は夢に幾らか物の形や色を見る事が出來ますけれども、それ以下で盲人になつた人は成長の後殆んど夢に物の形などを見ぬのです。是等の人は如何なる物でも觸れて見て初めて分るのであります。それですから盲人は何でも手に取つて觸ります。人の美醜を辨別するにも、顔を撫で、見て知るといふことです。それ故盲人の細君になると、度々顔を撫でられねばならぬわけです。鼻の高低も撫で、見ねば分らぬのです。要するに盲人の理智的感覚は聽觸二覺ばかりであります。そこで六歳以下で盲目になつたものは、全く此の二感覺に訴へる外ないのです。之に由つて一般の記憶がその頃は充分に成立して居らぬといふことが分るのであります。故に小學校時代が物事を覺えるに一番大事な時であります。随つて小學校の先生は、子供を教へる上に餘程氣を附かねばなりません。子供の生涯に涉つて消えぬ様な記憶を留める時は小學校時代を最も盛んといはします。

(二) 器械的記憶及び論理的記憶と年齢 諸君も御經驗があらませう。二十を過ぎると自分で馬鹿になつたのでは無いかと思ふ程物覚えが悪くなるものです。併しその頃はまだ宜いが、三十位になると、十六七の時の半分位の記憶力しか無いやうになります。殊に物の名前とか數とかいふことは一層よく



忘れるものです。併し是れは決して馬鹿になつたのでは無い、唯だ器械的記憶が衰へたのです。……尤も遊んで居れば馬鹿になりますけれども、……かく記憶力が減つたと云ふのは、一面に道理を考へる力が盛んになつたといふことを證するわけです。それゆゑ其頃からは記憶の餘計要るやうな學問をするのは損です。記憶の事は二十前後で済まして仕舞はねばなりません。三十を過ぎたら道理に關したことを覚えるやうにせねばなりません。假令五十、六十になつても物覚えが悪くなつたというて落膽することはありません。其日／＼の事を一々覚えなくても自分が前に覺えた事で幾らも世の中の事を判斷して行くことが出来ます。又自分の専門に關したことは決してさう忘れるものではありません。私も五十を過ぎて居ますが、今十七八から二十位の青年と自分の専門の學問上の事ならば覚えくらをしても負けない積りです。即ち自分の専門の事ならい／＼知つて居るので、新しい事をそれに同化して行くから、決して物覚えの悪くなる氣遣はありません。それですから諸君は年を取つても自分の専門の事をます／＼勵まれることが肝要です。

(四)記憶と稟質 物を覚えること、賢愚とは、如何なる關係が有りませうか。無論賢愚と云ふことは、記憶の良否のみで極るものではありません。併し賢い人は大概物覚えの良いものであります。時には印度の昔話にある中の茗荷のやうに自分の名を忘れて困るから名を書いて背負つて居つたといふ人のやうに、極端の忘れっぽい人もありますが、一般にかう云ふ人には賢い人は無い。

(五)賢人と記憶 賢い人は覚えが宜い上によく決斷する。即ち此の事は善い此の事は悪い、悪い事はしてはならない善い事はせねばならぬと、チャンと決心して行に現はすものです。これは唯記憶するのとは違ひますけれども、記憶がよく無いとさう云ふ決斷も適當に出來悪いものです。それ故大概の場合にどうも少し智慧が足らぬといふ人は、覚えの悪い人であります。殊に子供の時に於て斯う云ふ事は著しいから、覚えの宜い兒か悪い兒かといふことでほと賢愚を察することが出来ます。併し一概に幼い時に覚えが悪いから詰らぬ者であるといふことは出來ませぬ。子供の時は非常に變はるものでもありますから、初め覚えが悪くて仕方が無い者が、年の進むに隨つて存外偉い者になることもあります。それ故覚えが悪くても必ずしも悲觀するには及びませぬが、先づ大體賢愚と記憶とは伴ふものがあります。

(六)愚人と記憶 殊に賢い人は詰らぬ事を覚えすに必要な事を覚えませんが、愚かな者は假令覚えて居つても、下らぬことを覚えるものです。隣の嫁さんの黒痣の数などを覚えたり、或は前の隠居が何遍咳をしたといふ數を覚えたり、すべてかやうな詰らぬ事を覚えて、自分の大切な學問の事や仕事の事などを忘れて仕舞ふやうな者は、愚なものであります。幼ない時から教育に依つて、人はどう云ふ事を覚えねばならぬ、自分に最も必要なことはどう云ふ事である、自分の職業に取つて大事な事は何であるといふことを教へて、大事な事のみを覚える癖を付けねばなりません。



(七) 試験と記憶 殊に學校の試験に應ずるやうな場合に、賢い者と愚なる者とは勉強の仕力が違ひます。愚なる者は詰らぬことを一生懸命に記憶するから大事な事が抜けて仕舞ふのです。然るに賢い人は此學科の基礎になるのは何であるといふことを見て取つて其事を熱心に勉強して置きますから、假令他のことは忘れても大體の要領を失はぬ丈けのことは覚えて居る。それで又考へ出すことも出来るのです。それゆゑ物を覺えるといふことは、充分心の働らく人と働かぬ人とに依つて大變違つて來るのであります。

### 第三節 記憶と人生

(一) 記憶と生活 記憶と人生とは密接の關係あるものでありまして、吾々の後半生は殆ど記憶に依つて支配されるのです。先づ第一に諸君が世の中に立つて事をなさるに、何が一番の基礎となるかといふと、記憶することでありませう。何事をするにも記憶が土臺になるものであります。例へば、教師をすると言つても、長い間に經驗した事を覚えて居るから出来るのです。又宗教家になれるのも、長い間研究した宗教上の知識を覚えて居るからです。それゆゑ私共の運命は殆ど記憶に依つて支配されて居ると言つても宜いのです。

(二) 轉職の不利 此の事を考へると、前に長い間經驗した事を中途から變へるのは、非常に損の事である。

す。私の知つて居る人で、三十過ぎ四十以上にもなつて自分の職業を他に變へた人がありますが、大抵は成功しません。それはその筈であります。自分が今まで慣れて覚えて來た知識材料を、其適當の方面に使はずして、却つて全く新しい事に這入るのですから、大失敗を來たすのであります。何でも今まで自分のやつたことを續けて、ます／＼研究してゆかねば成功し難いものです。

(三) 記憶と探偵 又探偵が人の記憶を利用して犯人を探し出すことがあります。例へば、私のやうな學問をして居る者が、何か罪を犯して身を隠すとしますと、探偵は彼は今まで長い間教育者として世に立つて居つた、殊に心理學を専攻して居たといふ事をも知つて居ますから、私を尋ねるにも決して土方の處などは探さない。私には到底土方など出来ぬことが分ります。假令礦山のやうな處へ逃げて行つても、穴へ入つて金を掘るやうなことは出来ませんから、何か帳付でもするとか計算方でも勤めるとかいふやうになるのです。そこで探偵は此礦山に此頃かく／＼の人で新に髻を剃つたやうな者が來て帳付でもしては居らぬかといふ様に調べるのです。それと同じく、商人が罪を犯せば、何處に隠れて居つても何か商賣に關係のあることをして居る。百姓ならば百姓のことをやるに違ひない。そこを探偵はチャンと見附けるのです。それですから探偵も拘摸と同じ様に心理學を知つて居るわけです。

(四) 記憶と幸福 それから又記憶は人生の幸福に大關係があります。例へば、人が三十年なり四十年



なりの間色々行つて来た事を年取つてから考へる時に、前半生の行の良否に由つてその心は著しく苦樂を異にするものです。此所には六十位の方は御出でにならぬやうですが、六七十位の方に聽いて御覽なさい。是等の人々は日々經驗したことより自分の若かつた時のことの方が多く思ひ出されるのです。モウ足も利かなくなり目も薄くなつて、新聞を見ることも出來ず、他所へ行くことも懶いやうな老人は、家にじつとして居る時若い時の事を追懷して、或は人を助けた事があるとか斯う云ふ善い事をしたとかいふことを思ひ出すと、愉快に堪へないのです。或は何十年前に困つて居た子供を助けてやつたが今は大さう出世して居るさうであるといふやうな事が心に浮ぶ時は、自分も愉快に感ずるのです。

(五)良心の苛責 然るに之に反して、昔誰にかういふ事をしたが實に可愛想なことであつた、嘸怨んで居るであらう、悪い事をした、といふ様な記憶が續々出て來る場合には自ら己を縛つて苦しくて堪らぬのです。大悪人の法網を逃れて捕まらずに居つた者が、死際になつて幽霊に非常に苦しめられたなどいふ因果談もありますが、是等は心理學上立派に説明の出來ることです。現に私の知つて居る家で、繼兒を虐待した母親に就いて一場の因果話があります。此の家は士族でありました。今では町人でも士族でも金さへあれば家柄などは構はぬといふやうになつて居ますが、昔は士族の跡を繼ぐといふことは大事なことでありました。それゆゑ其繼母は、長男が居ると自分の生んだ子に跡を譲られな

いから、之を虐待して、墮落させて悪い者にしました。よく昔は繼母が我子に跡を繼がせる爲めに先妻の子を毒殺するとか、色々の難癖を附けて逐出すとかいふことがありましたが、此の繼母もやはりその目的で虐待したので、長男は自棄を起して放蕩を始めたのです。そこで繼母はそれを口實にして長男を逐出してしまひ、終に何處へ行つたか分らぬやうになりましたが、その繼母は何れ何處かで變死でもしたものだと思つて其儘に打過ぎました。そこで自分の子が跡を取つて一時はなか／＼盛んにやつたのです。所がその繼母が死ぬ時にどうであつたかと申しますと、其繼兒が來て喰付くと言ふのです。私の母が傍に居て、それは「お前の心の迷ひです、何も居はしませぬ」といひましても、「アッ痛い／＼此處を喰付いたから見て呉れ」と云ふのです、私の母は現に此の状態を見て居つて氣味が悪かつたけれども仕方なしに蒲團を取つて檢すると、喰付いたやうに皮膚が紫色になつて居たさうです。母は因果應報といふことは實に恐いものであるというてよく此の事を話しましたが、之なども確かにかうなる道理のあることです。勿論眞に繼子の幽霊が來たのでは無いのですけれども、自分が若くして血氣の盛んな時には、長男を廢して自分の實子を立たいといふ望が強い爲めに、無情のことも平氣でやつて居たのですが、段々年が寄つて來ると、自分の身體が弱つて來、總べて意地張といふことが衰へて來るから、昔した事が心に浮び「ア、嘸彼れが怨んで居るだらう」と思つて後悔の念が強く起つてくるので、先刻の暗示の働により自ら暗示して、繼子が喰付くと思ひ痛いと感じるのであり



ます。

(六)催眠術に於ける現象 又かゝる異常のことでもなくとも、催眠術を掛けて置けば之と同じやうな現象を生せしめることが出来ます。私は自ら之を試みたことがあります。即ち或人に催眠術を掛けその手に觸つて、「明朝、此所が火傷をした様に赤くなるぞ」と、強く言ひ聞かせて置きますと、果して明日起きて見ると赤くなつて居ます。其反對に足を挫いて脹れて非常に痛んで居る時、こゝに水を付けてやると直きに治ることは實に不思議なほどです。即ち三十分も立たぬうちに脹も痛みも引いて仕舞ひました。たゞかういふことを話しても諸君は信じられないでせうけれども、私は現在之を實行したのです。

(七)前半生の行爲 この位人の精神の力は強いものですから、悪い事をして居るとその刺戟で自ら苦まねばならぬのです。それゆゑ誰でも血氣の盛んな時に俯仰天地に愧ぢぬことをして置いて、年取つてから憶ひ出しても苦しまぬ様にして置かねばなりません。かういふわけでありますから、佛教などで謂ふ因果話も或程度までは學問上から説明が出来ることでもあります。

#### 第四節 良好なる記憶

(一)速に覚えて長く忘れぬこと 一體善き記憶といふのはどう云ふものであるかと申しますれば、是

には先づ第一に早く覚えるといふ事が必要であります。多くの人の中には覚えることは遅いけれども覚えたら容易に忘れぬといふ人もあります。又之に反して、覚えることは速く覚えるけれども忘れることも速いといふ人もあります。ごちらにしても速く覚えるといふことが第一の要件であると共に、長く忘れぬといふことが第二の要件であります。

(二)速に憶出すこと 次に速く覚えて長く忘れなければそれで宜いかといひますと、それでもまだ足らぬのです。大そう慾張つて居るやうであるけれども、モウ一つ要件があります。即ちそれは速く憶ひ出すといふことです。何か憶ひ出さうとする場合に、その望む事が直ぐに出て来るやうでなければなりません。覚えては居るけれどもサア今考へ出さうといふ時に間に合はぬといふやうな事では役に立ちませぬ。例へば、御婦人方で料理の事は大そうよく知つて御出でなさるのであるけれども、御客様があつてサア是から何かお料理を作らうとなさる時に、それが憶ひ出せないでは困ります。お客が歸つて三時間も過ぎてから旨い考が出たのでは、一向役に立ちませぬ。それゆゑよく知つて居て、必要がある時直ぐに出て来る記憶で無くてはなりません。

(三)多方面に涉つて覚えること 以上三つあればそれで宜いかといふに、此上にモウ一つ大事なことがあります。それは物事の記憶は唯だ一方面の事ばかりではいけない。どの方面に掛けてもよく覚えなければならぬことです。例へば、諸君の中にも人の名とか物の數とかをよく御記憶になる方があ



りませう。又その反對に、人の名や物の数は直ぐに忘れて仕舞ふといふ方もありませう。現に私は人の名を覚えることの出来悪い性分で、之を聞いても直ぐに忘れて仕舞ひます。それ故名刺でも貰ふか手帳へでも附けて置かぬと困ることがあります。私の記憶はさう云ふ點で不完全であります。私のみならず、世間にはかう云ふ人が随分少くないと思ひます。是等は何れも良い記憶とはいはれませぬ。事柄も場所も時もちやんと覚えて居るといふやうに、この方面に向つても確實精密の記憶がなくてはなりません。

以上、速に覚えること・長く記憶すること・速に憶出すこと・多方面の記憶の條件が備はりますれば、之れを名づけて善き記憶の人、物覚えの宜い人といふことが出来ます。

## 第五節 記憶の教育

(一) 良好なる記憶法 次ぎには、右に述べたやうな大事な記憶を教育するにはどうしたら宜いかといふことに就いて御話致しませう。言ひ換へれば、吾々が覚えをよくする方法であります。即ち諸君が此の話を聞いて實行なさるなら、確に覚えがよくなるでせう。我國では苦い物を食べると覚えがよくなると申しまして、蒲公英の葉などを食べますが、假令それが多少有効であるにしても、なか／＼そんなやさしいことで記憶がよくなるものではありません。餘程辛抱せねばならぬのです。

(二) 生理的要件 記憶をよくする正常な方法は、先づ第一に生理的の注意です。それはどういふ事であるかといふに、身體が良くなければ決して記憶は宜くなる者では無い。どんなに心を用ゐて記憶に努めても、身體が悪い時即ち病氣の時とか或は病氣は無くとも一體に體が疲れて居るやうな時には、よく覚えられないものではありません。諸君が、斯う云ふ處にお出になつて講義などをお聴になるにしても、餘り身體を疲らせずにお出でにならぬと、たとひお聴きになつても殆どこゝろに残らぬから何にもなりません。すべて身體の健康なことが記憶に取つて最も大切なことでもあります。

併し身體を丈夫にすると言つても、唯骨が丈夫になつたとか、肉が多くなつたとか云ふことでは無いのです。一番大事なのは腦であります。神経系統の健全が最も大事であります。腦の悪い人は物覚えが悪いものです。それゆゑ熱病に罹つた後は誰も覚えが悪くなります。熱病は大そう腦を侵すものです。窒扶斯などに罹つた後はまるで放心したやうになる事があります。窒扶斯の危険なのは心臟に来るか腦に来るかです。腦に来ると謔語を言つたり全く夢中になつたりします。かういふ場合には、假令治つても長時間仕事をする事が出来ぬやうになります。腦が侵されると一般に心の働きの弱るのですが、最も著しく記憶が衰へます。それゆゑ平素から腦を丈夫にして、容易に疲れぬやうにしておくことが大事であります。それにはどうしたら宜いかといふに、食物と運動と攝生と此三つであります。



先づ食物に就いて腦を養ふことをお話いたしました。是は前にもチヨツとお話したと思ひますが、御婦人方は殊に御注意になる必要があります。蛋白質と脂肪質とが神經を養ふに大事な物でありますから、是等を多く含んだものを食べることが必要です。蛋白質といふのは玉子の白味のやうなものであつて、肉の中に含んで居ます。それから又、植物質の中では豆類に最も多くの蛋白質が含まれて居ます。豆類に蛋白質を含んで居ることは逆も動物の肉の比ではありません。殊に豆腐を拵へる豆は非常に滋養になるのです。それ故腦を使ふ人には豆腐や豆のやうな物を食べさせるが宜いのです。是は最もやさしい事です。豆腐から出来る頭腦は軟いかといふに、ナカ／＼堅い頭腦が出来ます。斯う云ふ歌があります。「身はマメで一角あつて軟で豆腐のやうに人に好かれよ」といふのです。人間は健全であつて一角なくてはならぬ。餘り角があり過ると人に突當つて仕方が無い。人が「御寒うございます」といふ時に、「冬に寒いのは當り前です」といふやうに理屈を言ふやうになつては困ります。そこで軟かに柔和にして、人が「お寒うございます」と言つたら、自分も「お寒うございます」と調子を合せるが宜いのです。又豆腐は大概の人に好かれますから、豆腐のやうに人に好かれよというたのでせう。これは誠によい教訓の歌です。吾々は之を守らねばなりません。豆腐は實際に滋養分が多いから、宗教家・教育家・其外商人などで大そう腦を使ふ人は、豆腐には限りませぬけれども、蛋白質を攝るがよいのです。さうすれば、之に依つて頭腦が養はれ、何時までもしつかりして記憶もよく出来るので

す。醫者があまり食物のことなどやかましくいふと、貧乏人は腦を良くすることは出来ない皆馬鹿にならねばならぬ、貧すれば鈍するといふ者もありますが、豆や豆腐は廉いものでありますから、高い金を掛けぬでも立派な滋養が攝れ、随つて貧しい人も腦を養ふことが出来ます。

それから又脂肪も大事な物であります。車でも油が無くなるとギ／＼言つて廻り悪くなります。それゆゑ坂道や道の悪い處にゆくと、車夫が車に油を注します。そうすると車がよく廻つて大そう樂になります。それが、それと同じ事で、人の身體中に油が適度にあれば機關の働が容易であります。そこで腦が働いても疲れぬし、肺臟が働いても疲れぬのです。總て何の働をするにも、脂肪が適度にあれば、疲れが少いのです。それなら石油を澤山呑んだら宜いかといふに、それはいけない。石油を呑めば死んでしまひます。人が食べて毒にならぬ脂肪はちやんと極まつて居ます。魚鳥獸にある脂肪、或は胡麻の油、樵の油などは、皆人の身體を養ふに大事な物であります。近年肺病が我國にも殖えて来て、我國人の死亡率は肺病が大部分を占めて居るさうです。その原因はいろ／＼ありませうが、食物に脂肪の足りぬといふこともかういふ病氣に罹り易い傾きを來すといふことです。曾て亞米利加で學生に大そう肺病が流行つた時に、其の原因を調べますと、學生がバターを食べないことが餘程關係して居るらしいといふことが分つたのです。バターはなか／＼高いから、學生が之を買はずにパンばかり食べて水を呑んで居つたのです。丁度人が金魚のやうなことをやつて居つたのです。さうして勉強するから、



非常に身體が疲れる、そこへバクテリアが来るから、直ぐに肺を侵されるのであらうと云ふことで、亞米利加の政府が大そう骨を折つてバタ及び一般の食物が安く出来るやうに努めたのです。今日亞米利加の物の相場は、少くとも日本の數倍でありませう。併し食物は寧ろ日本より安いのです。亞米利加の料理屋などへ行くと、牛乳は随意に飲まれるやうになつて居るさうです。我國でも蕎麥屋の湯だけは只ですが、牛乳はなか／＼さうはゆきません。勿論亞米利加でも何か料理を食べなくては牛乳ばかり價を拂はずに飲むといふことは出来ませぬが、他の料理を食べれば牛乳はいくらでも只ださうです。こんな風で食物を安くし脂肪など充分に得られるやうにしたから、學生の肺病に罹る者が減つたさうです。丁度それと同じ様に、滋養分を含んだ物を適度に食べ、そうしてそれが消化されて養ひになれば、生理上から人の氣力は随分永く續くから、年が寄つても毫けて直ぐに物を忘れて仕舞つて困るといふことは比較的にならぬでせう。併し幾ら滋養に富んだものを食べても、非常に年が寄れば物覚えの悪くなるのは當り前です。たゞ早く疲れぬこと又は疑ひありません。それゆゑ子供を教育する父母は、食物によく氣を付けてやらねばなりません。すべて脂肪や蛋白質は、植物のものも動物のものも同じ効をなすさうでありますから、いづれからでもさう云ふ物を適度に配合して食物を作ることは、御婦人方が料理をなさるに大事なことであります。

もう一つ注意して置くべきことは、記憶には時間によつて良否のあることです。即ち朝起きてから

晝御飯までの間は記憶に最も宜しい時です。今まで小學校などで一番始めの時間に一番大事なことを教へましたけれども、それはよくないのです。朝の始の時間はまださう云ふ精神的の働きをするのに適して居ません。それゆゑ始の時間には比較的によさしい事を教へ、次の時間に大事な又六つかしい事を教へるやうにするのがよいのです。例へば、八時に始まるならば九時から十時まで、九時に始まるならば十時から十一時までが一番大切な好い時間でありませぬ。晝からならば一時頃から二時半頃までが一番宜いのですから、さう云ふ時にシツカリと教へた事はよく覺えるものです。一番不可なのは、四時から五時位の間です。此の頃は身心ともに疲れて居てすべての働きが鈍いのです。自轉車に乗る人は氣を付けるとよく分ります。即ち其の頃になると、車が非常に重くなります。然るに朝九時から十時頃には、車が非常に軽くなつて誰か油を注して呉れたかと思ふ位であります。心も其通りでありますから、一般に九時十時頃に勉強して物を考へるが最も宜いのです。尤も非凡な人は取除けであります。まして何時でもよく心が働きますが、先づ普通の人ならば午前の盛んな時が最もよく記憶の出来る時であります。

(三) 物理的要件 次に記憶教育の物理的要件に就いてお話いたしませう。第一に物をよく覚えやうとするには、その境遇に注意し騒がしい所を避けねばなりません。目に觸れ耳に觸れる物の多い落ち着かぬ處で物を聞いたり讀んだり見たりするやうな事は、記憶し悪いものです。眞に大事なことで記憶



せねばならぬと思つたらば、力めて静かな處で熱心にそれに注意する事が出来るやうにせねばなりません。勿論町の中で取引をすとか話をすとかいふ時には、幾ら騒がしくてもやらねばなりません。それが、それにしても全然注意を其所に集めてせねば出来ませぬ。それ故西洋の間などで取引のお話をするには、硝子で仕切つて外の方の音が聞へぬやうにして静かな處で二人差向いで話が出来るやうになつて居ります。銀行などでも部屋がいくつも別々になつて居る處もあります。それは話が互の心に入つて明かに記憶に残るやうにせねばならぬからです。それ故子供に話して聞かせることでも、大事なことは静かな時や處を選ばねばなりません。夜寝る前などが宜いと言つたのは、一はこれが爲めであり、二は世間の静まつた時に言葉を改めて言つて聞かせればハッキリと分る。學校でも先生が物を教へる時に周囲がわや／＼騒がしい様では記憶は出来ません。さう云ふ時には鞭で黒板を叩いて吃驚させて鎮めてもだめです。たび／＼そんな事をやると、又先生の十八番が始まつたといつて、一向生徒が注意しなくなり、それゆゑ教場の騒ぎを鎮めやうと思つたら、暫くの間黙つて子供全體を見廻はすがよいのです。子供は先生から黙つて見廻されると、氣味が悪いから氣を附けるやうになります。是は演説の秘訣であります。餘り饒舌つて居ると却つて注意を牽かぬものです。少時黙つて居ると、非常に聴衆の注意を高めるものです。かうやつて静かになつた時に大事なことを言ひ出すとよく貫徹します。これも矢張物理的要件として周囲が静かになるから、耳によく留まり腦によく這入るのです。

モウ一つは印象の鮮明といふことが必要であります。それには話す聲も關係があります。諸君が説教をお聞きになつても演説をお聞きになつても、聲が明瞭でよく徹底する人と、破鐘を撞くやうに耳にガン／＼響く人とありませう。後のやうな人は、何を言ふのかサツパリ譯が分らぬでせう。或は又内所の話でもするやうに、下の方を向いて愚圖／＼言つて居る人がありませう。或は又或は又聲で、語尾までもスツカリ分る人もあれば、何でござりますと言ふのか、何でござりませぬと言ふのかサツパリ分らぬやうなものもありませう。概して關東の婦人の言葉は、語尾が明瞭でありますけれども、關西の婦人の言葉には、語尾の不明瞭なのが幾らもあります。さう云ふのは記憶に留め悪いものです。すべてチャンと明瞭に話されることはよく覚えられけれども、さうでないのは印象が不明で記憶し難いものです。これは管に言葉ばかりでなく、繪に描いても字に書いても、ハッキリとしたものはよく分るから、覺えることも確實です。それゆゑ諸君が大事なことを記憶なさるには、書物も良い紙で印刷の鮮明なものを選んでお讀みになれば記憶もよく出来ませう。廉い本でばや／＼の紙に滅茶に印刷したものであると注意することも少く、印象も不明で覚えもよくないものです。耳から這入るものでも眼から這入る物でも、明かに感ずる刺激はよく記憶せられます。

(四) 心理的要件 最後は心理的要件であります。第一に注意を善くしなければなりません。氣を附けるといふことは何事にも大事でありますけれども、記憶には特に必要であります。諸君が面白い事を



よく記憶なさるのには、これに注意なさることが深いからです。假令非常に六づかしいことでも、平凡の事よりも割合によく覚えられるのは、六づかしいと思へば氣を附けるからです。何でも自分の利害に關係した事とか苦樂に關係した事は、注意を惹くからよく覚えるのです。それですから、何事でもよく覚えやうとしたら、一生懸命にその事に心を寄せるやうにせねばなりません。

第二には、反復することです。即ち繰返すことが記憶に必要であります。昔から讀書百遍義自ら通ずと言つてある通り何遍も讀んで居れば意味が解つてよく覚えられるものです。反復といふ事は、今の學校の教育には頗る怠られて居つて、何でもズーツと一遍學ぶとその後は棄て、置くことが多いのですが、大事な本は何遍も繰返して讀まねばなりません。例へば、宗教上の經文のやうなものは、毎日度々繰返して少しづつ讀み、終りまで行つては又繰返して讀むやうにすれば、終に忘れぬやうになります。どんな事でも大切な事は反復せねばなりません。

第三は記憶すべき事柄をよく整頓することです。整頓といふことは、例へば、講義を聴いても、チャンと次第順序を逐うて頭腦に入れることです。即ち一番始めには斯う云ふ話があつた、其次には斯う云ふ話があつて、終には斯うであつたといふやうに、チャンと心中に順序を立て、其順序に随つて覚えることが必要です。然るにアツチを覚えユツチを覚えるといふやうに飛び／＼に覚えて居つては、到底確實に覚えることは出来ません。つまり何であるか要領を得ませんから後に働かす時に役に立ちませぬ。

せぬ。

第四は聯想の應用です。例へば、鑿と言へば槌といふ様に、色々の事をよく記憶して居る事に結び付けて置くことが大事であります。注意にも反復にも總て聯想法を應用することが出来ます。即ち何か一つ覚えやうと思つたら、自分がよく知つて居る事に結び付けて置くのです。かうすれば忘れやうと思つても忘れぬやうになるものです。私は唯だ一つ朝鮮語を知つて居ります。それは「ソレミロハナゴスン」といふことであります。是は朝鮮語で「人といふ者は」といふ事ださうであります。私はそれを前韓國農商工部大臣であつて日韓併合に盡力して子爵になつた趙重應といふ人から聞きました。其人は曾て私の家に寓して居つたことがあります。或時自分が國に歸つたら人民を集めて演説をする。その時には「ソレミロハナゴスン」云々といふ冒頭で説き出すと申しました。私は之を聞いてあまり可笑しく思ひましたから、それは何の事であるかと問ひましたら、「人といふ者は」といふことだと申しました。これは皆さんも決してお忘れにならぬでせう。即ち日本語の「それ見る鼻五寸」といふこと、朝鮮語とを聯合して居るから忘れぬのであります。

西洋の言葉でもかう云ふやうにして覚えておくと忘れませぬ。例へば、犬の寢所のことを英語でケネル Kennel といひますが犬が寢るから、犬寢るでせう。かう云ふ工合にするとよく覚えられます。併し餘りそれを濫用すると前に話した、取除けを軍鶏の毛と間違へるやうな事になるから注意せねばな



りませぬが、適當に聯想を應用すれば記憶は必ず出來ます。

凡そ心理的に記憶を善くするには、以上に擧げたより外に方法は無いのです。例へば、物を覺えるに筆記する人があります。本はありますけれども本丈けでは自分の記憶に都合が悪いから、抜き書きをするのです。それは整頓の法であります。それから本へ印を附けることもあり、又婦人などには或る事を思ひ出す爲めに指を縛つて置く人もあります。つまり指が縛つてあれば之に注意するから、是は何の爲であつたらう。ア、さうであつたと云ふやうに思ひ出すのです。それから耶蘇教信者が毎日バイブルを繰返すのは反復であります。坊さんが毎日御經を讀むのも反復であります。其他いろ／＼の方法も皆以上のいづれにか分類することが出來ます。之を自由に應用して行けば、記憶は必ず良くなります。是は學校でも何處でも一般に出來る記憶の教育法であります。

## 第六節 助記法

(一) 助記法の心理 次には助記法に就いて御話致しませう。助記法は英語のネモニクス Mnemonics. を譯したのです。是は大さうな技術であり學問であるかの如くに廣告して世に吹聴する者が往々あります。先年和田守某といふ人が記憶術を發明したと言つて、一時非常に流行つたことがあります。和田守と云ふ人は牢屋の中で之を考へたといふことでありますけれども、心理上から見れば少しも珍ら

しい事でも何でもありません。今後學問が非常に變つて來れば知らぬ事、今日の學問の力では、今私がお話した外の方法を以つて奇術的に覺えをよくするといふ事は決してありません。併し所謂記憶法とか助記法とかいふことはどういふ事をするのであるかと申しますれば、先づ次の通りであります。

(二) 助記法の例 助記法即ち記憶術には色々ありますが、その中の一番簡單なものを御話いたしますと、先づ百なり二百なり諸君のよく／＼知つて居らるゝことを、心の中に順序を立て、思ひ出して結び付ける基礎を作ります。併し二百も知つて居ることを順に思ひ出すことは六づかしいといふ人があるかも知れませぬが、それはさほご六づかしくは無いものです。例へば、諸君の住まつてお出なさる家のことは忘れやうと思はれても忘れられぬでせう。尤も昨日引越をしたばかりといふやうな人は例外でありますけれども、十年も二十年も住つた家なら、何時考へてもすぐ心に浮ぶでせう。先づ門があり、門を這入ると敷石があり、之を段々傳つて行くと玄關がある。玄關には板の間があつて、それから障子がある。障子を明ければ三疊なり四疊なりの間がある。こゝに書生が居る。其の右の方を通つてゆくと座敷がある。座敷の左に違棚があり、右の方に床がある。それから其床の脇を行くと簷がある。簷の先に庭があり、庭の先に池がある。といふやうにすれば、百でも二百でもわけなく擧げることが出來ます。今一々擧げて居れば時間が経つて仕舞ますから好い加減に致しますが、さう云ふやうに諸君が自分の事を考へて御覽なされると、直ぐに二百位の順序は出來て仕舞ませう。さてそうし



てどうするかと申しますに、先づ朋友に向つて「百でも百五十でも君の勝手な物の名を僕に言つて見給へ、僕はチャンと覚えて居て少しも間違ひ無く順を逐うて答へて見せる」といふのです。そうすると友は「其れは面白い、そんなら言はふ」といふことで、例へば、猫といふでせう。そうすると、猫が門の處へ踞んで居ると考へて、猫と門とを聯合させて置くのです。其次には猫に少しも關係の無い時計を擧げるとしませう。そうすると、門を明けた直ぐの處に時計が落ちてあつたと考へるのです。次に梅の花といふと、人が梅の花を持つて來て玄關へ置いて呉れたと考へるといふやうに、何を言つても皆自分の知つて居ること、聯合させて置くのです。偕友の物の名を擧げることが濟んで、さあ順にくりかへして見るといふ場合には、門に猫が臥て居つた、時計が其處にあつた、梅の花が玄關にあつたと、次ぎ／＼に考へ出して答へるのです。又五十番目から先きを言つて見よといはれたら、五十番目を考へてそれから先きを言ひ、百番目を問はれたら次第に百に進めて考へれば、チャンと答が出來ます。これは少し練習すれば樂に出來るやうになります。記憶術は先づかう云ふものであります。

(三) 數の記憶術 又物の數は實に覚え悪いものでありますから、之を覚える爲に數を色々な言葉に直して覚える法があります。是れもマア一寸慰みにやつて見る位のものであります。是は一寸面倒であります。けれども面白いことでもありますからお話して置きませう。是れはナカ／＼秘傳です」などと、世間で賣つて居る者なら勿體を附けて言ふ所です。

ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ	ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ	ヰ	ウ	ヱ	ヲ					
									9
									8
									7
									6
									5
									4
									3
									2
									1
									0

斯う云ふ風に五十音に數字を配當するのです。さうして、例へば、オを零とし、コを一とし、ソを二とするやうに、音を數に翻譯して覚えるのです。今富士山の高さ三千七百七十八米突を記憶するとしますと、三千はツを取り、七百はユを取るそこでツユといふ言葉が出來ました。七十は同じくユを取り、八はリを取ります。そこでツユ(露)ユリ(百合)といふ言葉が出來ました。斯うして覚えて仕舞ふと、ツといふのはタチツテトであるから三である。ユはヤイユエヨであるから七である。百合のユ



も同じ事ですから七です。リはラリルレロであるから八であるといふことが分り、詰り三七七八といふことが容易に記憶されます。随つて露と百合とを覚えて居れば、三千七百七十八といふことが出て来るわけでありませう。かういふ様に数を面白い言葉に作つて置くと、存外便利であります。政府の豫算とか人口とか面積とかいふやうな長い数字を覚える時に、自分で作つた言葉を覚えて居つて、明かに言へるやうになるのが此種の助記法の便利な點であります。是は古くから西洋で行はれたことでもあります。併し斯んなことも物好きな話で、之を練習する間にあたりまへの数字を反覆した方が宜いのです。此の他にも便利な助記法は幾らもあります。例へば、頭文字を取つて覚えて居るのもその一です。日光の七色を記憶するにロイグビツツ Royshiv といふことを覚えて居ると何時でも、その順序を忘れることはありません。それは赤 Red 樺 Orange 黄 Yellow 緑 Green 青 Blue 紺 Indigo 堇 Violet の頭字を集めて作つたのです。或る子供が比目魚と蝶とをよく區別して覚えて居りましたが、それは比目魚は左りの方が黒くて黒い方に目があり、蝶は右が黒くて右の方に目があるから、比目魚のヒと左のヒを聯想し、蝶はその反對に右と聯想したのです。

(四)助記法の價值 先づ大體こんなもので、記憶術は殆んど實用にならないやうなものでありますが、其の由つて来る處は奇妙な法則でも何でも無い、皆心理の原則から來て居るのであります。諸君が此後に新聞などに新しい記憶術の廣告があつても、餘りそれに重きを置かれぬ方が宜いでせう。

非常な便法があれば、専門の學者が疾くに必ず試みたであります。

## 第七節 忘 却

(一)失念術 それから次に忘却に就いて一言いたしませう。すべて人は覚える事が大事であると共に、忘れることも亦大事であります。忘れねば記憶するといふことは無いのです。吾々は忘却に由つて多くの幸福を得て居るのです。若し諸君が生れてからズツと經驗なされたことを皆記憶して御出になつたら、子供の時の恥かしいことなどがいろ／＼出て來て仕方がないでせう。夜寝て居て遺尿して親に掃除をして貰つたこともあり、人と喧嘩して酷い目に遭つたこともありませう。さう云ふ事が寝ても起きても忘れられないならば、苦しくて堪らぬでせう。失敗したことや苦しかつた事など總て悪いことはドン／＼忘れて仕舞ふから人は此世の中に活動することが出来るのです。それゆゑ失念術は記憶術と共に大事であります。併し又大事なことを忘れては困ります。道樂息子になつて放蕩の味を覚え、酒色に荒むやうなことがあつてはなりません。そんなことは早く忘れるが宜いのです。そこでかやうな場合には、早く家内を迎へてやるとか、家を持たせるとかして、一方の事を忘れさせるやうにするのです。是等は父母が暗に心理學を應用して居るのです。又年頃の婦人などがヒステリーになつて詰らぬことを苦しめても寝ても忘れぬで困ることがありますが、さう云ふことは早く忘れさせ



る必要がありますから、いろいろの方法を講ずるのです。それから又人に怨みを持つて何時までも忘れないのは修徳上面白くない。是も早く忘れて仕舞ふ必要があります。すべて或事を忘れて仕舞へば我々は新しい事を覚えて進んで行くことが出来るのであります。

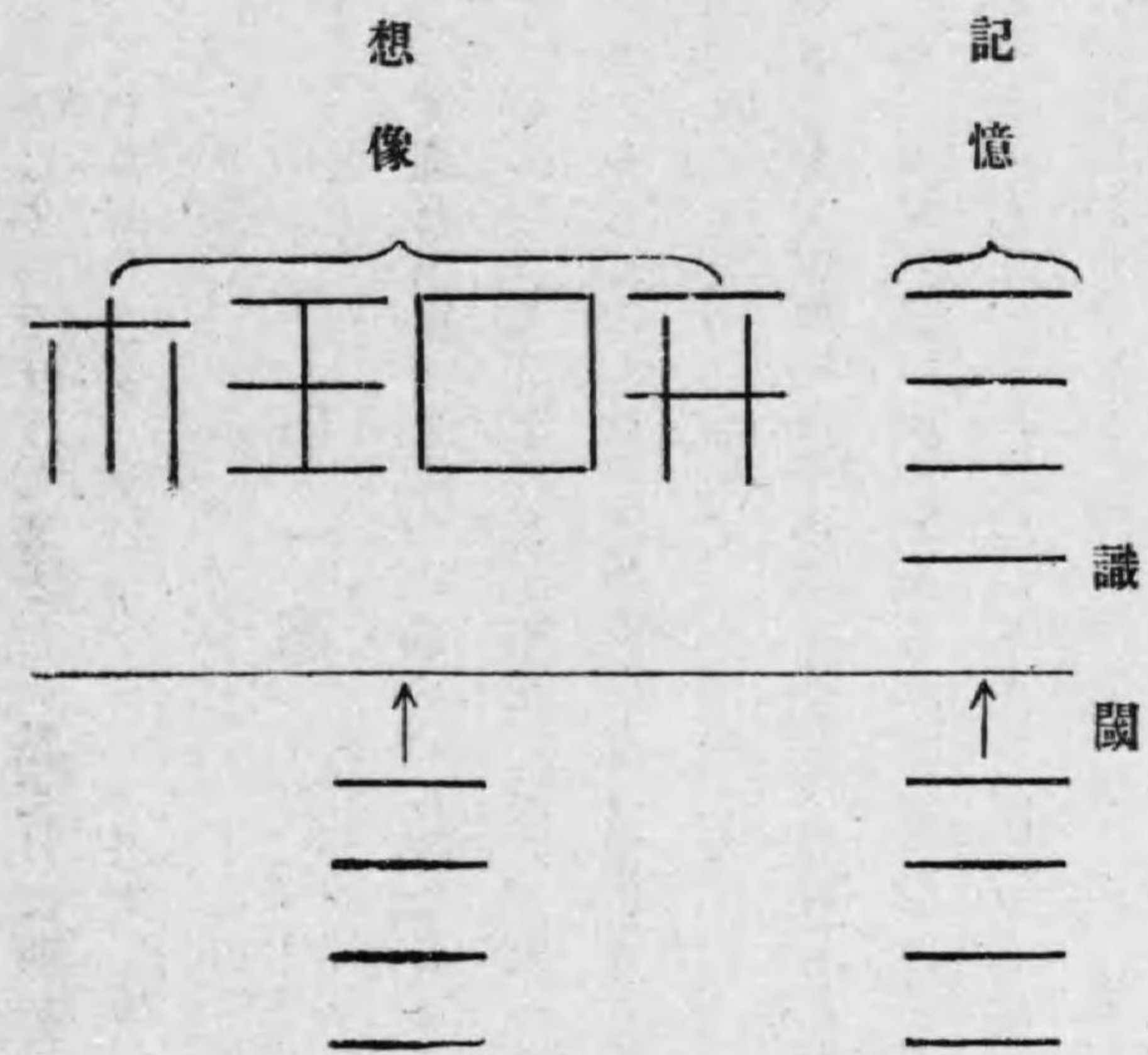
## 第八章 想 像

### 第一節 想像の意義及び其特性

(一) 記憶と想像 想像とはどう云ふ働であるかは、記憶との區別をお話しすればよく分りますから、先づそれからお話を致しませう。記憶と云ふ事は前にお話をして置きました様に、自分が曾て見たり聞いたりしたことを、比較的には違はずにその儘再び心の中に現はして来る作用であります。想像と云ふのは之と違つて前に見たり聞いたりしたことに基いて色々と違つた形なり大ききなり色なりの觀念を作り出す作用であります。それ故想像も記憶も曾て一度経験したものが出て来るのでありますけれども、想像の方は違つて出て來、記憶の方はその儘に出て來るのであります。今假に此處に一本の横線があるとして、この横線から下を識閥下と看做して、過ぎ去つた色々な経験が這入つて居るものと定め、此線から上は即ち現在働いて居る心であるとしみます。そこで記憶はどうかと云ふと、過去に経験したこと即ち此線の下にあるものが、その儘に線の上即ち現在の意識に出て來るのです。例へば過去に四つの線を経験したとしますと、それが現在其儘に四つの線として出て來るのです。諸君は今



第六圖



日私に逢つて話をお聞きになりましたが、明日に至つて私のことをお考になつても、矢張り今日の私が諸君の心に現はれるので、別に變つたことは無いでせう。是れは即ち記憶であります。然るに想像となると、前の四つの線を経験したことは記憶と同じであつても、再び現はれるときには色々と形を變へて出て來るのであります。例へば、今まで横線の下にあつた所の四つの線が、井戸側になり、鳥居になり、四角な形になり、王の字になり、ホの字になるの類であります。即ち前に経験したものが材料になつて、その組合せが變つて來るのが想像であります。平生記憶と想像とドツチが多く現はれて來るかといふことは分りませんが、想像の多く現はれて來ることは事實です。即ち前に見たり聞いたりした儘に再び現はれるものは。存外少なく、幾分か變つて來るのが常

であります。例へば、諸君が私のことをお考へなさるのでも、スツカリその儘に覺えてお出なさるといふことは少いでせう。著るしい點だけは明かに覺えて居られるのでせうが、細かい點になるとぼんやりして居ますから、後からいろいろ想像で補つて行かれるでせう。どうです諸君、細君をお貰ひになる時、見合をして歸つて、後で考へると、何だかぼんやりして顔がよく分らない。モウ少しよく見て來れば宜かつたといふやうなことがありませう。その時全體として其の候補者を好んで居られるなら眼も鼻も想像で補つて大そう宜かつたといふことになり、それからいよいよ結婚と進んでゆくのです。かくの如く想像は常に前の經驗と變つて現はれるのであります。併し現はれるとはいひますが、自然に現はれて來る場合もあり、自分で態と組み立て、現はす場合もあります。それ故今先づ後の場合をお話いたしませう。

(一)想像の材料 次に想像の内容と形式との事をお話いたします。内容と云ふのはつまり想像の材料であります。何が想像を組立てるかと云ふに、それは材料が無くてはなりません。何も種子が無くては手品が出来ないやうに、考へる事も材料なしでは出来ない。例へば、御婦人方が着物をお作りになる時に、積りと云ふことをなさるでせう。積りは即ち想像であります。併し積り計りしても着物の材料が無くては空になつて仕舞ひます。貧乏人は幾ら積りしても材料が無いから着物を實現することが出来ないのです。それ故空想になつてしまひます。若し其處に古い着物があると、アソコの衽を此